ふべくもあらず。唯御心ちのよろしう見え給ふぞ胸すこしあき給ふ。かしこより又御文あり。「心ゑらぬ人しもとりいれて大將殿より少將の君にとて御文あり」といふぞ又侘しきや。少將御文はとりつ。御息所「いかなる御文にか」とさすがに問ひ給ふ。人ゑれずおぼし弱る御心もそひてゑたに待ち聞え給ひけるに、さもあらぬなめりとおぼすも心さわぎして「いでその御文なほ聞え給へ。あいなし。人の御名をよざまにいひなほす人はかたきものなり。そこに心ぎようおぼすとも、ゑかもちゐる人は少くこそあらめ。心うつくしきやうに聞えかよひ給ひて猶ありしまゝならむこそよからめ。あいなきあまえたるさまなるべし」とて召しよす。苦しけれど奉りつ。「あさましき御心のほどを見奉りあらはいてこそなかなかひたぶる心もつき侍りぬべけれ。

せくからにあさくぞ見えむ山川のながれての名をつゝみはてずは」とことばもおほかれど見もはて給はず。この御文もけざやかなる氣色にもあらでめざましげに心ちよがほに今宵もつれなきをいといみじとおぼす。かんの君の御心ざまの思はずなりし時いとうしと思ひしかど、大方のもてなしは又ならぶ人なかりしかばこなたに力ある心ちしてなぐさめしだに世に心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむことゝ思ひゑみ給ふ。猶いかゞのたまふと氣色をだに見むと、心ちのかき亂りくるゝやうにゑ給ふ。めをしゑぼりてあやしき鳥の跡のやうに書き給ふ。「頼もしげなくなりにて侍る、とぶらひに渡り給へるをりにてそゝのかし聞ゆれど、いとはればれしからぬさまに物し給ふめれば、見給

へわづらひてなむ、

女郎花ゑをるゝ野邊をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ」とたどかささしておしひねりて出し給ひて臥し給ひぬるまゝに、いといたく苦しがり給ふ。御物のけのたゆめけるにやと人々いひ騒ぐ。例のげんあるかぎりいと騒がしうのゝしる。「宮をば猶渡らせ給ひね」と人々聞ゆれど御身のうさまゝに後れ聞えじとおぼせばつとそひ給へり。大將殿はこの聖つ方より三條殿におはしにける。今宵立ちかへりまうで給はむにことしもありがほにまだきに聞き苦しかるべしなど念じ給ひて、いとなかなか年比の心もとなさよりもちへにもの思ひかさねて歎き給ふ。北の方はかゝる御ありきの氣色ほのぎゝて心やましと聞き居給へるにゑらぬやうにて君達もて遊びまぎらはしつゝ、我が聖のおましにふし給へり。宵過ぐる程にぞこの御返りもて參れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば頓にもとき給はで大となぶら近うとりよせて見給ふ。女君物隔てたるやうなれどいと疾く見つけ給ひてはひよりて御後よりとり給ひつ。「あさましうこはいかにゑ給ふぞ。あなけしからず。六條の東の上の御文なり。けさ風おこりてなやましげにゑ給へるを、院の御前に侍りて出づる程又もまうでずなりぬればいとほしさに今のまいかにと聞えたりつるなり。見給へよ、けさうびたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月にそへていたうあなづり給ふこそうれたけれ。思はむ所をむげにはぢ給はぬよ」と打ちうめきてをしみがほにもひこじろひ給はねばさすがにふとも見でも給へり。「年月にそふるあなづらはしさは御心ならひなべかめり」と

ばかり、かくうるはしだち給へるに憚りて若やかにをかしさましてのたまへばうち笑ひて「そはともかくもあらむ。世の常のことなり。又あらじかし。よろしうなりぬるをのこのかくまがふ方なくひとつ所を守らへて物おぢしたる鳥のせうようのものゝやうなるはいかに人笑ふらむ。さるかたくなしきものにまもられ給ふは御ためにもたけからずや。あまたが中に猶きはまさり殊なるけぢめ見えたるこそよその覺えも心にくゝ我が心ちも猶ふりがたくをかしきことも哀なるすぢもたえざらめ。かく翁のなにがしまもりけむやうにをれまどひたればいとぞ口をしき。いづこのはえかあらむ」とさすがにこの文の氣色なくをこづりとらむの心にて欺き申し給へば、いと匂ひやかにうち笑ひて「物のはえばえしさつくり出で給ふ程、ふりぬる人くるしや。いと今めかしくなりかはれる御氣色のすさまじさも見習はずなりにけることとなればいとなむ苦しき。かねてよりならはし給はで」とかこち給ふもにくゝもあらず。「俄にとおぼすばかりには何事か見ゆらむ。いとうたてある御心のくまかな。よからず物聞えおらする人ぞあるべき。怪しうもとよりまろをば許さぬぞかし。猶かの綠の袖のなごりあなづらはしきにことつけてもてなし奉らむと思ふやうあるにや。いろいろ聞きにくき事どもほのめくめり。あいなき人の御ためにもいとほしう」などのたまへど遂にあるべき事とおぼせばことにあらがはず。大輔の乳母いと苦しとゝて物も聞えず、とかくいひまろひてこの御文はひきかくし給ひつればせめてもあさりとらでつれなく大殿籠りぬれば胸はしりて、いかでとりてしがなと御息所の御文なめり。何事ありつらむと目もあはず思ひふし給へり。女君の寢給へるによべのおましのまたなどさりげなくて搜り給へどなし。隱し給へらむ程もなければいと心やましくて明けぬれど頓にも起き給はず。女君は君達におどろかされてねざり出で給ふにぞ、われも今起き給ふやうにて萬にうかゞひ給へどえ見つけ給はず。女はかく求めむとも思ひ給へらぬをぞ、げにけさうなき御文なりけりと心にも入れねば君達のあわて遊びひゝなつくりするゑて遊び給ふ。文よみ手ならひなどさまざまにいとあわたゞしくちひさきちごはひかゝりひきまろへばとりし文のとも思ひ出で給はず。男はこと事もおぼえ給はずかしこに疾く聞えむと覺すに、よべの御文のさまもえたしかに見ずなりにしかば見ぬさまならむもちらしてけると推し量り給ふべしなど思ひ亂れ給ふ。誰もたれも御だい參りなどして長閑になりぬる昼つかた思ひわづらひて「よべの御文は何事かありし。あやしう見せ給はで今日もとぶらひ聞ゆべし。なやましうて六條にもえ參るまじければ文をこそは奉らめ。何事かありけむ」との給ふがいとさりげなければ、文はをこがましうとりてけりとすさまじうてその事をばかけ給はず。「一夜の深山風にあやまち給へるなやましさなりとをかしきやうにかこち聞え給へかし」と聞え給ふ。「いでこのひがごとな常にのたまひそ。何のをかしきやうかある。世人になずらへ給ふこそなかなかはづかしけれ。この女房達もかつはあやしきまめざまをかくのたまふことほゝゑむらむものを」とたはぶれごとにいひなして「その文よいづら」との給へば「しばしふし給へる程に暮れにけり。ひぐらしの聲に驚きて、山のかげいかに霧ふたがりぬら

む、あさましや、今日この御返事をだにといとほしうて唯ちらず顔に硯おしずりていかにな
してしにかとりなさむとながめおはするおましの奥の少しあがりたる所を試みにひきあげ
給へれば、これにさしはさみ給へるなりけりと嬉しうもをこがましうもおぼゆるに、うちゑ
みて見給ふにかう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを心ありて聞き給ひ
けるとおぼすに、いとほしう心苦しうよべだにいかに思ひ明し給ひけむ、今日も今まで文を
だにといはむ方なくおぼゆ。いと苦しげにいふかひなくかき紛はし給へるさまにて、おぼろ
げに思ひあまりてやはかく書き給へつらむ、つれなくて今宵のあけつらむといふべき方の
なければ女君ぞいとつらう心うき、すゞろにかくあたへかくして いでや我がならはしぞや
とさまざまに身もつらくすべて泣きぬべき心ちぞ給ふ。やがて出で立ちたまはむとするを、
心やすく對面もあらざらむものから人もかくのたまふ、いかならむ、坎日にもありけるをも
したまさかに思ひゆるし給はゞ惡しからむ、猶よからむことをこそと、うるはしき心におぼ
してまづこの御返しを聞え給ふ。「いとめづらしき御文をかたがた嬉しう見給ふにこの御と
がめをなむ。いかに聞しめしたることにか。
　秋の野の草のまげみは分けしかどかりねの枕むすびやはせし。あきらめ聞えさするも
あやなけれどよべの罪はひたやごもりにや」とあり。宮にはいと多く聞え給ひてみまやにあ
しとき御馬にうつしおきて一夜のたいふをぞ奉れ給ふ。「よべより六條院にさぶらひて只今
なむ罷でつるといへ」とていふべきやうさゝめき教へ給ふ。かしこにはよべもつれなく見え

給ひし御氣色を、忍びあへで後の聞えをもつゝみあへず恨み聞え給ひしをその御返りだに
見えず。今日の暮れはてぬるをいかばかりの御心にかはともてはなれてあさましう心も碎
けてよろしかりつる御心ち又いとたう惱み給ふ。なかなかさうじみの御心のうちは、この
ふじを殊に憂しとおぼし驚くべきとしなければ、唯覺えぬ人にうち解けたりし有樣を見え
しことばかりこそ口をしけれ、いとしもおぼしまぬをかくいみじうおぼいたるをあさま
しうはづかしうあきらめ聞え給ふ方なくて 例よりも物はぢ給へる氣色見え給ふを、いと
心苦しう物をのみおぼしそぶべかりけると見奉るも 胸つとふたがりて悲しければ「今更に
むつかしき事をば聞えじと思へど、猶御宿世とはいひながら思はずに心をさなくて 人のも
ときをおひ給ふべきことを取り返すべき事にはあらねど、今よりは猶さる心ぢ給へ。數なら
ぬ身ながらも萬にはぐゝみ聞えつるを今は何事をもおぼしあり世の中のとざまかうざまの
有樣をもおぼしたどりぬべき程に見奉りおきつることゝ、そなたざまは後安くこそ見奉り
つれ。猶いといはけて強き御心おきてのなかりける事と思ひ亂れ侍るに、今暫しの命もとゞ
めまほしうなむ。たゞ人だに少しよろしくなりぬる女の ひとふたりと見るためしは心うく
あはつけきわざなるを、ましてかゝる御身にはさばかりおぼろげにて人の近づき聞ゆべき
にもあらぬを思の外に心にもつかぬ有樣と年比も見奉りなやみしかど、さるべき御宿世に
こそは。院よりはじめ奉りておぼしなびき、この父おとゞにもゆるひ給ふべき御氣色ありし
に、おのれ一人しも心をたてゝいかゞはと思ひよわり侍りし事なれど 末の世までものしき

御有様を、我が御あやまちならぬに大空をかこちて見奉りすぐすを、いとかう人のため我がためよろづに聞きにくかりぬべき事の出できそひぬべきが、さてもよその御名をばあらぬ顔にてよのつねの御有様にだにあらばおのづからありへむにつけても慰む事もやと思ひなし侍るを、こよなう情なき人の御心にも侍りけるかな」とつぶつぶと泣き給ふ。いとわりなくおしこめての給ふを、あらがひはるけむ言の葉もなくて唯打ち泣き給へるさまおほどかにらうたげなり。うちまもりつゝ「あはれ何事かは人に劣り給へる。いかなる御すくせにてやすからず物を深くおぼすべき契深かりけむ」などのたまふまゝにいみじう苦しうあ給ふ。ものゝけなどもかゝるよわめに所うるものなりければ俄に消え入りてたゞひえにひえ入り給ふ。律師も騒ぎたち給うて願などたてのゝあり給ふ。深きちかひにて今は命を限りける山ごもりをかくまでおぼろげならず出て立ちて壇毀ちて歸り入らむとのめいぼくなく佛もつらく覺え給ふべきことを、心を起して祈り申し給ふ。宮の泣き惑ひ給ふ事いとことわりなかし。かく騒ぐ程に大將殿より御文とりいれたるほのかに聞き給ひて、今宵もおはすまじきなめりとうち聞き給ふ。心うく世のためしにもひかれ給ふべきなめり、何に我さへさる言の葉を殘しけむとさまざまおぼし出づるにやがて絶えいり給ひぬ。あいなくいみじといへばおろかなり。昔より物の氣には時々煩ひ給ふ。限と見ゆる折々もあれば例のごととりいれたるなめりとて加持參りさわげどいまはの樣はあるかりけり。宮はおくれじとおぼしいりてつとそひふし給へり。人々まゐりて「今はいふかひなし。いとかうおぼすともかぎりある道

には歸りおはすべき事にもあらず。慕ひきこえ給ふともいかでか御心にはかなふべき」とさらなることわりを聞えて「いとゆゝしうなき御爲にも罪深きわざなり。今はさらせ給へ」とひきうごかい奉れどすくみたるやうにて物も覺え給はず。修法の壇毀ちてほろほろといづるにさるべきかぎりかたへこそ立ちとまれ、今はかぎりのさまいと悲しう心ぼそし。所々の御とぶらひいつのまにかと見ゆ。大將殿も限なく聞き驚き給ひてまづ聞え給へり。六條院よりも致仕の大殿よりもすべていとあげう聞えたまふ。山のみかども聞しめして いと哀に御文かいたまへり。宮はこの御せうそこにぞ御ぐしもたげ給ふ。「日比重く惱み給ふと聞きわたりつれど例もあつしうのみ聞き侍りつるならひにうちたゆみてなむ、かひなき事をばさるものにて思ひ歎い給ふらむありさまおしはかるなむ哀に心苦しき。なべての世のことわりに覺しなぐさめ給へ」とあり。目も見え給はねど御返しきこえ給ふ。常にさこそあらめとのたまひける事とて今日やがてをさめ奉るとて御甥の大和守にてありけるぞよろづにあつかひ聞えける。骸をだにあばし見奉らむとて宮は惜み聞え給ひけれど、さてもかひあるべきならねば皆急ぎたちてゆゝしげなる程にぞ大將殿おはしたる。「今日よりのち日ついでありけり」など人ぎゝにはの給ひていともかなしう哀に宮のおぼし歎くらむことをおしはかり聞え給ひて「かくしも急ぎ渡り給ふべき事ならず」と人々いさめ聞ゆれどあひておはしましぬ。程さへ遠くて入り給ふほどいと心すごし。ゆゝしげに引き隔てめぐらしたる儀式のかたは隱してこの西おもてに入れ奉る。大和守出でてきてなくなくかしこまり聞ゆ。妻戸の簀

子におしかゝり給ひて女房よび出でさせ給ふに、あるかぎり心もをさまらず物覺えぬほどなり。かくわたり給へるにぞ聊なぐさめて少將の君はまゐる。物もえのたまひやらず、涙もろにおはせぬ心づよさなれど所のさま人のけはひなどをおぼしやるもいみじうて常なき世の有樣の人のうへならぬもいと悲しきなりけり。やゝためらひて「よろしうをこたり給ふさまに承りしかば思ひ給へたゆみたりし程に夢もさむる程侍るなるを、いとあさましうなむ」と聞え給へり。おぼしたりしさまこれにおぼくは御心も亂れにしぞかしとおぼすに、さるべきとはいひながらもいとつらき人の御契なればいらへをだにえ給はず「いかに聞えさせ給ふとか聞え侍るべき。いとかるらかならぬ御さまにて、かくふりはへ急ぎ渡らせ給へる御心ばへをおぼしわかぬやうならむもあまりに侍りぬべし」と口々きこゆれば「たゞおしはかりて。われはいふべきとも覺えず」とて臥し給へるもことわりにて「只今はなき人と異ならぬ御有樣にてなむ。渡らせ給へる由は聞えさせ侍りぬ」と聞ゆ。この人々もむせかへるさまなれば「聞えやるべき方もなきを今少し自らも思ひのどめ又まづまり給ひなむに參りこむ。いかにしてかくにはかにと、その御有樣なむゆかしき」との給へば、まほにはあらねどかのおもほし歎きし有樣をかたはしづゝ聞えて「かこち聞えさするさまになむなり侍りぬべき。今日はいとゞ亂りがはしき心ちどものまどひに聞えさせたがふる事どもゝ侍りなむ。さらばかくおぼし惑へる御心ちも限りあることにて少しまづまらせ給ひなむ程に、聞えさせうけ給はらむ」とてわれにもあらぬさまなればのたまひ出づることも口ふたがりて「げにこそ

聞に惑へる心ちすれ。猶聞え慰め給ひて聊の御返りもあらばなむ」などのたまひおきて立ち煩ひ給ふもかるがるしうさすがに人さわがしければ歸り給ひぬ。今宵しもあらじと思ひつる事どものまたゝめいと程なくきはきはしきをいとあへなしと覺いて近き御さうの人々めしおぼせてさるべき事ども仕うまつるべくおきて定めて出で給ひぬ。事の俄なればそぐやうなりつる事ども嚴めしう人數などもそひてなむ。大和守もありがたき殿の御心おきてなど悅びかしこまりきこゆ。名殘だになくあさましきことゝ宮はふしまろび給へどかひなし。親と聞ゆともいとかくはならはすまじきものなりけり。見奉る人々もこの御事を又ゆゝしう歎き聞ゆ。大和守のこりの事どもまたゝめて、「かく心ぼそくてはえおはしまさじ。いと御心のひまあらじ」など聞ゆれど猶峯の煙をだにけぢかくて思ひ出で聞えむとこの山里に住みはてなむとおぼいたり。御忌にこもれる僧は東面のそなたの渡殿またもやなどにはかなき隔てまつゝかすかにゐたり。西の廂をやつして宮はおはします。明け暮るゝもおぼしわかねど月比へければ九月になりぬ。山おろしいとはげしう木の葉のかくろへなくなりて萬の事いといみじき程なれば、大方の空にもよほされてひるまもなくて覺し歎き、命さへ心にかなはずといとはしういみじうおぼす。さぶらふ人々も萬に物悲しう思ひまどへり。大將殿は日々にとぶらひ聞え給ふ。寂しげなる念佛の僧など慰むばかり萬の物を遣はしとぶらひを聞えひ、宮のお前には哀に心深き言の葉を盡して恨み聞え、かつはつきもせぬ御とぶらひを聞え給へど取りてだに御覽ぜず、すゞろにあさましきことをよわれる御心ちに疑ひなくおぼし

ぎみて、消え失せ給ひにし事をおぼし出づるに、後の世の御罪にさへやなるらむと胸にみつ心地して、この人の御事をだにかけていへばいとゞつらく心うき涙のもよほしにおぼさる。人々も聞え煩ひぬ。ひとくだりの御返りだになきを、ぎばしは心惑ひのぎ給へるなどおぼしけるに、あまりに程經ぬれば悲しき事もかぎりあるを、などかかくあまり見ぎり給はずはあるべき、いふかひなく若々しきやうにとうらめしうことごとのすぢに花や蝶やとかけばこそあらめ、我が心に哀と思ひ物歎かしきかたざまのことをいかにと問ふ人は睦しう哀にこそおぼゆれ、大宮のうせ給へりしをいと悲しとせちに思ひしに、致仕のおとゞのさしも思ふ給へらず、ことわりの世の別れにおぼやけおぼやけしきさはふばかりの事をけうじ給ひしにつらく心づきなかりしに、六條院のなかなかねんごろに後の御事をも營み給ひにしが、我がかたざまといふ中にも嬉しう見奉りし、その折に故衛門督をば取りわきて思ひつきにしぞかし、人がらのいたうぎづまりて物をいたう思ひとゞめたりし心に哀もまさりて人より深かりしがなつかしう覺えしなど、つれづれと物をのみおぼしつゞけて明し暮し給ふ。女君猶この御中の氣色をいかなるにかありけむ、御息所とこそ文かよはしも細やかにぎ給ふめりしかなと思ひえがたくて、夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに若君してたてまつれ給へる、はかなき紙のはしに、

「哀をもいかにぎりてかなぐさめむ あるや戀しきなきやかなしき。おぼつかなきこそ心うけれ」とあればほゝゑみて樣々にかく思ひよりてのたまふ。似げなのなきがよそへやとお

ぼす。いと疾くことなしびに、

「いづれとかわきてながめむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を。大方にこそ悲しけれ」とかい給へり。猶かく隔て給へることゝ露の哀をばさしおきてたゞならず歎きつゝおはす。猶かく覺束なくおぼしわびて又わたり給へり。御忌などすぐしてのどやかにとおぼし靜めけれど、さてしも忍びはつまじう今はこの御なき名の何かはあながちにもつゝまむ、唯世づきてつひの思ひかなふべきにこそはと覺したちにければ、北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひ聞え給はず、さうじみはつようおぼしはなるともかの一夜ばかりの御文をとらへ所にかこちてえしもすゝぎはて給はじとたのもしかりけり。九月十餘日、野山の氣色はふかく見ぎらぬ人だにたゞにやはおぼゆる、山風に堪へぬ木々の木末も峯の葛葉も心あわたゞしう爭ひ散るまぎれに、たふとき讀經の聲かすかに念佛などの聲ばかりして人のけはひいと少なう、木枯の吹き拂ひたるに鹿は唯雛のもとにたゝずみつゝ山田のひたにも驚かず色こき稻どもの中にまじりてうちなくもうれへがほなり。瀧の聲はいとゞ物思ふ人を驚かしがほに耳かしがましうとゞろきひゞく。叢の蟲のみぞより所なげになきよわりて枯れたる草の下よりりんだうのわれひとりのみ心ながうはひ出でゝ露けく見ゆるなど、皆例のこの比のとなれど折から所からにやいと堪へ難き程の物悲しさなり。例の妻戸のもとに立ちより給ひてやがて眺め出して立ち給へり。なつかしき程のなほしに色こまやかなる御ぞのうちめいとけうらにすきてかげよわりたる夕日のさすがに何心もなうさしきたるにま

ばゆげにわざとなく扇をさしかくし給へる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、それだにかうはあらぬをと見奉る。物思ひのなぐさめにまつべくゐましきかほのにほひにて少將の君をとりわきてめしよす。簀子の程もなけれど奥に人やあらむと後めたくてえこまやかにも語らひ給はず。「猶近くてを、なはなち給ひそ、かく山深く分けいる志は隔て殘るべくやは。霧もいと深しや」とてわざとも見入れぬさまに山の方をながめてなほなほと切にのたまへば、鈍色の几帳を籠垂のつまより少しおし出て、裾をひきそばめつゝ居たり。大和守の妹なれば離れ奉らぬうちに幼くよりおほしたて給ひければきぬの色いとこくてつるばみの喪ぎぬ一襲小袿着たり。「かく盡せぬ御事はさるものにて聞えむ方なき御心のつらさを思ひそふるに心魂もあくがれはてゝ見る人ごとに咎められ侍れば今は更に忍ぶべき方なし」といと多く恨みつゞけ給ふ。かの今はの御文のさまものたまひ出でゝいみじう泣き給ふ。この人もましていみじう泣きいりつゝ「その夜の御返りさへ見え侍らずなりにしを今は限の御心にやがておぼしいりて暗うなりにし程の空の氣色に御心ちまどひにけるを、さるよわめに例のものゝけのひきいれ奉るとなむ見給へし。過ぎにし御事にもほどほど御心惑ひ給ひぬべかりし折々多く侍りしを、宮の同じさまにまづみ給ひしをこしらへ聞えむの御心づよさになむやうやう物覺え給ひし。この御歎をばお前には唯われかの御氣色にてあきれてくらさせ給ひし」などのどめがたげに打ち歎きつゝはかばかしうもあらずきこゆ。「そよや、そもありにおぼめかしういふかひなき御心ちなり。今はかたじけなくとも誰をかはよるべに思ひ聞え給はむ。御山ずみもいと深き峯に世の中をおぼし絶えたる雲の中なめれば聞え通ひ給はむことかたし。いとかく心うき御氣色聞えまらせ給へ。萬の事さるべきにこそ。世にありへじとおぼすともまたがはぬ世なり。まづはかゝる御別れの御心にかなはゞあるべきことかは」など萬におほくの給へど、聞ゆべきこともなくて打ち歎きつゝ居たり。鹿のいといたく鳴くを「われおとらめや」とて、

「里とほみ小野の篠原わけてきてわれもまかこそ聲もをしまね」とのたまへば、

「ふぢごろも露けき秋の山人はまかのなく音にねをぞそへつる」。よからねど折からに忍びやかなるこわづかひなどをよろしう聞きなし給へり。御せうそことかう聞え給へど「今はかくあさましき夢の世を少しも思ひさます折あらばなむ、絶えぬ御とぶらひも聞えやるべき」とのみすくよかにいはせ給ふ。「いみじういふかひなき御心なりけり」と歎きつゝ歸り給ふ。道すがらも哀なる空を眺めて十三日の月いと花やかにさし出てぬればをぐら山もたどるまじうおはするに一條の宮はみちなりけり。いとどうちあばれて未申の方のくづれたるを見いるればはるばるとおろしこめて人かげも見えず。月のみ遣水のおもてをあらはにすみなしたるに大納言こゝにてあそびなどまを給ひし折々を思ひ出で給ふ。

「見し人のかげすみはてぬ池水にひとりやどもる秋の夜の月」とひとりごちつゝ殿におはしても月を見つゝ心は空にあくがれ給へり。「さも見苦しう、あらざりし御くせかな」と御達もにくみあへり。上はまめやかに心うくあくがれたちぬる御心なめり、もとよりさる方に

ならひ給へる六條院の人々をともすればめでたきためしにひき出てつゝ心よからずあひだちなきものに思ひ給へるわりなしや、われも昔よりまかならひなましかば人めもなれてなかなかすぐしてまし、世のためしにまつべき御心ばへと親はらからよりはじめ奉りめやすきあえものにまぜ給へるを、ありありてするふにはぢがましきことやあらむなど、いといたう歎い給へり。夜も明けがた近くかたみにうち解け給ふことなくてそむきそむきに歎きあかして朝霧の晴間もまたず例の文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしとおぼせどありしやうにもばひ給はず。いとこまやかにかきてうち置きて嘯きたまふ。忍び給へどもりて聞きつけらる。

「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひしひとこと。うへより落つるとやかいたまへらむ。おしつゝみて名殘もいかでよからむ」など口ずさび給へり。人めして給ひつ。御返事をだに見つけてしがな、猶いかなることぞとけしき見まほしうおぼす。日たけてぞもて參れる。紫のこまやかなる紙すくよかにて小少將ぞ例の聞えたる。唯同じさまにかひなきよしを書きていとほしさにかのありつる御文に手習ひすさみ給へるをぬすみたるとて中にひきやりて入れたり。目には見給ひてけりとおぼすばかりの嬉しさぞいと人わろかりける。そこはかとなく書き給へるを見つゞけ給へれば、

「朝夕になくねをたつるをの山は絶えぬなみだやおとなしの瀧」とやとりなすべからむふることなど物思はしげにかきみだり給へる御手など見所あり。人のうへなどにてかやう

のすき心思ひいらるゝはもどかしう現心ならぬとに見聞きしかど、身のうへにてはげにいと堪へがたかるべきわざなりけり、あやしや、などかうしも思ふらむと思ひかへし給へどえしもかなはず。六條院にも聞しめしていとおとなしう萬を思ひまづめ人のそしり所なくめやすくて過ぐし給ふをおもだゝしう我がいにしへ少しあざればみあだなる名をとり給ひしおもておこしに嬉しう覺しにたるを、いとほしう いづ方にも心苦しき事のあるべきことさしはなれたるなからひにてだにあらで おとゞなどもいかに思ひ給はむ、さばかりの事だにならぬにはあらじ、宿世といふもの遁れわびぬる事なり、ともかくも口いるべきことならずとおぼす。女のためのみこそ何方にもいとほしけれとあいなく聞しめしなげく。紫の上にもきし方行く先のことおぼし出でつゝかうやうのためしを聞くにつけてもなからむ後うしろめたう思ひ聞ゆるさまをのたまへば、御顏うち赤めて 心うくさまでおくらかし給ふべきにやとおぼしたり。女ばかり身をもてなすさまも所 せう哀なるべきものはなし。物の哀をもをかしきことをも見知らぬさまにひきいりまづみなどすれば何につけてか世にふるはえばえしさも常なき世の つれづれをも慰むべきぞは、大かた物の心をまらずいふかひなきものにならひたらむもおほしたてけむ親も いと口をしかるべきものにはあらずや、心にのみこめて無言太子とか、法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに惡しき事善き事を思ひまりながらうづもれなむもいふかひなし、我が心ながらもよき程にはいかでたもつべきぞとおぼしめぐらすにも今はたゞ女一の宮の御ためなり。大將の君參り給へるついでにあり

て思ひ給へらむ氣色もゆかしければ「御息所の忌はてぬらむな。昨日今日と思ふほどに三そ年よりあなたのことになる世にこそあれ。哀にあぢきなしや。夕の露のかゝる程のむさぼりよ。いかでこのかみそりて萬そむきすてむと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。いとわろきわざなりや」とのたまふ。「誠にをしげなき人だにおのがじゝは離れ難く思ふ世にこそ侍るめれ」など聞えて「御息所の四十九日のわざなど大和守某のあさん一人あつかひ侍る、いと哀なるわざなりや。はかばかしきよすがなき人は生ける世のかぎりにてかゝる世の果こそ悲しう侍りけれ」と聞え給ふ。「院よりもとぶらはせ給ふらむ。かのみこいかに思ひ歎き給ふらむ。はやう聞きしよりはこの近き年頃事にふれてきゝ見るに、この更衣こそ口惜しからずめやすき人のうちなりけれ。大方の世につけて惜しきわざなりや。さてもありぬべき人のかううせゆくを院もいみじう驚きおぼしたりけり。かのみこそはこゝに物し給ふ入道の宮よりさしつぎにはらうたう志給ひけれ。人ざまもよくおはすべし」とのたまふ。「御心はいかゞ物し給ふらむ。御息所はことともなかりし人のけはひ心ばせになむ。志たしう打ち解け給はざりしかどはかなきとのついでにおのづから人の用意はあらはなるものになむ侍る」と聞え給ひて宮の御事もかけずいとつれなし、かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと諫めむにかなはじ、用ゐざらむものから我さかしにと出でむもあいなしとおぼして止みぬ。かくて御法事に萬とりもちてせさせ給ふ。ことの聞えおのづから隱れなければ大殿などにも聞き給ひてさやはあるべきなど、女がたの心あさきやうに、おぼしなすぞわりなき

や。かの日は昔の御心あれば君達もまかでとぶらひ給ふ。誦經など殿よりもいかめしうせさせ給ふ。これかれさまざま劣らず志給へれば時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。宮はかくて住みはてなむと覺したつことありけれど院に人のもらし奏しければ「いとあるまじきことなり。げに數多とざまかうざまに身をもてなし給ふべき事にもあらねど、後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名をたち、罪えがましきときこの世後の世中空にもどかしき咎おふわざなる。こゝにかく世を捨てたるに三宮のおなじごと身をやつし給へる、すゑなきやうに人の思ひいふも捨てたる身に思ひなやむべきにはあらねど、必ずさしもやうのことゝ爭ひ給はむもうたてあるべし。世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて今すこし思ひ志づめ心すましてこそともかうも」と度々聞え給ひけり。このうきたる御名をぞ聞しめしたるべき、さやうのことの思はずなるにつけてうんじ給へるといはれ給はむことをおぼすなりけり。さりとて又あらはれてものし給はむもあはあはしう心づきなきことゝおぼしながら耻しとおぼさむもいとほしきを、何かはわれさへ聞きあつかはむとおぼしてなむこのすぢはかけても聞え給はざりける。大將も、とかくいひなしつるも今はあいなし、かの御心にゆるし給はむことはかたげなめり、御息所の心志りなりけりと人にはさらせむ、いかゞはせむ、なき人に少しあさき咎はおほせていつありそめしことぞともなく紛はしてむ、さらがへりてけさうだち涙を盡しかゝづらはむもいとうひうひしかるべしと思ひ給ひて、一條にわたり給ふべき日その日ばかりと定めて大和

守めしてあるべきささはふのたまひ、宮のうちはらひまつらひ、さこそいへども女どちは草玄げう住みなし給へりしを、磨きたるやうにまつらひなして御心づかひなどあるべきささはふめでたう壁代御屏風几帳おましなどまでおぼしよりつゝ大和守にのたまひてかの家にぞ急ぎつかうまつらせ給ふ。その日はわれおはしゐて御車御前など奉れ給ふ。宮は更に渡らじとおぼしのたまふを人々いみじう聞え大和守も「更にうけ給はらじ、心ぼそく悲しき御有樣を見奉りなげきこのほどの宮仕はたゆるに隨ひて仕うまつりぬ。今は國のことも侍り罷り下りぬべし。宮の内の事も見給へゆづるべき人も侍らず。いとたいたいしういかにと見給ふるを、かく萬におぼしいとなむを、げにこの方にとりて思ひ給ふるには必ずしもおはしますまじき御有樣なれど、さこそはいにしへも御心にかなはぬためし多く侍れ。一所やは世のもどきをもおはせ給ふべき。いと幼くおはしますことなり。たけうおぼすとも女の御心ひとつに我が御身をとりまたゝめ顧み給ふべきやうかあらむ。猶人のあがめかしづき給へらむに助けられてこそ深き御心のかしこき御おきてもそれにかゝるべきものなれ。君達の聞えまらせ奉り給はぬなり。かつはさるまじき事をも御心どもに仕うまつりそめ給ひて」といひつゞけて左近少將をせむ。あつまりてきこえこしらふるにいとわりなく、あざやかなる御ぞども人々の奉りかへさするもわれにもあらず、猶いとひたぶるにそぎ捨てまほしうおぼさるゝ御ぐしをかき出で見給へば六尺ばかりにて少しほそりたれど人はかたはにも見奉らず。みづからの御心には、いみじのおとろへや、人に見ゆべき有樣にもあらず、さまざまに心うき身をとおぼしつゞけてまた臥し給ひぬ。「時たがひぬ。夜も更けぬべし」と皆さわぐ。時雨いと心あわだゝしう吹きまがひ、萬にものがなしければ、

「のぼりにし峯の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな」。心ひとつにはつよくおぼせどその比は御鍬などやうのものは皆とりかくして人々のまもり聞えければ、かくもてさわがざらむにだに、何のをしげある身にてかをこがましう若々しきやうにはひき忍ばむ、人きゝもうたておずましかべきわざをとおぼせば、そのほいのごとも思給はず。人々は皆急ぎたちておのおの櫛手箱唐櫃萬の物をはかばかしからぬ袋やうのものなれど皆ささだてゝ運びたれば一人とまり給ふべうもあらで、泣く泣く御車に乘り給ふものから、かたはらのみまもられ給ひてこち渡り給ひし時御心地の苦しきにも御ぐしかきなでつくろひおろし奉り給ひしをおぼし出づるに、目もきりていみじ。御はかしにそへて經箱をそへたるが御かたはらもはなれねば、

「戀しさのなぐさめがたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな」。黑きもまだしあへさせ給はず。かの手ならし給へりし螺鈿の箱なりけり。誦經にせさせ給ひしをかたみにとゞめ給へるなりけり。浦島の子が心地なむ。おはしましつきたれば殿の内悲しげもなく人げ多くてあらぬさまなり。御車よせており給ふを更にふる里とおもほえず、疎まじううたておぼさるれば頓にもおり給はず。いと怪しう若々しき御さまかなと人々も見奉り煩ふ。殿はひんがしの對の南面を我が御方に假にまつらひてすみつきがほにおはす。三條殿には人々「俄にあさ

ましうなり給ひぬるかな。いつの程にありしとぞ」と驚きけり。なよゝかにをかしばめることを好ましからずおぼす人はかくゆくりかなることぞ打ちまじり給うける。されど年經にけることを音なく氣色ももらさで過ぐし給ひけるなりとのみ思ひなして、かく女の御心ゆるび給はぬと思ひよる人もなし。とてもかくても宮の御ためこそいとほしけれ。御まうけなどさまかはりて物のはじめゆゝしげなれど物まねらせなど皆志づまりぬるにわたり給ひて、少將の君をいみじうせめ給ふ。「御志まことにながうおぼされば今日明日を過ぐして聞えさせ給へ。なかなか立ちかへりて物おぼしまづみてなき人のやうにてなむふさせ給ひぬる。こしらへ聞ゆるをもつらしとのみおぼされたれば何事も身のためこそ侍れ。いと煩はしう聞えさせにくゝなむ」と聞ゆ。「いとあやしう推し量り聞えさせしには違ひていはけなく心得難き御心にこそありけれ」とて思ひよれるさま、人の御ためも我がためも世のもどきあるまじうのたまひ續くれば、「いてや只今は又いたづら人に見なし奉るべきにやと、あわたゞしき亂り心ちに萬思ひ給へわかれず。あが君とかくおしたちてひたぶるなる御心な遣はせ給ひそ」と手をする。「いとまだきらぬよかな。にくゝめざましと人よりけに覺しおとすらむ身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、いはむ方なしと覺してのたまへば、さすがにいとほしうもあり。「まだきらぬはげに世づかぬ御心構へのけにこそはと、ことわりはげに何方にかはよる人侍らむとすらむ」と、少しうち笑ひぬ。かく心ごはけれど今はせかれ給ふべきならねばやがてこの人をひきたてゝ推し量りにいり給ふ。宮はいと心うくなさけなくあはつけき人の心なりけりと、ねたくつらければ若々しきやうにはいひさわぐともとおぼして塗籠におましひとつまかせ給ひて內よりさして大殿ごもりにけり。これもいつまでにかは、かばかりに亂れ立ちにたる人の心どもはいと悲しう口をしうおぼす。男君はめざましうつらしと思ひ聞え給へどかばかりにては何のもてはなるゝことかはと、のどかにおぼして萬に思ひあかし給ふ。山鳥の心ちぞし給ひける。辛うじて明方になりぬ。かくてのみことゝいへばひたおもてなるべければ出で給ふとて唯聊のひまをだにといみじう聞え給へどいとつれなし。

「恨みわびむねあきがたき冬の夜にまたさしまさる關のいはかど。聞えむ方なき御心なりけり」となく出で給ふ。六條院にぞおはして休ひ給ふ。ひんがしのうへ「一條の宮渡し奉り給へることゝかの大殿わたりなどに聞ゆる、いかなる御事にかは」といとおほどかにの給ふ。御簾に御几帳そへたれどそばよりほのかには猶見え奉り給ふ。「さやうにも猶人のいひなしつべきことに侍り。故御息所はいと心強うあるまじきさまにいひはなち給ひしかど、がぎりのさまに御心ちの弱りけるに又見ゆづるべき人のなきや悲しかりけむ。なからむ後のうしろみにとやうなることの侍りしかばもとよりの志も侍りしとにてかく思ひ給へなりぬるをさまざまいかに人あつかひ侍らむかし。さしもあるまじきことをもあやしう人こそ物いひさがなきものにあれ」とうち笑ひつゝ「かのさうじみなむ、猶世にへじと深う思ひたちて尼になりなむと思ひむすぼゝれ給ふめれば、なにかはこなたかなたにきゝにくゝも侍るべ

きを、さやうに嫌疑はなれても、又かの遺言はたがへじと思ひ給へて唯かくいひあつかひ侍るなり。院のわたらせ給へらむにも事のついて侍らばかうやうにまねび聞えさせ給へ。ありて心づきなき心つかふとおぼしのたまはむをはゞかり侍りつれどげにかやうのすぢにてこそ人のいさめをもみづからの心にも隨はぬやうに侍りけれ」と忍びやかに聞え給ふ。「人のいつはりにやと思ひ侍りつるを誠にさるやうある御氣色にこそは。皆世の常のことなれど三條の姫君のおぼさむ事こそいとほしけれ。のどやかにならひ給うて」と聞え給へば、「らうたげにものたまへなす姫君かな。いと鬼々しう侍るさがなものを」とて「などてかそれをもおろかにはもてなし侍らむ。かしこけれど御ありさまどもにてもおしはからせ給へ。なだらかならむのみこそ人はつひのとには侍るめれ。さがなくことがましきも暫しはなまむつかしう煩らはしきやうには憚らるゝことあれど、それにしも隨ひはつまじきわざなれば事の亂れ出てきぬるのちわれも人もにくげにあきたしや。猶南のおとゞの御心用ゐこそさまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそはめてたきものには見奉りはて侍りぬれ」などほめ聞え給へば、笑ひ給ひて「物のためしに引きいで給ふ程に身の人わろき覺えこそ顯はれぬべう。さてをかしきことは院のみづからの御くせをば人おらぬやうに聊あだあだしき御心づかひをばたいしとおぼいて いましめ申し給ふ、おりうごとにも聞え給ふめるこそさかしだつ人のおのがうへおらぬやうに覺え侍れ」とのたまへば「さなむ常にこの道をしもいましめ仰せらるゝ。さるはかしこき御教ならでもいとよくをさめて侍る心を」とてげにを

かしと思ひ給へり。お前に參り給へれば かの事は聞しめしたれど何かはさゝがほにもとおぼいて唯うちまもり給へるに、いとめでたくきよらにこの比こそねびまさり給へる御盛なめれ。さるさまのすきごとをおき給ふとも人のもどくべきさまもおき給はず、鬼神も罪ゆるしつべくあざやかに物清げに若う盛ににほひをちらし給へり。物思ひおらぬわかうどのほどにはたおはせず、かたほなるところなうねびとゝのほり給へることわりぞかし。女にてなどかめでざらむ、鏡を見てもなどかおごらざらむと我が御子ながらも覺す。日たけて殿には渡り給へり。入り給ふより若君たちすぎすぎうつくしげにてまつはれ遊び給ふ。女君は帳の内にふし給へり。入り給へれど目も見あはせ給はず。つらきにこそはあめれと見給ふもことわりなれど、はゞかり顏にももてなし給はず。御ぞをひきやり給へれば「いづことておはしつるぞ。まろは早うおにき、常に鬼とのたまへば同じくはなりはてなむとて」とのたまふ。「御心こそ鬼よりけにもおはすれ。さまはにくげもなければ得うとみはつまじ」と何心もなういひなし給ふも心やましうて「めでたきさまになまめい給へらむあたりにありふべき身にもあらねばいづちもいづちもうせなむとす。猶かくだになおぼし出でそ。あいなく年比を經けるだに悔しきものを」とて起きあがり給へるさまは いみじうあいぎやうづきてにほひやかにうち赤め給へる顏いとをかしげなり。「かく心幼げに腹立ちなし給へればにや、めなれてこの鬼こそ今は恐しくもあらずなりにたれ。かうがうしきけをそへばや」と戯にいひなし給へば「何事いふぞとよ。おいらかにおに給ひね。まろも死なむ。見ればにくし、聞けば愛ぎやう

なし、見捨てゝ死なむは後めたし」とのたまふにいとをかしきさまのみまさればこまやかに笑ひて「近くこそ見給はざらめ、よそにはなどか聞き給はざらむ。さても契深かなる世をおもらせむの御心なゝり。俄にうち續くべかなるよみぢのいそぎはさこそは契り聞えしか」といとつれなく聞えて、何くれとこしらへ聞え慰め給へばいと若やかに心うつくしうらうたき心はたおはする人なればなほざりごとゝ見給ひながら、おのづからなごみつゝ物し給ふを、いと哀とおぼすものから心は空にて、かれもいと我が心をたてゝつようものしき人のけはひには見え給はねど、もし猶ほ意ならぬことにて尼になども思ひなり給ひなばをこがましうもあべいかなと思ふに、暫しはとだえおくまじうあわたゞしき心ちして暮れ行くまゝに、今日も御かへりだになきよとおぼして心にかゝりていみじうながめをおく給ふ。昨日今日つゆも參らざりける、物聊參りなどしておはす。「昔より御ために志のおろかならざりしさま、おとゞのつらくもてなし給ひしに、世の中のおれがましき名をとりしかど堪へ難きをねんじてこゝかしこすくみ氣色ばみしあたりを數多聞き過ぐしゝ有樣は女だにさしもあらじとなむ、人ももどきし。今思ふにもいかでかはさありけむと、我が心ながらいにしへだに重かりけりと思ひおらるゝを、今はかくにくみ給ふともおぼしすつまじき人々いと所せきまで數そふめれば御心ひとつにもてはなれ給ふべくもあらず。又よしみ給へや、命こそさだめなき世なれ」とてうち泣き給ふこともあり。女も昔の事を思ひ出で給ふに哀にもありがたかりし御中のさすがに契深かりけるかなど思ひ出でたまふ。なよびたる御ぞどもぬぎ給うて心ことなるをとりかさねてたきしめ給ひ、めでたうつくろひけさうして出で給ふを、ほかげに見いだして忍び難く涙の出でくれば脱ぎとめ給へるひとへの袖をひきよせて、

「なるゝ身をうらみむよりは松島のあまの衣にたちやかへまし。猶うつし人にてはえすぐすまじかりけり」とひとりごとにのたまふを、立ちとまりて「さも心うき御心かな。

松島のあまのぬれぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたゝめやは」。うちいそぎていとなほなほしや。かしこには猶さし籠り給へるを、人々「かくてのみやは。若々しうけしからぬ聞えも侍りぬべきを、例の御有樣にて、あるべき事をこそ聞え給はめ」など萬に聞えければ、さもある事とはおぼしながら今より後よその聞えをも我が御心の過ぎにし方をも心づきなくうらめしかりける人のゆかりとおぼしまりてその夜も對面し給はず。「戯れにくゝ珍らかなり」と聞え盡し給ふ。人もいとほしと見奉る。「聊も人心ちするをりあらむに忘れ給はずばともかうも聞えむ。この御服の程は一筋に思ひ亂るゝことなくてだに過ぐさむとなむ深くおぼしのたまはするを、かくいとあやにくにおらぬ人なくなりぬめるを、猶いみじうつらきものに聞え給ふ」と聞ゆ。「思ふ心は又ことざまに後やすきものを、思はずなりける世かな」と打ち歎きて「例のやうにておはしまさば物ごしなどにても思ふことばかり聞えて、御心破るべきにもあらず。數多の年月をも過ぐしつべくなむ」などつきもせず聞え給へど「猶かゝるみだれにそへてわりなき御心なむいみじうつらき。人のきゝ思はむことも萬になのめならざりける身のうさをばさるものにて殊更に心うき御心がまへなり」と又いひかへし恨み

給ひつゝ遙にのみもてなし給へり。さりとてかくのみやは、人の聞き漏さむこともことわりと、はしたなうこゝの人めもおぼえ給へば「うちうちの御心づかひはこののたまふさまにかなひてもまばしはなさけばまむ。世づかぬ有樣のいとうたてあり、又かゝりとてかきたえ參らずは人の御名いかゞはいとほしかるべき。ひとへに物をおぼしてをさなげなるこそいとほしけれ」などこの人をせめ給へば、げにとも思ひ、見奉るも今は心ぐるしう辱うおぼゆるさまなれば、人かよはし給ふ塗籠の北の口より入れ奉りてけり。いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人をもげにかゝる世の人の心なればこれよりまさるめをも見せつべかりけりと、たのもしき人もなくなりはて給ひぬる御身を返す返す悲しうおぼす。男は萬におぼしまるべきことわりを聞え知らせ、言の葉おほう哀にもをかしうも聞え盡し給へど、つらく心つきなしとのみおぼいたり。「いとかういはむ方なきものにおぼされける身の程はたぐひなうはづかしければ、あるまじき心のつきそめけむも心ちなく悔しうおぼえ侍れど、とり返すものならぬうちに何のたけき御名にかはあらむ。いふかひなくおぼしよはれ思ふにかなはぬ時身をなぐるためしも侍るなるを、唯かゝる心ざしをふかき淵になずらへ給ひて捨てつる身とおぼしなせ」と聞え給ふ。單衣の御ぞをひきくゝみてたけきことゝはねをなき給ふさまの心深くいとほしければ、いとうたて、いかなればいとかうおぼすらむ、いみじう思ふ人もかばかりになりぬれば、おのづからゆるぶ氣色もあるを、岩木よりけに靡き難きは契遠うてにくしなど思ふやうあなるを、さやおぼすらむと思ひよるに、あまりなれば心うくて三條の君

の思ひ給ふらむ事、いにしへも何心もなうあひ思ひかはしたりし世の事、年比今はとうらなきさまにうちたゆみとけ給へるさまを思ひ出づるも、我が心もて、いと味氣なう思ひ續けられば、あながちにもこしらへ聞え給はず歎きあかし給ひつ。かうのみまれがましうて出で入らむもあやしければ今日はとまりて心のどかに坐す。かくさへひたぶるなるをあさましと宮はおぼいて、いよいよ疎き御氣色のまさるを、をこがましき御心かなとかつはつらきものから哀なり。塗籠も殊にこまかなる物多うもあらでかうの唐櫃御厨子などばかり、あるはこなたかなたにかきよせてけぢかうまつらひてぞおはしける。內はくらきこゝちすれど、朝日さし出でたるけはひもり來たるに、うづもれたる御ぞひきやり、いとうたて亂れたるみぐしかきやりなどしてほの見奉り給ふ。いとあてに女しうなまめいたるけはひまさり給へり。男の御さまはうるはしだち給へる時よりも打ち解けて物し給ふは限もなうきよげなり。故君の殊なることなかりしだに心のかぎり思ひあがり御かたちまほにおはせずと、事の折に思へりし氣色をおぼしいづれは、ましてかういみじう衰へにたる有樣をまばしにても見忍びなむやと思ふもいみじうはづかし。とざまかうざまに思ひめぐらしつゝ我が御心をこしらへ給ふ。唯傍痛うこゝもかしこも人のきゝおぼさむことの罪さらむかたなきに、をりさへいと心うければ慰めがたきなりけり。御手水御かゆなど例のおましの方に參れり。色ことなる御まつらひもいまいましきやうなれば、ひんがし面は屏風をたてゝも屋のきはに香染の御几帳などことごとしきやうに見えぬもの沈の二階などやうのをたてゝ心ばへありてまつらひ

たり。大和守のあわざなりけり。人々もあざやかならぬ色の山吹、掻練、濃きさきぬ、青鈍などを着かへさせ薄色のも、青朽葉などをとかくまぎらはして御だいはまゐる。女所にてまどけなく萬の事ならひたる宮のうちにありさま心とゞめて僅なる下人をもいひとゝのへこの人一人のみあつかひおこなふ。かくおぼえぬやんごとなきまらうどの坐すると聞きて、もと勤めざりける けい司などうちつけに参りてまどころなどいふ方に侍ひて警みけり。かくせめて住みなれがほつくり給ふ程、三條殿かぎりなめりと、さしもやはとこそ、かつは頼みつれ、まめびとの心かはるは名殘なくなむと聞きしは誠なりけりと世をこゝろみはつる心地して、いかさまにしてこのなめげさを見じとおぼしければ、大殿へ方たがへむとて渡り給ひにけるを、女御の御里におはする程などにたいめ志給ひて、少し物思ひはるけ所に覺されて例のやうにも急ぎ渡り給はず。大將殿も聞き給ひて、さればよいと急に物し給ふ本性なり、このおとゞもはたおとなおとなしう のどめたる所さすがになく、いとひきゝりに花やい給へる人々にてめざまし見じ聞かじなどひがひがしき事ども志いで給ひつべきと驚かれ給ひて三條殿に渡り給へれば、君達もかたへはとまり給へれば、姫君たちさてはいとをさなきとをぞねておはしにける。見つけて悦びむつれあるはうへを戀ひ奉りて憂へ泣き給ふを心苦しとおぼす。せうそこたびたび聞えて迎に奉れ給へど御かへりだになし。かくかたくなしうかるがるしの世やとものしう覺え給へど、おとゞの見聞き給はむ所もあればくらしてみづから参り給へり。寢殿になむ坐するとて例の渡り給ふ方は御達のみ侍らふ。若君達ぞ乳母にそ

ひておはしける。「今更にわかわかしの御まじらひや、かゝる人をこゝかしこにおとしおき給ひてなど寢殿の御まじらひはふさはしからぬ御心のすぢとは年比見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひ聞えて今はかくくだくだしき人のかずかず哀なるをかたみに見すつべきにやは」とたのみ聞えける。「はかなきひとふしにかうはもてなし給ふべくや」といみじうあばめ恨み申し給へば、「何事も今はとみあき給ひにける身なれば今はたなほるべきにもあらぬを、何かは」とて「あやしき人々は覺しすてずは嬉しうこそはあらめ」と聞え給へり。「なだらかの御いらへや。いひもていけば誰が名か惜しき」とて志ひて渡り給へともなくてその夜は一人臥し給へり。あやしう中空なる比かなと思ひつゝ君達を前にふせ給ひて、かしこに又いかに覺し亂るらむさま思ひやり聞え、やすからぬ心づくしなればいかなる人かうやうなることをかしうおぼゆらむなど物ごりしぬべう覺え給ふ。明けぬればこの君の見聞かむも若々しきを限とのたまひはてばさて試みむ。かしこなる人々もらうたげに戀ひ聞ゆめりしをえり殘し給へるやうあらむとはみながらも思ひすてがたきを、ともかくもてなし侍りなむ」とおどし聞え給へば、すがすがしき御心にてこの君達をさへや知らぬ所に率て渡し給はむとあやふし。「姫君をいざ給へかし見奉りにかく参りくることもはしたなければ常にも参りこじ。かしこにも人々のらうたきをおなじ所にてだに見奉らむ」と聞え給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす。いと哀と見奉りたまひて「母君の御敎になかなひ給ひそ。いと心うく思ひとる方なき心あるはいと惡しきわざなり」と、いひ志らせ奉

り給ふ。おとゞかゝる事を聞き給ひて人わらはれなるやうにおぼし歎く。「まばしはさても見給はでおのづから思ふところ物せらるらむものを女のかくひきさりなるもかへりては輕く覺ゆるわざなり。よしかくいひそめつとならば何かはをれてふとしも歸り給ふ。おのづから人の氣色心ばへは見えなむ」とのたまはせてこの宮に藏人の少將の君を御使にて奉り給ふ。

「契あれや君を心にとゞめおきてあはれと思ひうらめしとなく。猶えおぼしはなたじ」とある御文を少將もておはしてたゞいりに入り給ふ。南面の簀子にわらうださし出でゝ人々もの聞えにくし。宮はましてわびしとおぼす。この君は、中にいとかたちよくめやすきさまにてのどやかに見まはしていにしへを思ひ出でたる氣色なり。「參りなれにたる心ちしてうひうひしからぬにさも御覽じゆるさずもやあらむ」などばかりぞかすめ給ふ。「御返しいと聞えにくゝてわれは更にえかくまじ」との給へば「御志もうたてわかわかしきやうに、せじがきはた聞にさすべきにやは」と集まりて聞にさすればまづ打ち泣きて、故上おはせましかばいかに心づきなしとおぼしながらも罪をかくい給はましと思ひ出で給ふに、涙の水莖にさきだつ心ちしてかきやり給はず。

「何ゆゑか世に數ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしともきく」とのみおぼしけるまゝに、かきもとぢめ給はぬやうにておしつゝみて出し給ひつ。少將は人々と物語して「時々さぶらふにかゝる御簾の前はたつきなき心ちし侍るを今よりはよすがある心ちして常に參るべし。ないげなどもゆるされぬべき年比のまゐるしあらはれ侍る心地なむまゐ侍る」など氣色ばみおきて出で給ひぬ。いとゞしく心よからぬ御氣色あくがれまどひ給ふ程、大殿の君は日比ふるまゝにおぼし歎くことまげし。ないしのすけかゝる事を聞くに、われを世とともに許さぬものにの給ふなるにかくあなづりにくきことも出できにけるをと思ひて、文などは時々奉ればきこえたり。

「數ならば身にまられまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな」。なまけやけしとは見給へど物の哀なる程のつれづれにかれもいとたゞにはおぼえじとおぼすかた心ぞつきにける。

「人の世のうきを哀と見しかども身にかへむとは思はざりしを」とのみあるを、おぼしけるまゝと哀に見る。この昔御中だえの程には、このないしのすけこそ人まれぬものに思ひとめ給へりしかど、ことあらためて後はいとたまさかにつれなくなりまさり給ひつゝ、さすがに君達は數多になりにけり。この御腹には、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、おほい君、中の君、四の君、五の君とおはす。內侍は、三の君、六の君、次郎君、五郎君とぞおはしける。すべて十二人が中にかたほなるなくいとをかしげにとりどりにおひ出で給ひける。內侍腹の君達しもなむかたちをかしう心ばせかどありて皆すぐれたりける。三の君、二郎君は、ひんがしのおとゞにぞとりわきてかしづき奉り給ふ。院も見なれたまひていとらうたくまゐ給ふ。この御なからひのことといひやるかたなくとぞ。

御法

紫の上いたう煩ひ給ひし御こゝちの後、いとあつしくなり給ひてそこはかとなく惱み渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなればたのもしげなくいとどあえかになりまさり給へるを、院のおもほし歎く事かぎりなし。まばしにても後れ聞え給はむことをばいみじかるべくおぼし、みづからの御心ちには、この世に飽かぬことなくうしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとゞめまほしき御命ともおぼされぬを、年比の御契かけはなれ思ひ歎かせ奉らむことのみぞ、人まれぬ御心のうちにも物哀におぼされける。後の世のためにと尊き事どもを多くせさせ給ひつゝ「いかで猶ほいあるさまになりてまばしもかゝづらはむ命の程はおこなひをまぎれなく」とたゆみなく覺しの給へど更にゆるし聞え給はず。さるは我が御心にもまかおぼしそめたるすぢなれば、かくねんごろに思ひ給へるついでに催されて、おなじ道にも入りなむとおぼせど、一度家を出て給ひなば假にもこの世を顧みむとはおぼしおきてず。後の世にはおなじ蓮の座を分けむと契りかはし聞え給ひてたのみをかけ給ふ御中なれど、こゝながらつとめ給はむ程は、おなじ山なりとも峰を隔てゝあひ見奉らぬすみかにかけはなれなむ事をのみおぼしまうけたるに、かくいとたのもしげなきさまに惱みあつい給へば、いと心苦しき御有樣を今はとゆき離

れむきざみには捨てがたく、なかなか山水のすみか濁りぬべくおぼしとゞこほるほどに、唯うちあざへたる思ひのまゝの道心起す人々にはこよなうおくれ給ひぬべかめり。御ゆるしなくて心ひとつにおぼしたゝむもさまあしくほいなきやうなればこの事によりてぞ女君もうらめしく思ひ聞え給ひける。我が御身をも罪輕かるまじきにやと後めたくおぼされけり。年比わたくしの御願にて書かせ奉り給ひける法華經千部急ぎて供養し給ふ。我が御殿とおぼす二條院にてぞし給ひける。七僧の法服などまなゑな給はす。物の色縫ひ目よりはじめて清らなる事かぎりなし。大かた何事もいといかめしきわざどもをせられたり。ことごとしきさまにも聞え給はざりければ委しき事どもゝまらせ給はざりけるに、女の御おきてにはいたりふかく佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を、院はいと限なしと見奉り給ひて大方の御まつらひ何かの事ばかりをなむ營ませ給ひける樂人舞人などのことは大將の君とりわきて仕うまつり給ふ。內、春宮、ささいの宮達をはじめ奉りて御方々こゝかしこに御誦經ほうもちなどばかりの事をうちまゐ給ふだに所せきに、ましてその比この御いそぎを仕うまつらぬ所なければいとこちたき事どもあり。いつの程にいとかくいろいろおぼしまうけゝむ、げにいそのかみの世々を經たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞えし御方、明石なども渡り給へり。南東の戸をあけておはします。寢殿の西の塗籠なりけり。北の廂に方々の御局どもはさうじばかりをへだてつゝまたり。やよひの十日なれば花盛にて空の景色などもうらゝかに物おもしろく、佛のおはすなる處の有樣遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき

人さへ罪を失ひつべし。薪こるさんだんの聲もそこらつどひたるひゞきおどろおどろしきを、うち休みてまづまりたる程だに哀におぼさるゝを、ましてこの比となりて何事につけても心ぼそくのみおぼしまる。明石の御方に三宮して聞えたまへる。

「をしからぬこの身ながらもかぎりとて薪つきなむことのかなしさ」。御かへり心ぼそきすぢは後の聞えも心おくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

「薪こるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふ法ぞはるけき」。夜もすがらたふときことにうちあはせたる鼓の聲絶えずおもしろし。ほのぼのと明け行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ猶春に心とまりぬべく匂ひわたりて百千鳥のさへづるも笛の音に劣らぬ心ちして物の哀もおもしろさも殘らぬ程に、陵王の舞ひて急になる程の末つかたの樂花やかに賑はゝしく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる物のいろいろなども物の折からにをかしうのみ見ゆ。み子達上達部の中にも、物の上手ども手のこさず遊び給ふ。かみしも心ちよげに興ある氣色どもなるを見給ふにものこり少しと身をおぼしたる御心のうちには萬の事哀におぼえ給ふ。昨日例ならず起き居させ給へりし名殘にやいと苦しうて臥し給へる、年比かゝる物の折ごとに參りつどひ遊び給ふ人々の御かたち有樣のおのがじゝの才ども琴笛の音をも今日や聞き給ふべきとぢめならむとのみおぼさるれば、さしも目とまるまじき人の顏どもゝ哀に見渡され給ふ。まして夏冬の時につけたる遊び戯ぶれにもなまいどましきまたの心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはし給ふ方々は誰も久しくと

まるべき世にはあらざなれど、まづ我ひとり行くへまらずなりなむをおぼしつゞくるいみじう哀なり。ことはてゝおのがじゝ歸り給ひなむとするも遠きわかれめきてをしまる。花散里の御かたに、

「絶えぬべき御法ながらぞたのまるゝ世々にと結ぶ中のちぎりを」。御かへり、

「結びおくちぎりは絶えじ大かたののこりすくなきみのりなりとも」。やがてこのついでに不斷の讀經懺法などたゆみなく尊き事どもをせさせ給ふ。御ず法はことなるまるしも見えで程經ぬれば、例の事になりてうちはへさるべき所々寺々にてぞせさせ給ひける。夏になりては例の暑さにさへいとゞ消え入り給ひぬべき折々多かり。その事とおどろおどろしからぬ御心ちなれど、唯いとよわきさまになり給へれば、むつかしげに所せく惱み給ふ事もなし。さぶらふ人々もいかにおはしまさむとするにかと思ひよるにもまづかきくらしあたらしう悲しき御有樣と見奉る。かくのみおはすれば中宮この院にまかでさせ給ふ。ひんがしの對におはしますべければこなたにはた待ち聞え給ふ。儀式など例に變らねどこの世の有樣を見はてずなりぬるなどのみおぼせば、萬につけて物哀なり。名對面を聞き給ふにもその人かの人など耳とゞめて聞かれ給ふ。上達部などいと多く仕うまつり給へり。久しき御對面のとだえをめづらしくおぼして御物語こまやかに聞え給ふ。院入り給ひて「今夜はすばなれたる心ちして無德なりや。まかりやすみ侍らむ」とて渡り給ひぬ。起き居給へるを嬉しとおぼしたるもいとはかなき程の御なぐさめなり。「方々におはしましてはあなたに渡らせ給はむ

もかたじけなし。參らむことはたわりなくなりにて侍れば」とてまばしはこなたにおはすれば、明石の御方も渡り給ひて心深げにまづまりたる御物語ども聞えかはし給ふ。上は御心のうちにおぼしめぐらす事多かれどさかしげになからむ後などのたまひ出づることもなし。唯なべての世の常なき有樣をおほどかにことずくなゝるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、ことに出でたらむよりも哀に物心ぼそき御氣色はまゐう見えける。宮達を見奉り給うても「おのおのゝ御行く末をゆかしく思ひ聞えけるこそかくはかなかりける身を惜む心のまじりけるにや」とて涙ぐみ給へる御顏の匂ひいみじうをかしげなり。などかうのみおぼしたらむとおぼすに中宮うち泣き給ひぬ。ゆゝしげになどは聞えなし給はず、物のついでなどにぞ「年比仕うまつりなれたる人々のことなるよるべなういとをしげなるはこの人かの人侍らずなりなむ後に御心とゞめて尋ねおもほせ」などばかり聞え給ひける。御讀經などによりてぞ例のわが御方に渡り給ふ。三宮はあまたの御中にいとをかしげにてありき給ふを、御心ちのひまには前にする奉り給ひて人の聞かぬまに「まろが侍らざらむにおぼし出でなむや」と聞え給へば「いと戀しかりなむ。まろはうちの上よりも宮より も母をこそまさりて思ひ聞ゆれ。おはせずば心ちむつかしかりなむ」とて目をすり紛はし給へるさまをかしければほゝゑみながら涙はおちぬ。「おとなになり給ひなばこゝに住み給ひてこの對の前なる紅梅と櫻とは花の折々に心留めてもてあそび給へ。さるべからむをりは佛にも奉り給へ」と聞え給へば、うちうなづきて御顏をまもりて涙の落つべかめれば立ちて

おはしぬ。とりわきておぼしたて奉り給へればこの宮と姫宮とをぞ見さし聞え給はむことを口惜しく哀におぼされける。秋待ちつけて世の中すこし涼しくなりては御心ちも聊さはやぐやうなれど猶ともすればかごとがまし。さるは身にまむばかりおぼさるべき秋風ならねど露けきをりがちにてすぐし給ふ。中宮は參り給ひなむとするを今まばしは御覽ぜよとも聞えまほしうおぼせども、さかしきやうにもありうちの御使の隙なきも煩しければさも聞え給はぬに、あなたにもえ渡り給はねば宮ぞ渡り給ひける。かたはらいたけれどげに見奉らぬもかひなしとて、こなたに御まつらひをことにせさせ給ふ。こよなう痩せほそり給へれどかくてこそあてになまめかしきことの限なさもまさりてめでたかりけれと、さしかたあまりにほひ多くあざあざとかはせしさかりはなかなかこの世の花のかをりにもよそへられ給ひしを、限もなくらうたげにをかしげなる御さまにていと假初に世を思ひ給へる氣色似るものなく心苦しくすゞろに物がなし。風すごく吹き出でたる夕暮に前栽見給ふとて脇息によりゐ給へるを院渡りて見奉り給ひて「今日はいとよく起き居給ふめるはこの御前にてはこよなく御心もはれはれしげなめりかし」と聞え給ふ。かばかりのひまあるをもいと嬉しと思ひ聞え給へる御氣色を見給ふも心苦しく、つひにいかにおぼしさわがむと思ふにあはれなれば、

「おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるゝ萩のうは露」。げにぞ折れかへりとまるべうもあらぬ花の露もよそへられたるをりさへ忍びがたきを、

「やゝもせばきえをあらそふ露の世におくれさきだつ程へずもがな」とて御涙をはらひあへ給はず。宮、

「秋風にまばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見む」と聞えかはし給ふ。御かたちどもあらまほしく見るかひあるにつけてもかくて千年をすぐすわざもがなとおぼさるれど、心にかなはぬことなればかけとめむ方なきぞ悲しかりける。「今は渡らせ給ひね。みだり心ちいと苦しくなり侍りぬ。いふかひなくなりにける程といひながらいとなめげに侍りや」とて御几帳ひきよせて臥し給へるさまの常よりもいとたのもしげなく見え給へば、いかにおぼさるゝにかとて宮は御手をとらへ奉りてなくなく見奉り給ふに誠に消えゆく露の心ちして限に見え給へば、御誦經の使ども數も知らずたち騒ぎたり。ささぎも斯ていき出で給ふ折にならひ給ひて御ものゝけと疑ひ給ひて夜一夜さまざまのことを盡させ給へどかひもなく、明けはつる程に消えはて給ひぬ。宮も歸り給はでかくて見奉り給へるをかぎりなくおぼす。誰もたれもことわりの別れにてたぐひあることゝもおぼされず、珍らかにいみじく明けぐれの夢にまどひ給ふほどさらなりや、さかしき人おはせざりけり。さぶらふ女房などもあるかぎり更に物覺えたるなし。院はましておぼしまどめむ方なければ、大將の君近く參り給へるを御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて「かく今はかぎりのさまなめるを、年比のほ意ありて思へる事かゝるさざみにその思ひたがへて止みなむがいといとほしきを、御加持にさぶらふ大とこ達讀經の僧などの皆聲やめて出でぬなめるをさりとも立ちとまりても

のすべきかあらむ。この世には空しき心ちするを佛の御志るし今はかの暗き道のとぶらひだに頼み申すべきをかしらおろすべきよし物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる」などのたまふ御けしき心づよくおぼしなすべかめれど、御顏の色もあらぬさまにいみじくたへかねる御涙のとまらぬをことわりに悲しく見奉り給ふ。「御ものゝけなどのこれも人の御心亂らむとてかくのみものは侍るを、さもやおはしますらむ。さらばとてもかくても御ほ意のことはよろしき事に侍るなり。一日一夜にても忌むことのまるしこそは空しからず侍るなれど、誠にいふかひなくなりはてさせ給ひて、後の御髮ばかりをやつさせ給ひても、ことなるかの世の御光ともならせ給はざらむものから、目の前の悲びのみまさるやうにて、いかゞ侍るべからむ」と申し給ひて御忌に籠り侍ふべき志ありてまかでぬ僧その人かの人などめしてさるべきことどもこの君ぞ行ひ給ふ。年比何やかやとおぼけなき心はなかりしかど、いかならむ世にありしばかりも見奉らむ、ほのかにも御聲をだに聞かぬことなど心にも離れず思ひ渡りつるものを、聲は遂に聞かせ給はずなりぬるにこそはあめれ、空しき御からにても今一度見奉らむの志かなふべき折は只今より外にいかでかあらむと思ふに、つゝみもあへずなかれて女房のある限り騒ぎまどふを「あなかま、まばし」とまづめ顏にて御几帳のかたびらを、物のたまふまぎれに引きあけて見給へば、ほのぼのと明け行く光もおぼつかなければ大となぶら近くかゝげて見奉り給ふに、あかず美しげにめでたう清らに見ゆる御顏のあたらしさに、この君のかく覗き給ふを見る見るあながちにかくさむの御心もおぼされぬなめり。

「かく何事もまだ變らぬ氣色ながら限りのさまはあるかりけるこそ」とて御袖を顏におしあて給へる程、大將の君も涙にくれて目も見え給はぬをあひてあをりあけて見奉るに、なかなか他かず悲しき事たぐひなきに誠に心まどひもあぬべし。御髮の唯うちやられ給へる程こちたくきよらにてつゆばかり亂れたる氣色もなう艶々と美しげなるさまぞかぎりなき。火のいとあかきに御色はいとあをろく光るやうにてとかくうちまぎらはす事ありし、うつゝの御もてなしよりもいふかひなきさまに何心なくて臥し給へる御有樣の他かぬ所なしといはむも更なりや。なのめにだにあらずたぐひなきを見奉るに、死にいるたましひのやがてこの御からにとまらむとおもほゆるもわりなきことなりや。仕うまつりたる女房などの物おもほゆるもなければ、院ぞ何事もおぼしわかれずおぼさるゝ御心ちをあながちにあづめ給ひて限りの御ことどもし給ふ。いにしへも悲しとおぼすことも數多見給ひし御身なれど、いとからおりたちてはまだ知り給はざりけることを、すべてきしかた行くすゑたぐひなき心ちし給ふ。やがてその日とかくをさめ奉る。限りありける事なればからを見つゝもえ過ぐし給ふまじかりけるぞ心うき世の中なりける。はるばると廣き野の所もなく立ちこみて限りなくいかめしきさほふなれどいとはかなき烟にて程なくのぼり給ひぬるも例の事なれどあへなくいみじ。空をあゆむ心ちして人にかゝりてぞおはしましけるを見奉る人もさばかりいつかしき御身をと、物の心あらぬげすさへ泣かぬはなかりけり。御おくりの女房はまして夢路にまどふ心ちして車よりもまろび落ちぬべきをぞもてあつかひける。昔大將の君の御母君

うせ給へりし時の曉を思ひ出づるにもかれは猶物のおぼえけるにや、月のかほのあきらかに覺えしを今夜は唯くれ惑ひ給へる。十四日にうせ給ひてこれは十五日の曉なりけり。日はいと花やかにさしあがりて野邊の露もかくれたるくまなくて世の中おぼしつゞくるにいとゞいとはしくいみじければ、おくるとてもいく世かはふべき。かゝる悲しさのまぎれに昔よりの御ほ意も遂げまほしくおもほせど、心よわき後のそしりをおぼせばこの程を過ぐさむとし給ふに胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。大將の君も御忌に籠り給ひてあからさまにもまかで給はず、明暮近くさぶらひて心苦しくいみじき御氣色をことわりに悲しく見奉り給ひて萬に慰め聞え給ふ。風野分だちて吹く夕暮に昔の事おぼしいでゝ、ほのかに見奉りしものをと戀しく覺え給ふに、又かぎりの程の夢の心ちせしなど人知れず思ひつゞけ給ふに、堪へがたく悲しければ、人めにはさしも見えじとつゝみて阿彌陀佛阿彌陀佛とひき給ふずゝの數にまぎらはしてぞ涙の玉はもてけち給ひける。

「いにしへの秋の夕のこひしきにいまはと見えしあけくれの夢」ぞなごりさへうかりける。やんごとなき僧どもさぶらはせ給ひて、定まりたる念佛をばさるものにて法華經など誦ぜさせ給ふ。かたがたいとあはれなり。臥しても起きても涙のひるよなくきりふたがりて明し暮し給ふ。いにしへより御身の有樣おぼしつゞくるに鏡に見ゆる影をはじめて人には異なりける身ながらゞはけなき程より悲しく、常なき世を思ひあるべく佛などのすゝめ給ひける身を心づよくすぐして遂に來しかた行くさきもためしあらじと覺ゆる悲しさを見つる

かな、今はこの世に後ろめたき事殘らずなりぬ、ひた道に行ひにおもむきなむにさはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心まどひにては、願はむ道にも入りがたくやとやゝましきをこの思ひ少しなのめに忘れさせ給へと阿彌陀佛を念じ奉り給ふ。所々の御とぶらひうちをはじめ奉りて例の作法ばかりにはあらず いとまげく聞え給ふ。おぼしめしたる心のほどにはさらに何事も目にも耳にもとゞまらず、心にかゝり給ふ事あるまじけれど、人にぼけぼけしきさまに見えじ、今更に我が世の末にかたくなしく心弱きまどひにて世の中をなむ背きにけるとなかれとゞまらむ名をおぼしつゝむになむ、身を心に任せぬなげきをさへうちそへ給ひける。致仕のおとゝ哀をも折過し給はぬ御心にてかく世にたぐひなく物し給ふ人のはかなくうせ給ひぬることを口をしく哀におぼして、いとまばまば問ひ聞え給ふ。背大將の御母上うせ給へりしもこの比のことぞかしとおぼし出づるにいと物悲しく、そのをりかの御身を惜み聞え給ひし人の多くもうせ給ひにけるかな、後れ先だつ程なき世なりけりやなど、あめやかなる夕暮にながめ給ふ。空の氣色もたゞならねば御子の藏人の少將して奉り給ふ。哀なることなどこまやかに聞え給ひて、はしに、

「いにしへの秋さへ今のこゝちしてぬれにし袖に露ぞおきそふ」。をりからに萬のふる事おぼし出でられて何となくその秋の事戀しうかきあつめ、こぼるゝ涙をはらひもあへ給はぬまぎれに、御かへし、

「露けさはむかし今ともおもほえず 大かた秋のよこそつらけれ。物のみ悲しき御心のまゝならばまちとり給ひては心よわくも」と目留め給ひつべきおとゞの御心ざまなればめやすきほどに」と「度々のなほざりならぬ御とぶらひのかさなりぬる事」と悅び聞え給ふ。うすじみとのたまひしよりは、今すこしこまやかにて奉れり。世の中にさいはひありめてたき人も、あいなう大かたの世にそねまれ、善きにつけても心のかぎりおごりて人のため苦しき人もあるを、あやしきまですゝろなる人にもうけられ、はかなくまいて給ふことも何事につけても世にほめられ、心にくゝ折ふしにつけつゝ、ちらちらしくありがたかりし人の御心ばへなりかし。さしもあるまじきおほよその人さへその比は風の音蟲の聲につけつゝ涙おとさぬはなし。ましてほのかにも見奉りし人の思ひ慰むべき世なし。年比むつまじく仕うまつり馴れたる人々まばしも殘れる命うらめしき事を歎きつゝ尼になりこの世の外の山ずみなどに思ひたつもありけり。冷泉院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこ絶えず、盡きせぬ事ども聞え給ひて、

「枯れはつる野邊をうしとやなき人の秋に心をとゞめざりけむ。今なむことわり知られ侍りぬる」とありけるを、物おぼえぬ御心にもうちかへし置きがたく見給ふ。いふかひありをかしからむ方のなぐさめにはこの宮ばかりこそおはしけれと、聊物まぎるゝやうにおぼしつゞくるにも涙のこぼるゝを、袖のいとまなくえかきやり給はず。

「のぼりにし雲ゐながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に。おしつゝみ給ひても」とばかりうち眺めておはす。すくよかにもおぼされず、われながら殊の外にほれほれし

くおぼし知らるゝ事多かるまぎらはしに女がたにぞおはします。佛のお前に人まげからずもてなしてのどやかにおこなひ給ふ。千年をもろともにとおぼしゝかど、限ある別ぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露もことことにまぎるまじく後の世をと、ひたみちにおぼしたつ事たゆみなし。されど人ぎゝをはゞかり給ふなむあぢきなかりける。御わざのことゞもはかばかしくのたまひ置きつることなかりければ、大將の君なむとりもちて仕うまつり給ひける。今日やとのみ我が身も心づかひせられ給ふをり多かるをはかなくてつもりけるも夢の心ちのみす。中宮などもおぼし忘るゝ時の間なく戀ひきこえたまふ。

幻

春の光を見給ふにつけてもいとどくれ惑ひたるやうにのみ御心ひとつは悲しさのあらたまるべくもあらぬに、とには例のやうに人々參り給ひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなし給ひて御簾の内にのみおはします。兵部卿の宮わたり給へるにぞ、たゞうちとけたるかたにて對面し給はむとて御せうそこきこえ給ふ。

「我が宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね來つらむ」。宮、うち涙ぐみ給ひて、

「香をとめて來つるかひなく大方の花のたよりといひやなすべき」紅梅の下に歩み出で給へる御さまのいとなつかしきにぞこれより外に見はやすべき人なくやと見え給へる。花

はほのかに開けさしつゝをかしき程のにほひなり。御あそびもなく例に變りたること多かり。女房なども年比經にけるは墨ぞめの色こまやかにて、きつゝ悲しさも改めがたく思ひさますべき世なく戀ひ聞ゆるに、絶えて御方々にも渡り給はず、まぎれなく見奉るをなぐさめにて慣れ仕うまつる。年比まめやかに御心留めてなどはあらざりしかど時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なかなかゝる寂しき御ひとりねになりては、いとおぼざうにもてなし給ひて夜の御とのゐなどにもこれかれと數多をおましのあたり引きさけつゝ侍らせ給ふ。つれづれなるまゝにいにしへの物語など去給ふ折々もあり。名殘なき御ひじりごゝろの深くなり行くにつけても、さしもありはつまじかりける事につけつゝ、中比物うらめしうおぼしたる氣色の時々見え給ひしなどをおぼし出づるに、などてたはぶれにても又まめやかに心苦しきことにつけてもさやうなる心を見え奉りけむ、何事にもらうらうしうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知り給ひながら怨じはて給ふことはなかりしかど、ひとわたりづゝはいかならむとすらむとおぼしたりしに、少しにても心を亂り給ひけむことのいとほしうくやしう覺え給ふさま胸よりも餘る心地し給ふ。その折のことの心をもたゞり、今も近う仕うまつる人々はほのぼの聞え出づるもあり。入道の宮の渡り始め給へりし程その折はしも色には更に出だし給はざりしかど、事にふれつゝあぢきなのわざやと思ひ給へりし氣色の哀なりし中にも、雪降りたりし曉に立ちやすらひて我が身もひえ入るやうに覺えて、空の氣色はげしかりしにいとなつかしうおいらかなるものから、袖のい

たう泣きぬらし給へりけるをひきかくしてせめてまぎらはし給へりし程の用意などを、夜もすがら夢にも又はいかならむ世にかとおぼし續けらる。曙にしも曹司におる〳〵女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」といふを聞きつけ給へる、唯その折の心地するに御傍のさびしきもいふ方なくかなし。

「うき世にはゆき消えなむと思ひつゝおもひの外に猶ぞほどふる」。例のまぎらはしには御てうづめして行ひ給ふ。うづみたる火起し出で〳〵御火桶まゐらす。中納言の君中將の君など御前近く御物語きこゆ。獨寢常よりもさびしかりつる夜のさまかな、かくてもいとよく思ひすましつべかりける世を、はかなくもかゝづらひけるかなとうち眺め給ふ。われさへうち捨て〳〵はこの人々のいとゞ歎きわびむことの哀にいとほしかるべきなど見渡し給ふ。忍びやかにうち行ひつゝ經など讀み給へる御聲をよろしう思はむ事にてだに涙とまるまじきを、まして袖のまがらみせきあへぬまであはれにあけ暮に奉る人々の心地つきせず思ひ聞ゆ。「この世につけては飽かず思ふべきことをさをさあるまじう たかき身には生れながら又人よりもことに口惜しき契にもありけるかなと思ふこと絶えず。世のはかなく憂きをまらすべく佛などのおきて給へる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふればかく今はの夕近きすゑにいみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程もみづからの心のきはも、のこりなく見はてゝ心やすきに今なむ露のほだしなくなりにたるを、これかれかくて ありしよりげにめならす人々の今はとて行き別れむ程こそ、今ひときはの心亂れぬべけれ。いとはかなし

かし。わろかりける心の程かな」とて御目おし拭ひかくし給ふに、まぎれずやがてこぼるゝ御涙を見奉る人々ましてせきとめむかたなし。さてうち捨てられ奉りなむがうれはしさをおのおのうち出でまほしけれどさもえ聞えず、むせかへりてやみぬ。かくのみ歎き明し給へる曙、ながめくらし給へる夕暮などのまめやかなる折々は、かのおしなべてにはおぼしたらざりし人々を御前近くてかやうの御物語などまを給ふ。中將の君とてさぶらふは まだちひさくより見給ひなれしを、いと忍びつゝ見給ひすぐさずやありけむ、いとかたはら痛きことに思ひて慣れも聞えざりけるを、かくうせ給ひて後は、その方にはあらず人より殊にらうたきものに心留めおぼしたりしものをとおぼし出づるにつけて、かの御かたみのすぢをぞ哀とおぼしたる。心ばせかたちなどもめやすくてうなゐまつに覺えたるけはひたゞならましよりはらうらうしと思ほす。疎き人には更に見え給はず、上達部などもむつましき又御はらからの宮達など常に參り給へれど、對面し給ふことをさをさなし。人に向はむ程ばかりはさかしく思ひまづめ、心をさめむと思ふとも月比にぼけにたらむ身の有樣、かたくなしきひがごとまじりて、末の世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるべし。おぼゝれてなむ人にも見えざなるといはれむも同じ事なれど、猶音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも見苦しきことの目に見るは、こよなくきはまさりてをこなりとおぼせば、大將の君などにだに御簾隔てゝぞ對面し給ひける。かく心かはりまを給へるやうに人のいひ傳ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはとねんじすぐし給ひつゝ うき世をもえ背きやり給はず。御方々

に稀にもうちほのめき給ふにつけては、まづいとせき難き涙の雨のみふりまさればいとわりなくていづかたにも覺束なきさまにて過ぐし給ふ。ささいの宮はうちに參らせ給ひて三の宮をぞさうざうしき御なぐさめには おはしまさせ給ひける。母ののたまひしかばとて對の御前の紅梅取りわきてうしろみありき給へるをいと哀と見奉り給ふ。二月になれば花の木どもの盛になるもまだしきも、木末をかしう霞み渡れるに、かの御かたみの紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覽ず。

「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにてきぬる鶯」とうそぶきありかせ給ふ。春深くなりゆくまゝに御前の有樣いにしへに變らぬをめで給ふ方にはあらねど、志づ心なく何事につけても胸いたうおぼさるれば大かたの世の外のやうに鳥の音も聞えざらむ山のすゑゆかしうのみいとどなりまさり給ふ。山吹などの心地よげに咲きみだれたるもうちつけに露けくのみ見なされ給ふ。外の花は一重散りて八重咲く花櫻さかり過ぎて樺櫻はひらけ、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遲く疾き花の心をよくわきていろいろをつくし植ゑおき給ひしかば、時を忘れず匂ひ滿ちたるに若宮「まろが櫻は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに几帳を立てゝかたびらをあげずば風もえ吹きよらじ」とかしこう思ひえたりと思ひてのたまふ。顏のいと美くしきにもうちゑまれ給ひぬ。「おほふばかりの袖もとめけむ人よりはいとかしこうおぼしより給へりかし」などこの宮ばかりをぞもてあそびに見奉り給ふ。「君になれ聞えむこともこり少しや。命といふもの今志ばしかゝ

づらふべくとも對面はえあらじかし」とて例の涙ぐみ給へればいとものしとおぼして、母のたまひしことをまがまがしうのたまふとて、ふしめになりて御ぞの袖を引きまさぐりなどしつゝまぎらはしおはす。すみの間の高欄におしかゝりて御前の庭をも御簾の内をも見渡してながめ給ふ。女房などもかの御かたみの色かへぬもあり。例の色あひなるもあやなど花やかにはあらず、みづからの御直衣も色は世のつねなれど殊更にやつして無紋を奉れり。御志つらひなどもいとおろそかにことそぎて寂しく物心ぼそげに志めやかなれば、

「今はとてあらしやはてむなき人の心とどめし春のかきねを」。人やりならずかなしうおぼさる。いとつれづれなれば入道の宮の御方に渡り給ふに、若宮も人に抱かれておはしましてこなたの若君と走り遊び花をしみ給ふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮は佛の御前にて經をぞ讀み給ひける。何ばかり深うおぼしとれる御道心にもあらざりしかど、この世にうらめしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝにまぎれなく行ひ給ひて一つ方に思ひはなれ給へるもいとうらやましく。かくあざへ給へる女の御志にだにおくれぬることゝ口惜しうおぼさる。あかの花の夕ばえしていとおもしろく見ゆれば、春に心よせたりし人なくて花の色すさまじくのみ見なさるゝを「佛の御かざりにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて「對の前の山吹こそ猶世に見えぬ花のさまなれ。ふさの大きさなどよ志な高うなどはおきてざりける花にやあらむ。花やかにぎはゝしきかたはいとおもしろきものになむありける。植ゑし人なき春とも志らず顏にて常よりも匂ひかさねたるこそ哀に侍れ」とのたま

ふ。御いらへに「谷には春も」と何心もなく聞え給ふを、ことしもこそあれ心憂くもとおぼさるゝにつけては、その事のさらでもありなむかしと思ふに違ふふしなくてもやみにしかなと、いはけなかりし程よりの御有様をいて何事ぞやありしとおぼし出づるには、まづそのをりかの折かどかどしらららうじう匂ひ多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ思ひ續けられ給ふに、例の涙のもろさはふとこぼれ出でぬるもいと苦し。夕暮の霞たどたどしうをかしき程なれば、やがて明石の御方に渡り給へり。久しうさしものぞき給はぬに覺えなき折なれば打ち驚かるれど、さまようけはひ心にくゝもてつけて、猶こそ人には優りたれと見給ふにつけては、又かうざまにはあらでこそ故よしをもてなし給へりしかとおぼしくらべらるゝにも面影に戀しう悲しさのみ增れば、いかにして慰むべき心ぞといとくらべ苦し。こなたにてはのどやかに昔物語などぞ給ふ。「人をあはれと心留めむはいとわるかるべきことゝいにしへより思ひえて、すべていかなる方にもこの世にぞふとまるべきことなくと心づかひをせしに、大方の世につけて身のいたづらにはふれぬべかりし比ほひなど、とざまかうざまに思ひめぐらしゝに、命をもみづから捨つべく、野山の末にはふらかさむに殊なるさはりあるまじうなむ思ひなりしを末の世に今はかぎりの程近き身にてしもあるまじきほだし多うかゝづらひて、今まで過ぐしてけるが心弱うもどかしきことなど、さしてひとすぢの悲しさにのみはのたまはねど、おぼしたるさまのことわりに心苦しきをいとほしう見奉りて、大方の人めに何ばかり惜しげなき人だに心のうちのほだしおのづからおぼう侍るなるを、ましていかでかは心やすくもおぼし捨てむ。さやうにあざへたることはかへりてかるがるしきもどかしさなども立ち出でゝなかなかなる事など侍るなるをおぼしたつ程にぶきやうに侍らむや。また遂に住みはてさせ給ふ方深う侍らむと思ひやられ侍りてこそ。古のためしなどを聞き侍るにつけても心に驚かれ思ふより違ふふしありて世を厭ふついでになるとか。それは猶わるきことゝこそ。猶ぞばしおぼしのどめさせ給ひて宮たちなどもおとなびさせ給ひまことに動きなかるべき御有様に見奉りなさせ給はむまでは亂れなく侍らむこそ、心やすくもうれしくも侍るべけれ」などいとおとなびて聞えたるけしきいとめやすし。「さまで思ひのどめむ心深さこそ淺きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔より物を思ふことなど語り出で給ふ中に「故ささいの宮のかくれ給へりし春なむ、花の色を見ても誠に心あらばとおぼえし。それは大方の世につけてをかしかりし御有様ををさなくより見奉りぞみて、さるとぢめのかなしさも人より殊におぼえしなり。みづからとりわく心ざしにしも物の哀はよらぬわざなり。年經ぬる人におくれて心をさめむかたなく忘れがたきも唯かゝる中のかなしさのみにはあらず。幼き程よりおぼしたてしありさま諸共に老いぬる末の世に打ち捨てられて、我が身も人の身も思ひつゞけらるゝ悲しさの堪え難きになむ。すべて物の哀も故あることもをかしきすぢも廣うおもひめぐらす。方々そふことの淺からずなるになむありける」など夜更くるまで今昔の御物語にかくても明しつべき夜をとおぼしながらかへり給ふを女も物哀に思ふべし。我が御心にもあやしくもなりにけるかなとおぼしぞらる。さても又例の御

行ひに夜中になりてぞ尼のおましいとかりそめにより臥し給ふ。つとめて御文奉り給ふに、「なくなくも歸りにしかな假の世はいづくもつひのとこよならぬに」。よべの御有樣はうらめしげなりしかどいとかくあらぬさまにおぼしほれたる御氣色の心苦しさに、身の上はさしおかれて涙ぐまれ給ふ。

「雁がねし苗代水の絶えしよりうつりし花のかげをだに見ず」。ふりがたうよしある書きざまにもなまめざましきものにおぼしたりしを、末の世にはかたみに心ばせを見まるどちにてうしろやすき方にはうちたのむべく思ひかはし給ひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなし給へりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかしなどおぼし出づ。せめてさうざうしき時はかやうに唯大方にうちほのめき給ふ折々もあり。昔の御ありさまには名殘なくなりにたるべし。夏の御方より御ころもがへの御裝束奉り給ふとて、

「夏衣たちかへてけるけふばかりふかき思ひもすゝみやはせぬ」。御かへし、

「羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとゞ悲しき」。祭の日いとつれづれにて今日は物見るとて人々心地よげならむかしとてみ社のありさまなどおぼしやる。「女房などいかにさうざうしからむ。里に忍びて出でゝ見よかし」などのたまふ。中將の君ひんがしおもてにうたゝねまたるを歩みおはして見給へればいとさゝやかにをかしきさまして起き上りたり。つらつき花やかに匂ひたる顏もてかくして少しふくだみたる髪のかゝりなどいとをかしげなり。紅のさばみたるけそひたる袴、くわんざう色のひとへいと濃き鈍色に黑

きなどうるはしからず重なりて、裳、唐衣もぬぎすべしたりけるをとかくひきかけなどするに、葵を傍に置きたりけるをとり給ひて「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

「さもこそはよるべの水にみ草ゐめけふのかざしよ名さへわするゝ」とはぢらひて聞ゆ。

げにといとほしくて、

「大かたは思ひ捨てゝし世なれども葵はなほやつみをかすべき」など一人ばかりはおぼしはなたぬけしきなり。五月雨はいとゞながめくらし給ふより外の事なくさうざうしきに、十餘日の月花やかにさし出てたる雲間のめづらしきに大將の君御前にさぶらひ給ふ。花たちばなの月かげにいときはやかに見ゆるかをりも追風なつかしければ千世をならせる聲もせなむとまたるゝほどに、俄に立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにておどろおどろしうふりくる雨にそひて、さと吹く風にとうろも吹きまどはして空くらきに心地するに、窓をうつ聲などめづらしからぬふるごとをうち誦し給へるも折からにや。妹が垣根におとなはせまほしき御聲なり。「獨住みは殊にかはることなけれどあやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住みせむにもかくて身をならはしたらむはことなう心すみぬべきわざなりけり」などのたまひて「女房こゝにくだものなど參らせよ。男ども召さむもことごとしき程なり」などのたまふ。心にはたゞ空を眺め給ふ御氣色のつきせず心苦しければかくのみおぼしまぎれずは、御行ひにも御心すまし給はむことかたくやと見奉り給ふ。ほのかに見し御面影だ

に忘れがたし。ましてことわりぞかしと思ひ居給へり。昨日今日と思ひ給ふるほどに御はてもやうやう近うなり侍りにけり。いかやうにかおきておぼしめすらむと申し給へば「何ばかり世の常ならぬことをかはものせむ。かの志おかれたる極楽のまだらなどこの度なむ供養すべき。經などもあまたありけるをなにがし僧都皆その心くはしう聞き置きたなれば又加へてすべきことどもゝかの僧都のいはむに從ひてなむ物すべき」などのたまふ。「かやうのことどももとよりとりたてゝおぼしおきてけるはうしろやすきわざなれどこの世にはかりそめの御契なりけりと見給ふにはかたみといふばかり留め聞え給へる人だにものし給はぬこそ口惜しう侍りけれ」と申し給へば、「それはかりそめならず、命ながき人々にもさやうなることの大方少かりけるみづからの口惜しさにこそ。そこにこそはかどはひろげ給はめ」などのたまふ。何事につけても忍びがたき御心よわさのつゝましくて過ぎにしことといたうもの給ひ出でぬに、またれつる杜鵑のほのかにうち鳴きたるもいかにしりてかと、聞く人たゞならず。

「なき人を忍ぶるよひの村雨にぬれてやきつる山ほとゝぎす」。いとゞ空をながめ給ふ。

大將、

「杜鵑きみにつてなむふるさとの花たちばなは今ぞさかりと」。女房など多くいひあつめたれどとゞめず。大將の君はやがて御とのゐに侍ひ給ふ。さびしき御獨寢の心苦しければ時々かやうに侍ひ給ふをおはせし夜はいとけどほかりし。おましのあたりのいたうも立ち離

れぬなどにつけて思ひ出でらるゝことどもおほかり。いと暑きころ涼しき方にてながめ給ふに、池の蓮の盛なるを見給ふにいかにおほかるなどまづおぼし出でらるゝに、ほれぼれしくてつくづくとおはする程に日も暮れにけり。ひぐらしの聲はなやかなるに御前のなでしこの夕ばえを一人のみ見給ふには、實にぞかひなかりける。

「つれづれとわがなきくらす夏の日をかごとがましき蟲の聲かな」。螢のいとおほう飛びちがふも、「夕殿に螢とんで」と例のふるごともかゝるすぢにのみ口なれ給へり。

「夜を志る螢を見てもかなしきは時ぞともなきおもひなりけり」。七月七日も例にかはりたることとおぼく、御あそびなどもし給はでつれづれに詠めくらし給ひて星合見る人もなし。まだ夜ふかう一所起き居給ひて妻戸押しあけ給へるに前栽のつゆいとしげく渡殿の戸よりとぼりて見渡さるればいて給ひて、

「七夕の逢ふせは雲のよそに見てわかれの庭につゆぞおきそふ」。風の音さへたゞならずなり行く比しも、御法事のいとなみにてついたち比はまぎらはしげなり、今まで經にける月日よとおぼすにもあされて明しくらし給ふ。御正日にはかみしもの人々皆いもひして、かの曼陀羅など今日ぞ供養せさせたまふ。例の宵の御おこなひに御手水まゐらする中將の君の扇に、

「君こふる涙はきはもなきものを今日をばなにのはてといふらむ」とかきつけたるをとりて見給ひて、

「人こふる我が身も末になりゆけどのこりおほかる涙なりけり」とかきそへ給ふ。九月になりて九日おほひたる菊を御覧じて、

「もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな。神無月は大かたもしぐれがちなる比、いとゞながめ給ひて夕暮の空の氣色などもえもいはぬ心ぼそさにふりしかど」とひとりごちおはす。雲ゐをわたる雁のつばさもうらやましくまもられ給ふ。

「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬたまのゆくへたづねよ」。何事につけてもまぎれずのみ月日にそへておぼさる、五節などいひて世の中そこはかとなく今めかしげなる頃、大將殿の君達殿上し給ひて參り給へり。同じ程にて二人いとうつくしきさまなり。御をぢの頭中將藏人少將などをみにて青摺のすがたども清げにめやすくて、皆うち續きもてかしきつゝ諸共に參り給ふ。思ふ事なげなるさまどもを見給ふにいにしへあやしかりし日影のをりさすがにおぼし出でらるべし。

「宮人はとよのあかりにいそぐけふ日かげもしらでくらしつるかな」。今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去り給ふべきほど近くおぼしまうくるに哀なることつきせず。やうやうさるべきことゞも御心のうちにおぼしつゞけて侍ふ人々にもほどほどにつけてものたまひなど、おどろおどろしく今なむ限りとおもなし給はねど、近う侍ふ人々は御ほ意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れゆくも心ぼそう悲しきことかぎりなし。落ちとまりてかたはなるべき人の御文どもやればをしとおぼされけるにや、少しづゝのこし給ひけるを、

物のついでに御覧じつけてやらせ給ふなどするに、かの須磨のよろぼひ所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは殊にゆひあはせてぞありける。みづからおおき給ひけることなれど久しうなりにける世のことゝおぼすに、只今のやうなる墨つきなど實に千とせのかたみにおつべかりけるを見ずなりぬべきよとおぼせば、かひなくて疎からぬ人々二三人ばかり御前にてやらせ給ふ。いとかゝらぬほどのことにてだに過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとゞかきくらし、それとも見わかれぬまで降りおつる御涙の水莖に流れそふを人もあまり心よわしと見奉るべきが、かたはらいたうはしたなければおしやり給ひて、

「おおでの山越えにし人をおたふとて跡を見つゝもなほまどふかな」。さぶらふ人々もまほにはえひろげねど、それとほのぼの見ゆるに心惑ひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別のほどをいみじとおぼしけるまゝにかい給へる言の葉、實にそのをりよりもせきあへぬ悲しさやらむかたなし。いとうたて、今ひときはの御心惑ひもめゝしく人わろくなりぬべければ、能くも見給はでこまやかに書き給へるかたはらに、

「かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲ゐの烟とをなれ」とかきつけさせ給ひて皆やかせ給ひつ。御佛名も今年ばかりにこそはとおぼせばにや、常よりもことにさくぢやうの聲々などあはれにおぼさる。行く末ながきことを希ふも佛の聞き給はむことかたはらいたし。雪いたうふりてまめやかに積りにけり。導師のまかづるを御前にめしてさかづきなど常の作法よりもさしわかせ給ひて殊に祿などたまはす。年比久しくまゐり公にも仕うまつ

りて院にも御覧じ馴れたる御導師の頭はやうやう色かはりて侍ふも哀におぼさる。例の宮達上達部などあまた参り給へり。梅の花のわづかに氣色ばみはじめて雪にもてはやされたる程をかしきを、御あそびなどもありぬべけれど猶今年までは物の音もむせびぬべき心地し給へば時によりたるものうち誦じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや導師の盃のついでに、

「春までの命もまらず雪のうちにいろづく梅をけふかざしてむ」。御かへし、

「千世の春見るべき花といのりおきて我が身ぞ雪とともにふりぬる」。人々おほくよみおきたれど、もらしつ。その日ぞ出で給へる。御かたち昔の御光にも又おほくそひてありがたくめでたく見え給ふを、このふりぬるよはひの僧はあいなう涙もとどめざりけり。年暮れぬとおぼすも心ぼそきに若宮のなやらはむに音たかくるべきことなにわざをせさせむと走りありき給ふもをかしき御ありさまを見ざらむこと、よろづに忍びがたし。

「物思ふと過ぐる月日もまらぬまに年も我が世もけふやつきぬる」。朔のほどのこと常よりことなるべくとおきてさせたまふ。みこたち大臣の御引出物品々の祿どもなど二なうおぼしまうけてとぞ。

匂宮

光かくれ給ひにしのちかのみかげに立ちつぎ給ふべき人そこらの御末々にありがたかりけり。おりゐのみかどをかけ奉らむはかたじけなし。當代の三宮そのおなじおとどにてお以出で給ひし宮の若君とこの二所なむとりどりにきよらなる御名とり給ひてげにいとなべてならぬ御有樣なめれどいとまばゆきまはにはおはせざるべし。唯世の常の人ざまにめでたくあてになまめかしくおはするをもとゝして、さる御なからひに人の思ひ聞えたるもてなしありさまもいにしへの御ひゞきけはひよりもやゝ立ちまさり給へるおぼえがらなむ、かたへはこよなういつくしかりける、紫の上の御心よせことにはぐゝみ聞え給ひしゆゑ。三宮は二條院におはします。春宮をばさるやんごとなきものにおき奉り給ひてみかどささきいみじく悲しうま奉りかしづき聞えさせ給ふ宮なれば、内ずみをせさせ奉り給へど、猶心安き故郷に住みよくま給ふなりけり。御元服ま給ひては兵部卿の宮と聞ゆ。女一宮六條院の南の町の東の對をそのよのまつらひを改めずおはしまして朝夕に戀ひ忍び聞え給ふ。二宮もおなしおとゞの寢殿を時々の御やすみ所にま給ひて梅壺を御曹司にま給ひて右のおほい殿の中姫宮を得奉り給へり。つぎの坊がねにていとおぼえことにおもおもしう人がらもすくよかになむものし給ひける。おほいとのゝ御むすめはいとあまたものし給ふ。大姫君は春宮に参り給ひてまたさしろふ人なきままにて侍ひ給ふ。そのつぎつぎ皆ついでのまゝにこそはと世の人も思ひきこえささいの宮ものたまはすれど、この兵部卿宮はさしもおぼしたらず、我が御心よりおこらざらむことなどは凄じくもおぼしぬべき御氣色なめり。おとゞもなにか

はやうのものとさのみうるはしうはとまづめ給へど、又さる御氣色あらむをばもてはなれてもあるまじうおもむけて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の君なむそのころ少しわれはと思ひのぼり給へるみこたちかんだちめの御心つくすくさはひにものし給ひける。院かくれ給ひて後さまざま集ひ給へりし御方々なくなく遂におはすべきすみかどもにおのおのうつろひ給ひしに花散里と聞えしは東の院をぞ御そうぶんの所にて渡り給ひにける。入道の宮は三條の宮におはします。いまきさきは内にのみさぶらひ給へば、院のうちさびしく人ずくなになりにけるを、右のおとゞ人のうへにていにしへのためしを見聞くにも生けるかぎりの世に心を留めてつくり志めたる人の家居の、名殘なくうちすてられて世のならひも常なく見ゆるはいと哀にはかなさ知らるゝを、我が世にあらむかぎりだに、この院あらさずほとりの大路などひとかげかれはつまじうとおぼしの給はせて、丑寅の町にかの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、三條殿と夜ごとに十五日づゝうるはしう通ひ住み給ひける。二條院とてつくりみがき六條院の春のおとゞとて世にのゝしりし玉のうてなも唯一人の御末のためなりけりと見えて、明石の御方はあまたの宮達の御うしろみをしつゝあつかひ聞え給へり。おほい殿はいづかたの御事をも昔の御心おきてのまゝに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつり給ふにも對の上のかやうにてとまり給へらましかば、いかばかり心をつくして仕うまつり見え奉らまし、遂にいさゝかも取りわきて我が心よせと見知り給ふべきふしもなくて過ぎ給ひにしことを、口惜しく飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。天の下の人院

を戀ひ聞えぬなく、とにかくにつけても世はたゞ火をけちたるやうに何事もはえなきなげさをせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々御方々宮達などは更にも聞えず、限なき御事をばさるものにてまたかの紫の上の御有樣を心に志めつゝ萬の事につけて思ひ出で聞え給はぬ時のまなし。春の花の盛はげに長からぬにしも覺えまさるものになむ。二品の宮の若君は院のきこえつけ給へりしまゝに冷泉院のみかどとりわきておぼしかしづき后の宮もみこたちなどおはせず心ぼそうおぼさるゝに、うれしき御うしろみにまめやかにたのみ聞え給へり。御元服なども院にてせさせ給ふ。十四にて二月に侍從になり給ふ。秋右近の中將になりて御たうばりの加階などをさへいづこの心もとなきにか急ぎ加へておとなびさせ給ふ。おはしますおとゞ近き對を曹司に志つらひなどみづから御覽じいれて若き人もわらはも志もづかへまで勝れたるをえりとゝのへ、女の御氣色よりもまばゆく整へさせ給へり。上にも宮にもさぶらふ女房の中にもかたちよくあてやかにめやすきは皆うつし渡させ給ひつゝ、院の内を心につけてすみよくありよく思ふべくとのみわざとがましき御あつかひぐさにおぼされ給へり。故致仕のおほい殿の女御と聞えし御腹に女宮たゞ一所おはしけるをなむ限りなくかしづき給ふ御有樣におとらず。后の宮の御おぼえの年月にまさり給ふけはひにこそは。などかさしもと見るまでなむ。母宮は今はたゞ御行を志づかに志給ひて月ごとに御念佛、年に二度の御八講をりをりの尊き御いとなみばかりを志給ひてつれづれにおはしませばこの君の出で入り給ふをかへりては親のやうにたのもしきかげにおぼしたれば、いと哀にて院

にも内にも召しまつはし春宮も次々の宮達もなつかしき御あそびがたきにて伴ひ給へば、いとまなく苦しうていかで身をわけてしがなと覺え給ひける。をさな心地にほの聞き給ひしことのをりをりいぶかしうおぼつかなく思ひ渡れど問ふべき人もなし。「宮にはことの氣色にてもおりけりとおぼされむ。かたはらいたきすぢなれば世とゝもの心にかけていかなりける事にかは、何の契にてかうやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなりいでけむ。ぜんげうたいしの我が身に問ひけむさとりをもえてしがな」とぞひとりごたれ給ひける。

「おぼつかな誰にとはましいかにしてはじめもはても知らぬ我が身ぞ」。いらふべき人もなし。事にふれて我が身につゝがある心地するもたゞならず物なげかしくのみ思ひめぐらしつゝ宮もかく盛の御かたちをやつし給ひてなにばかりの御道心にてか俄に赴き給ひけむ、かく思はずなりけることのみだれに必ず憂しとおぼしなるふしありけむ、人もまさにもり出でおらじやは、猶つゝむべきことの聞えによりわれには氣色をおらする人のなきなめりと思ふ。明暮勤め給ふやうなめれどはかもなくおほどき給へる女の御さとりの程に蓮の露もあきらかに玉と磨き給はむことかたし、五つのなにがしも猶うしろめたきを、われこの御心地をたすけておなじうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも安からぬおもひにむすぼゝれてやなどおしはかるに、世をかへても對面せまほしき心つきて元服はものうがり給ひけれどすまひはてず、おのづから世の中にもてなされてまばゆきまで花やかなる御身のかざりも心につかずのみ思ひおづまり給へり。内にも母宮の御かたざまの心よせ深

くていと哀なるものにおぼされ、ささいの宮はたもとよりひとつおとゞにて、宮達諸共に生ひ出で遊び給ひし御もてなしをさをさ改め給はず、末に生れ給ひて心苦しうおとなしうもえ見おかぬことゝ、院のおぼしのたまひしを思ひ出で聞え給ひつゝおろかならず思ひ聞え給へり。右のおとゞも我が御こどもの君達よりもこの君をばこまやかにやんごとなくもてなしかしづき奉り給ふ。むかし光君と聞えしはさるまたなき御おぼえながら、猜み給ふ人うちそひ母方の御後見なくなどありしに御心ざまも物深く世の中をおぼしなだらめし程に、ならびなき御ひかりをばまばゆからずもてあづめ給ふ。遂にさるいみじき世のみだれも出できぬべかりしをも事なく過ぐし給ひて後の世の御つとめもおくらかし給はず、よろづさりげなくて久しくのどけき御心おきてにこそありしか。この君はまだしきに世のおぼえいと過ぎて思ひあがりたることとよなくなどぞ物し給ふ。げにさるべくていとこの世の人とは造り出でざりける、假に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり。顏かたちもそこはかといづこなむすぐれたるあなきよらと見ゆる所もなきが、たゞいとなまめかゝう耻しげに心のおくおほかりげなるけはひ人に似ぬなりけり。かのかうばしさぞこの世のにほひならず、あやしきまでうちふるまひ給へるあたり遠く隔たる程のおひ風もまことに百歩の外も薫りぬべき心地おける。誰もさばかりになりぬる御有樣のいとやつればみたゞありなるやはあるべき。さまざまにわれ人にまさらむとつくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで打ち忍び立ちよらむも物のくまもあるきほのめきのかくれあるまじきにうるさがりてをさをさ取

りもつけ給はねどあまたの御唐櫃にうづもれたるかうのかどもゝ、この君のはいふよしもなき匂ひをくはへ、御前の花の木もはかなく袖かけたまふ梅の香は春雨の雫にもぬれ身にしむる人おほく、秋の野にぬしなき藤袴ももとのかをりはかくれてなつかしき追風ことにをりなしからなむまさりける。かくあやしきまで人のとがむる香にしみ給へるを、兵部卿宮なむことごとよりもいどましくおぼして、それはわざと萬の勝れたるうつしをしめ給ひ朝夕のことわざにあはせいとなみ、お前の前栽にも春は梅の花園をながめ給ひ、秋は世の人のめづる女郎花さをしかのつまにすめる萩の露にもをさをさ御心うつしたまはず、老を忘るゝ菊に衰へ行く藤袴ものげなきわれもかうなどはいとすさまじき霜枯の比ほひまでおぼし捨てずなど、わざとめきて香にめづる思ひをなむ立てゝこのましうおはしける。かゝる程に少しなよびやはらぎすぎてすきたる方にひかれ給へりと世人は思ひ聞えたり。昔の源氏はすべてかくたてゝその事とやうがはりしみ給へる方ぞなかりしかし。源中將この宮には常に參りつゝあそびなどにもきしろふものゝ音を吹き立て、げにいどましくも若きどち思ひかはし給ひつべき人のさまになむ。例の世人はにほふ兵部卿、かをる中將と聞きにくゝいひつゞけてその比よきむすめおはするやうごとなき所々は心ときめきに聞えごちなどし給ふもあれば、宮はさまざまにをかしうもありぬべきわたりをばのたまひよりて人の御けはひありさまをも氣色とり給ふ。わざと御心につけておぼすかたはことになかりけり。冷泉院の一宮をぞさやうにても見奉らばやかひありなむかしとおぼしたるは、母女御もいとおもく

心にくゝ物し給ふあたりにて、姫君の御けはひげにとありがたく勝れてよその聞えもおはしますに、まして少し近くもさぶらひなれたる女房などの委しき御有樣の事にふれて聞え傳ふるなどもあるにいとゞ忍びがたくおぼすべかめり。中將は世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なればなかなか心とゞめて行きはなれ難きおもひや殘らむなど思ふに、煩しき思ひあらむあたりにかゝづらはむはつゝましくなど思ひ捨て給ふ。さしあたりて心にあむべきことのなき程さかしだつにやありけむ、人のゆるしなからむ事などはまして思ひよるべくもあらず。十九になり給ふ年三位の宰相にて猶中將もはなれ給はず、みかどきさきの御もてなしにたゞ人にてははゞかりなきめでたき人のおぼえにてものし給へど、心のうちには身を思ひあるかたありて物哀になどもありければ心にまかせてはやりかなるすきごとをさをさ好まず、萬の事もてあづめつゝおのづからおよすげたる心ざまを人にもあられ給へり。三宮年にそへて心をくだき給ふめる。院の姫宮の御あたりを見るにもひとつ院の内に明暮立ちなれ給へば、事にふれても人のありさまを聞え見奉るにげにいとなべてならず、心にくゝゆゑゆゑしき御もてなし限なきを同じくはげにかやうならむ人を見むにこそ生ける限の心ゆくべきつまなれと思ひながら大方こそへだつることなくおぼしたれ。姫宮の御かたざまのへだてはこよなくけ遠くならはさせ給ふもことわりにわづらはしければあながちにも交らひよらず、若し心より外の心もつかばわれも人もいと惡しかるべきととおもはりて物馴れよることもなかりけり。我がかく人にめでられむとなり給へる有樣なれ

ば、はかなくなげの詞をちらし給ふあたりもこよなくもてはなるゝ心なく靡きやすなるほどに、おのづからなほざりのかよひ所もあまたになるを人のためにことごとしくなどもてなさず。いとよくまぎらはしそこはかとなく情なからぬ程のなかなか心やましさを思ひよれる人はいざなはれつゝ三條の宮に參りあつまるはあまたあり。つれなきを見るも苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりはと心ぼそきに思ひわびて、さもあるまじきさはの人々のはかなき契りにたのみをかけたる多かり。さすがにいとなつかしう見所ある人の御ありさまなれば、見る人皆心にはからるゝやうにて見過ぐさる。宮のおはしまさむ世のかぎりは朝夕に御めかれず御覽ぜられ、見奉らむをだにと思ひのたまへば、右のおとゞもあまた物し給ふ御むすめたちを、一人一人はと心ざし給ひながらえことに出で給はず。さすがにゆかしげなきなからひなるをとは思ひなせど、この君達を置きて外にはなずらひなるべき人を求め出づべきよかはとおぼしわづらふ。やんごとなきよりもないしのすけばらの六の君はいとすぐれてをかしげに心ばへなどもたらひて生ひ出で給ふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しうおぼして、一條の宮のさるあつかひぐさもたまへられでさうざうしきに迎へとりて奉り給へり。わざとはなくてこの人々に見せそめては必ず心留め給ひてむ、人の有樣をも見知る人はことにこそあるべけれなどおぼして、いといつくしうはもてなし給はず、今めかしくをかしきやうに物ごのみせさせて人の心づけむたよりを多くつくりなし給ふ。のりゆみのかへりあるじのまうけ六條院にていと心ことにき給ひて

御子をもおはしまさせむの心づかひき給へり。その日みこたちおとなにおはするは皆さぶらひ給ふ。ささい腹のは孰ともなくけ高く清げにおはします。中にもこの兵部卿の宮はげにいと勝れてこよなう見えたまふ。四のみ子常陸の宮と聞ゆる更衣腹のは思ひなしにやけはひこよなう劣り給へり。例の左あながちに勝ちぬ。例よりは疾く事はてゝ大將まかで給ふ。兵部卿の宮常陸の宮后腹の五の宮とひとつ車にまねきのせ奉りて罷で給ふ。宰相中將はまけ方にて音なく罷で給ひにけるを「皇子達おはします御送に參り給ふまじや」と推し留めさせて御子の衛門督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部あまたこれかれにのりまじりいざなひ立てゝ六條院へおはす。道のやゝ程ふるに雪いさゝか散りて艶なるたそがれ時なり。物の音をかしき程に吹き立て遊びて入り給ふをげにこゝをおきていかならむ佛の御國にかはかやうのをり節の心やり所を求めむと見えたり。寢殿の南の廂に常のごと南むきに中少將つきわたり北むきに向へてゑがのみこ達上達部の御座あり。御かはらけなど始まりて物おもしろくなりゆくにもとめこ舞ひてかよれる袖どもの打ちかへす羽風に御前近き梅のいとたく綻びこぼれたるにほひのさとうち散りわたれるに、例の中將の御かをりのいとどしくもてはやされていひ知らずなまめかし。はつかにのぞく女房なども闇はあやなく心もとなき程なれど、香にこそげに似たるものなかりけれとめであへり。おとゞもめでたしと見給ふ。かたちよういも常よりまさりて亂れぬさまにをさめたるを見て、「右のすけも聲くはへ給へや。いたうまらうとだゝしや」とのたまへばにくからぬほどに神のますなど。

紅梅

そのころ按察大納言と聞ゆるは故致仕のおとゞの次郎なり。うせ給ひにし右衛門督のさしつぎよ。童よりらうらうしう花やかなる心ばへものし給ひし人にてなりのぼり給ふ。年月にそへてまいていと世にあるかひあり。あらまほしうもてなし御おぼえいとやむごとなかりけり。北の方二人ものし給ひしを、もとよりのはなくなり給ひて、今ものし給ふは、後の大きおとゞの御むすめまき柱離れがたく志給ひし君を式部卿の宮にて故兵部卿の御子にあはせたて給へりしを、御子うせ給ひて後ち忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月ふればえさしも憚り給はぬなめり。御子は故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければさうざうしとて神佛に祈りて今の腹にぞ男君一人まうけ給へる。故宮の御かたみに女君一所おはす。隔てわかず何れをもおなじごと思ひ聞えかはし給へるを、おのおの御方の人などはうるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまくねくねしき事も出てくる時々あれど、北の方いとはればれしう今めきたる人にて罪なく取りなし、我が御方ざまに苦しかるべき事をもなだらかに聞きなし、思ひなほし給へば聞きにくからでめやすかりけり。君達同じほどにすぎすぎおとなび給ひぬれば御裳など着せ奉り給ふ。七けんの寢殿廣く大きに造りて南面に大納言殿のおほい君、西に中の君、東に宮の御方と住ませ奉り給へり。大方にうち思ふ程は父宮のおはせぬ心苦しき

やうなれどこなたかなたの御寶物多くなどして内々の儀式有樣など心にくゝけだかくなどもてなしてけはひあらまほしうおはす。例のかくかしづき給ふ聞えありて次々に從ひつゝ聞え給ふ人おほく内春宮より御氣色あれど内には中宮おはします。いかばかりの人かはかの御けはひにならび聞えむ、さりとて思ひ劣りひげせむもかひなかるべし。春宮には左のおほい殿の女御並ぶ人なげにてさぶらひ給ふはきしろひにくけれどさのみいひてやは人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひたえては何のほいかはあらむと覺したちて參らせ奉り給ふ。十七八のほどにてうつくしうにほひ多かるこゝちし給へり。中の君もうちすがいてあてになまめかしうすみたるさまはまさりてをかしうおはすれば、たゞ人にてはあたらしう見せまうき御さまを兵部卿の宮のさもおぼしたる。この若君をうちにてなど見つけ給ふ時はめしまどはしたはぶれがたきに志給ふ。心ばへありておく推し量らるゝまみひたひつきなり。「せうとを見てのみはえやまじと大納言に申せよ」などのたまひかくるを、「さなむ」と聞ゆればうちゑみていとかひありと覺したり。「人におとらむ宮仕よりはこの宮にこそはよろしからむ女子は見せ奉らまほしけれ。心のゆくにまかせてかしづき見奉らむに命のびぬべき宮の御さまなり」との給ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて春日の神の御ことわりも我が世にやもし出できて故おとゞの院の女御の御事を胸いたくおぼして止みにしなぐさめの事もあらなむと心のうちに祈りて參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふよし人々聞ゆ。かゝる御まじらひのなれ給はぬ程にはかばかしき御後見なくてはいかゞ

とて北の方そひてさぶらひ給ふは誠に限もなく思ひかしづき後見聞えたまふ。殿はつれづれなる心地して西の御かたはひとつに習ひ給ひていとさうざうしうながめ給ふ。東の姫君の疎々しくかたみにもてなし給はてよるよるは一所に御殿ごもりよろづの御ことならひはかなき御遊びわざをもこなたを師のやうに思ひ聞えてぞ誰も習ひ遊び給ひける。物はぢを世のつねならずまた給ひて母北の方にだにさやかにはをさをささし向ひ奉り給はず、かたはなるまでもてなし給ふものから心ばへけはひのうもれたるさまならず愛敬づき給へることはた人よりもすぐれ給へり。かくうちまゐりや何やと我がかたざまをのみ思ひ急ぐやうなるも心苦しきなどおぼして「さるべからむさまをおぼし定めての給へ。おなじことゝこそ仕うまつらめ」と母君にも聞え給ひけれど「更にさやうの世づきたるさま思ひたつべきにもあらぬ氣色なればなかなかならむとは心苦しかるべし、御宿世にまかせて世にあらむかぎりは見奉らむ、後ぞ哀にうしろめたけれど世をそむくかたにてもおのづから人笑へにあはつけき事なくて過ぐし給はなむ」などうちなきて御心ばせの思ふやうなることをぞ聞え給ふ。いづれもわかず親がり給へど御かたちを見ばやとゆかしうおぼしてかくれ給ふこそ心憂けれと恨みて、人知れず見え給ひぬべしやとのぞきありき給へど絶えてかたそばをだにえ見奉り給はず。「上おはせぬほどは立ちかはりて參りくべきを疎々しくおぼしわくる御氣色なれば心うくこそ」など聞えてみすの前に居給へば御いらへなどほのかに聞え給ふ。御聲けはひなどあでにをかしうさまかたち思ひやられて哀に覺ゆる人の御ありさまなり。「君が御姫

君たちを人に劣らじと思ひおごれどこの君にえしも優らずやあらむ、かゝればこそ世の中廣きうちはわづらはしけれ。たぐひあらじと思ふに優る方もおのづからありぬべかめり」などいとゞいぶかしう思ひ聞え給ふ。「月比なにとなく物さわがしき程に御琴の音をだにうけ給はらで久しくなり侍りにけり。西の方に侍る人は琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取りつべくや覺え侍るらむ、なまかたほにきたるに聞きにくき物の音がらなり。同じくは御心留めて教へさせ給へ、おきなはとりたてゝならふ物侍らざりしかど、そのかみ盛りなりし世に遊び侍りし力にや聞き知るばかりのわきまへは何事にもいとつきなくは侍らざりしを、うちとけても遊ばさねど時々うけ給はる御琵琶の音なむ、むかし覺え侍る。故六條院の御傳にて左のおとゞなむこの比世に殘り給へる。源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に劣るまじういと契りことに物し給ふ人々にてあそびの方は取りわきて心留め給へるを手づかひ少しなよびたるばち音なむ、おとゞには及び給はずと思ひ給ふるをこの御琴のねこそいと能く覺え給へれ。琵琶は押手まづやかなるをよきにするものなるにぢうさすほどばち音のさまかはりてなまめかしう聞えたるなむ、女の御事にてなかなかをかしかりける。いであそばさむや御琴まゐれ」とのたまふ。女房などはかくれ奉るもをさをさなし。いと若き上臈だつが見え奉らじと思ふはしも、心にまかせてゐたれば「さぶらふ人さへかくもてなすが安からぬ」と腹立ち給ふ。若君うちへ參らむととのゐ姿にて參り給へる、わざとうるはしきみづらよりもいとをかしく見えていみじくうつくしとおぼしけり。麗景殿に御ことつけ聞え給ふ。

「ゆづりきこえて今宵もえ參るまじく、なやましくなむと聞えよ」とのたまひて「笛すこし仕うまつれ。ともすれば御前の御遊に召し出でらるゝ、かたはらいたしや。またいと若き笛を」とうちゑみて雙調ふかせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、「けぢうはあらずなりゆくは、このわたりにておのづから物にあはするけなり。猶かきあはせさせ給へ」とせめ聞え給へば苦しとおぼしたる氣色ながら爪彈きにいとよく合せて唯少しかきならし給ふ。かはぶえふつゝかになれたる聲してこの東のつまに軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたるを見給ひて「おぼしとおもへば急ぎまゐり給ひぬ。中宮の上の御局より御とのゐどころに出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐる中に見つけ給ひて「昨日はなどいと疾くはまかでにし。いつ參りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかで侍りにしくやしさに、まだ内におはしますと人の申しつれば急ぎまゐりつるや」とをさなげなるものから馴れ聞ゆ。「内ならで心やすき所にも時々はあそべかし。若き人どものそこはかとなくあつまる所ぞ」とのたまふ。この君召しはなちて語らひ給へば、人々は近うもまゐらず罷で散りなどして志めやかになりぬれば「春宮にはいとま少しゆるされにためりな。いとぢげうおもほしまどはすめりしを、時とられて人わろかめり」とのたまへば「まつはさせ給へりしこそ苦しかりしが、御前にはしも」と聞えさして居たれば「われをば人げなしと思ひはなたれたるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。ふるめかしき同じすぢにて東と聞ゆなるはあひ思ひ給ひてむやと忍びて語らひ聞えよ」などのたまふついでに、この花を奉ればうちゑみて「うらみて後ならましかば」とてうちも置かず御覽ず。枝のさま花房色も香も世の常ならず「園に匂へる紅の色にとられて香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとりならべても咲きけるかな」とて御心留め給へる花なればかひありてもてはやし給ふ。「今夜はとのゐなめり、やがてこなたにを」とめしこめつれば東宮にもえ參らず、花も耻しく思ひぬべくかうばしくて氣近くふせ給へるを若き心ちにはたぐひなくうれしくなつかしく思ひ聞ゆ。「この花のあるじはなど春宮にはう

ぎ書きて、この君の懐紙に取りまぜ押したゝみて出したて給ふを、幼き心にいと馴れ聞えまほしとおもへば急ぎまゐり給ひぬ。中宮の上の御局より御とのゐどころに出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐる中に見つけ給ひて「昨日はなどいと疾くはまかでにし。いつ參りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかで侍りにしくやしさに、まだ内におはしますと人の申しつれば急ぎまゐりつるや」とをさなげなるものから馴れ聞ゆ。「内ならで心やすき所にも時々はあそべかし。若き人どものそこはかとなくあつまる所ぞ」とのたまふ。この君召しはなちて語らひ給へば、人々は近うもまゐらず罷で散りなどして志めやかになりぬれば「春宮にはいとま少しゆるされにためりな。いとぢげうおもほしまどはすめりしを、時とられて人わろかめり」とのたまへば「まつはさせ給へりしこそ苦しかりしが、御前にはしも」と聞えさして居たれば「われをば人げなしと思ひはなたれたるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。ふるめかしき同じすぢにて東と聞ゆなるはあひ思ひ給ひてむやと忍びて語らひ聞えよ」などのたまふついでに、この花を奉ればうちゑみて「うらみて後ならましかば」とてうちも置かず御覽ず。枝のさま花房色も香も世の常ならず「園に匂へる紅の色にとられて香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとりならべても咲きけるかな」とて御心留め給へる花なればかひありてもてはやし給ふ。「今夜はとのゐなめり、やがてこなたにを」とめしこめつれば東宮にもえ參らず、花も耻しく思ひぬべくかうばしくて氣近くふせ給へるを若き心ちにはたぐひなくうれしくなつかしく思ひ聞ゆ。「この花のあるじはなど春宮にはう

つろひ給はざりし。知らず、心知らむ人になどこそ聞き侍りしか」など語り聞ゆ。大納言の御心ばへは我が方ざまに思ふべかめれと聞き合せ給へど思ふ心は殊にまみぬれば、この返事けざやかにものたまひやらず、つとめてこの君のまかづるになほざりなるやうにて、

「花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過さましやは」。「さて猶今は翁どもにさかしらせで忍びやかに」とかへすがへすの給ひて、この君も東のをばやんごとなくむつましう思ひましたり。なかなかこと方の姫君は見え給ひなどして例のはらからのさまなれど、童心地にいとおもりかにあらまほしうおはする心ばへを、かひあるさまにて見奉らばやと思ひありくに春宮の御方のいと花やかにもてなし給ふにつけて、おなじことゝは思ひながらいと飽かず口惜しければ、この宮をだに氣近くて見奉らばやと思ひありくにうれしき花のついでなり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。「妬げにもの給へるかな。あまりすきたる方に進み給へるを許し聞えず」と聞き給ひて左の大臣「われらが見奉るには、いとものまめやかに御心をさめ給ふこそをかしけれ、あだ人にせむにたらひ給へる御さまをまひてまめだち給はむも見所すくなくやならまし」などまりうごちて今日もまゐらせ給ふにまた、

「もとつかのにほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をやちらさむ。とすきずきしや。あなかしこ」とまめやかに聞え給へり。誠にいひならさむと思ふ所あるにやとさすがに御心とさめきまを給ひて、

「花の香をにほはす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめむ」など猶心とけずいらへ

給へるを心やましと思ひ居給へり。北の方まかで給ひてうちわたりの事のたまふ序に「若君の一夜とのゐして罷り出でたりしにほひのいとをかしかりしを人はなほと思ひしを宮のいとおもほしよりて、兵部卿の宮に近づき聞えにけり、うべわれをばすさめたりと氣色とり怨じ給ひしこそをかしかりしか。こゝに御せうそこやありし。さも見えざりしを」とのたまへば「さかし。梅の花めで給ふ君なればあなたのつまの紅梅いとさかりなりしをたゞならで折りて奉れたりしなり。移香はげにこそ心ことなれ、交らひ給はむ女などはさはえ惑めぬかな。源中納言はかうざまにこのましうはたき匂はせで人香こそ世になけれ。怪しうさきの世の契りいかなりけるむくいにかとゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど梅はおひ出でけむねこそ哀なれ。この宮などのめで給ふ、さることぞかし」など花によそへてもまづかけ聞え給ふ。宮の御方は物おぼし知る程にねびまさり給へれば何事も見知り聞き咎め給はぬにはあらねど、人に見え世づきたらむ有様は更にもおぼしはなれたり。世の人も時による心ありてにや、さし向ひたる御方々には心をつくし聞えわび、今めかしきこと多かれどこなたは萬につけ物まめやかに引き入り給へるを、宮は御ふさいのかたに聞き傳へ給うて、深ういかでとおぼしなりにけり。若君を常にまつはしよせ給ひつゝ忍びやかに御文あれど、大納言の君深く心がけ聞え給ひて、さも思ひたちての給ふことあらばと氣色とり心まうけ惑給ふを見るにいとほしうひき違へてかく思ひよるべくもあらぬ方にしもなげの言の葉を盡し給ふ。かひなげなることゝ北の方もおぼしのたまふ。はかなき御かへりなどもなければま

けじの御心そひておもほしやむべくもあらず。何かは人の御ありさまなどかはさても見奉らまほしう、おひさき遠くなどは見えさせ給ふにまた北の方おもほしよる時々あれど、いとたう色めき給ひて通ひ給ふ。忍び所おほく八の宮の姫君にも御志あさからでいとあはげうまかでありき給ふ。たのもしげなき御心のあだあだしさなども、いとゞつゝましければ、まめやかにおもほし絶えたるをかだじけなきばかりに忍びて母君ぞたまさかにさかしらがり聞え給ふ。

竹河

これは源氏の御ぞうにも離れ給へりし後ちの大殿わたりにありける、わるごだちのおちとまり殘れるが問はずがたりまおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれどかの女どものいひけるは、源氏の御末々にひがごとゞもの交りて聞ゆるはわれよりも年の數積りぼけたりける人の、僻事にやなどあやしがりける何れかはまことならむ。内侍のかみの御腹に故殿の御子は男三人女二人なむ坐しけるを、さまざまにかしづきたてむ事をおぼしおきて年月の過ぐるも心もとながり給ひしほどに、あへなくうせ給ひにしかば、夢のやうにていつしかと急ぎおぼしゝ御宮仕もをこたりぬ。人の心時にのみよるわざなりければ、さばかり勢いかめしく坐せしおとゞの御名殘内々の御寶物らうじ給ふ所々、その方の衰へはなけれど大方の有樣引きかへたるやうに殿の内まめやかになりゆく。かんの君の御近きゆかりそこらこそは世にひろごり給へど、中々やんごとなき御なかからひのもとよりも親しからざりしに故殿のなさけ少しおくれ、むらむらしさ過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふこともありけるゆかりにや誰にもえなつかしう聞え給はず。六條院にはすべて猶昔に變らず、かずまへ聞え給ひて、うせ給ひなむ後の事ども書きおき給へる御そうぶんの文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、右の大殿などはなかなかその心ありてさるべき折々音づれ聞え給ふ。男君達は御元服などまておのおのおとなび給ひにしかば、殿おはせで後心もとなく哀なることもあれどおのづからなり出で給ひぬべかめり。姫君達をいかにもてなし奉らむとおぼしみだるうちにも必ず宮仕のほい深きよしをおとゞの奏し置き給ひければ、おとなび給ひぬらむかしと年月を推し量らせ給ひて仰言絶えずあれど、中宮のいよいよならびなくのみなりまさり給ふ御けはひにおされて、皆人無德にものし給ふめる、末にまゐりて遙に目をそばめられ奉らむもわづらはしく、また人におとり數ならぬさまにて見むはた心づくしなるべきをおぼしたゆたふ。冷泉院よりいとねんごろにおぼしのたまはせて、かんの君の昔ほいなくて過ぐし給ひしつらさをさへとりかへし恨み聞え給ひて、「今はまいてさだすぎ、すさまじきありさまに思ひ捨て給ふとも後安き親になずらへてゆづり給へ」といとまめやかに聞え給ひければ、いかゞはあるべきことならむ、自らのいと口惜しき宿世にて思の外に心づきなしとおぼされにしかば、耻しうかたじけなきをこの世の末にや御覽じなほされましなど定めか

ね給ふ。かたちいとようおはする聞えありて心がけ申し給ふ人おほかり。右の大殿の藏人の少將とかいひしは三條殿の御腹にて兄君達よりもひきこしいみじうかしづき給ふ、人がらもいとをかしかりし君いとねんごろに申し給ふ。いづかたにつけてももてはなれ給はぬ御なからひなれば、この君達のむつびまゐり給ひなどするはけどほくもてなし給はず。女房にも氣近うなれよりつゝ思ふ事を語らふにもたよりありてよるひるあたりさらぬ耳かしがましさをうるさきものゝ心苦しきにかんの殿もおぼしたり。母北の方の御文もまばまば奉り給ふ。「いとかろびたる程に侍れどおぼしゆるすかたもや」となむ、おとゞも聞え給ひける。姫君をば更にたゞのさまにもおぼしおきて給はず、中の君をなむ今少し世の聞え輕々しからぬ程になずらひならばさもやとおぼしける。ゆるし給はずばぬすみもとりつべくむくつけきまで思へり。こよなきことゝはおぼさねど女方の心ゆるし給はぬ事のまぎれあるは世の音ぎゝもあはつけきわざなれば聞えつく人をも「あなかしこ。あやまちひきいづな」などの給ふにくたされてなむ、わづらはしかりける。六條院の御末に朱雀院の宮の御腹に生れ給りへし君、冷泉院に御子のやうにおぼしかしづく四位の侍從その比十四五ばかりにて いときびはにをさなかるべき程よりは心おきておとなおとなしくめやすく人にまさりたる生ひさきまゐるく見え給ふを、かんの君は婿にても見まほしくおぼしたり。この殿はかの三條の宮といと近き程なればさるべき折々のあそび所に君達にひかれて見え給ふ時々あり。心にくき女のおはする所なれば若き男の心づかひせぬなう見えまゐらがひさまよふ中にかたちのよき

はこのたちさらぬ藏人の少將、なつかしく心耻しげにてなまめいたる方はこの四位の侍從の御有樣に似る人ぞなかりける。六條院の御けはひ近うと思ひなすがことなるにやあらむ。世の中におのづからもてかしづかれ給へる人なり。若き人々は心ことにめでであへり。かんの殿も「げにこそめやすけれ」などのたまひてなつかしう物聞え給ひなどす。「院の御心ばへを思ひ出で聞えてなぐさむよなういみじうのみ思ほゆるを、その御かたみにも誰をかは見奉らむ。右のおとゞはことごとしき御ほどにて、ついでなき對面もかたきを」などのたまひてはらからのつらに思ひ聞え給へれば、かの君もさるべき所に思ひて參り給ふ。世の常のすきずきしさも見えず、いといたうまづまりたるをぞこゝかしこの若き人ども口惜しくさうざうしきことに思ひて いひなやましけり。むつきのついたちごろかんの君の御はらからの大納言高砂謠ひし夜、藤中納言、故大殿の太郎、まさばしらの一つ腹など參り給へり。右のおとゞも御子ども六人ながらひきつれておはしたり。御かたちよりはじめて 他かぬことなく見ゆる人の御有樣おぼえなり、君達もさまさまいと清げにて 年のほどよりはつかさくらゐも過ぎつゝ何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に藏人の君は かしづかれたるさまことなれどうちまめりて思ふことありがほなり。おとゞは御几帳へだてゝ 昔に變らず御物語聞え給ふ「その事となくてまばまばもえうけたまはらず、年の數そふまゝに內參りよりほかのありきなどうひうひしくなりにて侍ればいにしへの御物語も聞えまほしき折々多く過ぐし侍るをなむ、若きをのこどもはさるべきことには召しつかはせ給へ。必ずその志御覽ぜられ

よといましめ侍る」など聞え給ふ。「今はかく世にふる數にもあらぬやうになりゆく有樣をおぼしかずまふるになむ、過ぎにし御事もいとゞ忘れがたく思う給へられける」と申し給ひけるついでに、院よりのたまはすることほのめかし聞え給ふ「はかばかしう後見なき人のまじらひはなかなか見苦るしきをとかたかた思ひ給へなむわづらふ」と申し給へば「内に仰せらるゝことのあるやうにうけ給はりしを、いづ方に思ほし定むべきことにか、院はげに御位を去らせ給へるにこそさかり過ぎたる心地すれど、世にありがたき御ありさまはふりがたくのみおはしますめるをよろしうおひ出づる女子侍らましかばと思ひ給へよりながら、耻しげなる御中に交らふべきものゝ侍らでなむ口惜しう思う給へらるゝ。そもそも女一宮の女御は許し聞え給ふや、ささぎさの人さやうのはゞかりにより滯る事も侍りし」と申し給へば「女御なむつれづれにのどかになりにたる有樣も同じ心にうしろみて慰めまほしきをなど、かのすゝめ給ふにつけていかゞなどだに思う給へよるになむ」と聞え給ふ。これかれこゝに集り給ひて三條の宮に參り給ふ。朱雀院の深き心物し給ふ人々六條院の方ざまのもかたかたにつけて猶かの入道宮をばえよぎずまゐり給ふなめり。この殿の左近中將、右中辨、侍從の君などもやがておとゞの御供に出で給ひぬ。ひきつれ給へる勢ひことなり。ゆふつけて四位の侍從參り給へり。そこらおとなしき若君達もあまたさまざまにいづれかはわろびたりつる。皆めやすかりつる中に立ち後れてこの君のたち出で給へる、いとこよなくめとまる心ちして例の物めでする若き人達は「猶異なりけり」などいふ。「この殿の姫君の御傍には

これをこそさゝならべて見め」と聞きにくゝいふ。げにいと若うなまめかしきさましてうちふるまひ給へる匂香などよのつねならず。姫君と聞ゆれど心おはせむ人はげに人よりはまさるなめりと見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿御念誦堂におはして「こなたに」とのたまへば、ひんがしのはしより昇りて戸口の御簾の前に居給へり。お前近き若木の梅心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いとすかせ奉らまほしきさまの志給へれば、人々はかなきことをいふにてとずくなに心にくき程なるをねたがりて宰相の君と聞ゆる上臈のよみかけ給ふ。

「折りて見ばいとゞにほひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花」。口はやしと聞きて、

「よそにてはもぎ木なりとやさだむらむ志たに匂へる梅のはつはな。さらば袖ふれて見給へ」などいひすさぶに、まことは色よりもと口々ひきもうごかしつべくさまよふ。かんの君奥の方よりゐざり出で給ひて「うたての御達や耻しげなるまめ人をさへよくこそおもなけれ」と忍びてのたまふなり。まめ人とこそつけられたりけれ、いとくつしたる名かなと思ひ居給へり。あるじの侍從殿上などもまだせねば所々もありかでおはしあひたり。せんかうの折敷二つばかりしてくだものさかづきばかりさしいで給へり。「おとゞはねびまさり給ふまゝに故院にいとようこそ覺え奉り給へれ。この君は似給へる所も見え給はぬを、けはひのいと志めやかになまめいたるもてなしぞかの御若ざかり思ひやらるゝ。かうざまにぞおはしけむかし」など思ひ出で聞え給ひてうち志ほたれ給ふ名殘さへとまりたるかうばしさを

人々はめでくつがへる。侍従の君まめ人の名をうれたしと思ひければ二十餘日の比梅の花盛なるにほひすくなげにとりなされし、すきものならはさむかしとおぼして藤侍従の御許におはしたり。中門入り給ふ程に同じ直衣すがたなる人たてりけり。かくれなむと思ひけるをひきとゞめたれば、この常にたちわづらふ少將なりけり。寢殿の西面に琵琶箏の琴の聲するに心をまどはして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬ事思ひはじめむは罪深かるべきわざかなと思ふ。琴の聲も止みぬれば「いざまゐるべき給へ、まろはいとたどたどし」とて引きつれて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに梅がえをうそぶきて立ちよるけはひの、花よりもまゐるぐさとうち匂へれば、妻戸おしあけて人々あづまをいとよく搔き合せたり。女の琴にてりよの歌はかうしもあはせぬをいたしと思ひて、今ひとかへりおりかへしうたふを、琵琶もになく今めかしう故ありてもてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば今夜は少しうちとけてはかなしごとなどもいふ。内より和琴さしいでたり。かたみにゆづりて手觸れぬに、侍従の君してかんの殿「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今夜は猶鶯にもさそはれ給へ」との給ひ出しければあまえて爪くふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心に入らず、かきわたし給へる氣色いとひゞき多く聞ゆ。常に見奉りむつびざりし親なれど、世におはせずと思ふにいと心ぼそきに、はかなきことの序にも思ひ出で奉るにいとなむあはれなる、大かたこの君はあやしう故大納言の御有様にいとようおぼえ、琴の音など唯それとこそ覺えつれとてない給ふも、ふるめい給ふ

まゐるしの涙もろさにや。少將も聲いとおもしろうてさきくさうたふ。さかしら心つきてうち過ぐしたる人もまじらねば、おのづからかたみにもよほされて遊び給ふに、あるじの侍従は故大臣に似奉り給へるにやかやうの方はおくれて盃をのみ進むれば「ことぶきをだにせむや」とはづかしめられて竹河をおなじ聲にいだしてまだ若けれどをかしううたふ、簾のうちよりかはらけさしいづ。「醉のすゝみてはまゐのぶることもつゝまれず、ひがごとするわざとこそ聞き侍れ、いかにもてない給ふぞ」ととみにうけひかず。こうちきかさなりたるほそなかの、人がなつかしうまゐみたるをとりあへたるまゝにかづけ給ふ。「何そもぞ」などさうどきて侍従はあるじの君にうちかづけていぬ。引きとゞめてかづくれど「みづうまやにて夜更けにけり」とてにげにけり。少將はこの源侍従の君のかうほのめきよるめればみな人これにこそ心よせ給ふらめ、我が身はいとどくんじいたく思ひよわりてあぢきなうぞうらむる。

「人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜のやみ」。うちなげきてたてば内の人のかへし、

「をりからや哀もまさらむ梅の花たゞかばかりにうつりしもせし」。あしたに四位の侍従のもとよりあるじの侍従のもとに「よべはいとみだりがはしかりしを、人々いかに見給ひけむと見給へ」とおぼしう假名がちにかきて、はしに、

「竹河のはしうちいでしひとふしに深き心のそこはまゐりきや」と書きたり。寢殿にもて參りてこれかれ見給ふ「手などもいとをかしうもあるかな。いかなる人今よりかくとゝのひ給

ふらむ。をさなくて院にもおくれ奉り母宮のおどけなうおふしたて給へれど、猶人には優るべきにこそはあめれ」とて、かんの君はこの君達の手など悪しきことを辱め給ふ。返事げにいと若く「よべは水うまやをなむ人々咎め聞ゆめりし。

竹河に夜をふかさじといそぎしもいかなるふしを思ひおかまし」。げにこのふしをはじめにて、この君の御曹司におはしてけしきばみよる。少将の推し量りしもしるく皆人心よせたり。侍従の君も若き心地に近さゆかりにて明暮むつびまほしう思ひけり。三月になりて咲く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛なるころ のどやかにおはする所にはまぎるゝことなく端ぢかなる罪もあるまじかめり。そのころ十八九の程にやおはしけむ、御かたちも心ばへもとりどりにぞをかしき。姫君はいとあざやかにけだかう今めかしきさまおよびて人にてみ奉らばにげなふぞ見え給ふ。櫻の細長山吹などの折にあひたる色あひの、なつかしき程に重りたるすそまで愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなども らうらうじう心耻しきけさへそひ給へり。今一所は薄紅梅にみぐし色にて柳の絲のやうにたをたをと見ゆ。いとそびやかになまめかしうすみたるさまして おもりかに心深きけは優り給へれど、匂ひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。碁うち給ふとてさし向ひ給へるかんざしみぐしのかゝりたるさまども いと見所あり。侍従の君けんそおよび給ふとて近う侍らひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて「侍従のおぼえことよなくなりにけり。御碁のけんそ許されにけるをや」とておとなおとなしくさましてつい居給へば、お前なる人々とかう居なほる。中將、

宮仕の いそがしうなり侍る程に 人におとりにたるは いと本意なきわざかなと憂へ給へば「辨官はまいて私の宮仕をこたりぬべきまゝにさのみやはおぼしすてむ」など申し給ふ。碁打ちさして耻らひておはさうずるいとをかしげなり。「内わたりなどまかりありきても故殿のおはしまさましかばと思う給へらるゝこと多くこそ」など涙ぐみて見奉り給ふ。廿七八の程に物し給へばいとよくとゝのひてこの御有樣どもをいかでいにしへおぼしおきてしに違へずもがなと思ひ居給へり。お前の花の木どもの中にも匂ひまさりてをかしき櫻を折らせて「外のには似ずこそ」などもてあそび給ふを「をさなくおはしまさうし時、この花はわがぞわがぞと爭ひ給ひしを、故殿は姫君の御花ぞと定め給ふ。上は若君の御木とさだめ給ひしを、いとさはなきのゝしらねど安からず思ひ給へられしはや」とて「この櫻の老木になりにけるにつけても過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人に後れ侍りにける身の愁もとめがたうこそ」など泣きみ笑ひみ聞え給ひて例よりはのどやかにおはす。人の婿になりて今は心ぢづかにも見え給はぬを花に心とめて物し給ふ。かんの君かくおとなしき人の親になり給ふ、御年の程思ふよりはいと若うきさよげに猶盛の御かたちと見え給へり。冷泉院のみかどはおほくはこの御有樣の猶ゆかしう昔戀しうおぼし出でられければ、何につけてかはとおぼしめぐらして姫君の御事をあながちに聞え給ふにぞありける。院へ參り給はむことはこの君達ぞ猶物のはえなき心地こそすべけれ。萬の事時につけたるをこそ世人もゆるすめれ。げにいと見奉らまほしき御ありさまはこの世にたぐひなくおはしますめれど盛ならぬ

心地ぞするや。琴笛のまらべ花鳥の色をも音をも時にまたがひてこそ人の耳にもとまるものなれ。「春宮はいかゞ」など申し給へば「いざや始よりやんごとなき人のかたはらもなきやうにてのみ物し給ふめればこそ、なかなかにてまじらはむは胸いたく人笑はれなる事もやあらむとつゝましければ、殿おはせましかば行く末の御宿世宿世は知らず只今はかひあるさまにもてなし給ひてましを」などのたまひ出でゝ皆ものあはれなり。中將など立ち給ひて後君達はうちさし給へる碁うち給ふ。「昔より爭ひ給ふ櫻をかけものにて三番に數ひとつ勝ち給はむ方に花をよせてむ」とたはぶれかはし聞え給ふ。くらうなれば端近うて打ちはて給ふ。御簾卷きあげて人々皆いどみねんじ聞ゆ。折しも例の少將、侍從の君の御曹司に來たりけるをうちつれて出で給ひにければ、大方人ずくなゝるに廊の戸のあきたるにやをら寄りて覗きけり。かううれしき折を見つけたるは佛などの顯はれ給へらむに參りたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕ぐれの霞のまぎれはさやかならねど、つくづくと見れば櫻色のあやめもそれと見わきつ。げに散りなむ後のかたみにも見まほしくにほひ多く見え給ふを、いとゞことざまになり給はむことわびしく思ひまさる。若き人々のうちとけたる姿どもゆふばえもをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗のらんさうおそしや」などはやりかにいふもあり。右に心よせ奉りて「西のお前によりて侍る木を左になして年比の御あらそひのかゝれば」ありつるぞかし」と右方は心地よげにはげまし聞ゆ。何事と知らねどをかしと聞きてさしいらへもせまほしけれど、うちとけ給へる折心地なくやはと思ひて出でゝいぬ。またかゝるまぎれもやと影にそひてぞうかゞひありきける。君達は花のあらそひをまつゝ明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方亂れおつるがいと口惜しうあたらしければまけ方の姫君、

「櫻ゆゑ風にこゝろのさわぐかな思ひぐまなき花と見るみる」。御かたの宰相君、

「咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深きうらみとも見ず」と聞えたすくれば、右の姫君、

「風にちることは世のつね枝ながらうつろふ花をたゞにしも見じ」この御方のたいふの君、

「心ありて池の汀におつる花あわとなりても我がかたによれ」。勝方の童べおりて花の下にありきて散りたるをいとおほく拾ひてもてまゐれり。

「大ぞらの風にちれども櫻花おのがものとぞかきつめて見る」。左のなれき、

「櫻花にほひあまたに散らさじと覆ふばかりの袖はありやは。心せばげにこそ見ゆめれ」などいひをらす。かくいふに月日はかなく過ぐすも行く末うしろめたきをかんの殿はよろづにおぼす。院よりは御せうそこ日々にあり。「女御うとうとしく覺しへだつるにや上はこゝに聞え疎むるなめり」といとにくげにおぼしのたまへば「たはぶれにも苦しうなむ。同じくはこの比のほどにおぼしたちね」などいとまめやかに聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いとかうあやにくにの給ふもかたじけなしなどおぼしたり。御調度などはそこらまおかせ給へれば人々のそうぞく何くれのはかなきことをぞ急ぎ給ふ。これを聞くに藏人の少

將はまゐぬばかり思ひて母北の方をせめ奉れば聞きわづらひ給ひて「いとかたはらいたきことにつけてほのめかし聞ゆるも、世にかたくなしき閑のまよひになむおぼし知る方もあらば推しはかりて猶慰めさせ給へ」などいとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかな」とうち歎き給ひて「いかなることゝ思う給へ定むべきやうもなきを、院よりわりなくのたまはするに思ひ給へ亂れてなむ。まめやかなる御心ならばこの程をおぼしまゐづめて慰め聞えむさまをも見給ひてなむ、世の聞えもなだらかならむ」など申し給ふも、この御まゐりすぐして中の君をとおぼすなるべし。さしあはせてはうたてまゐたりがほならむ、まだ位などもあさへたる程をなどおぼすに、男は更にまゐか思ひうつるべくもあらず。ほのかに見奉りて後は面影に戀しういかならむ折にとのみ覺ゆるも、かうたのみかゝらずなりぬるを思ひなげき給ふことかぎりなし。かひなきこともいはむとて、例の侍從の曹司にきたれば源侍從の文をぞ見居給へりける。ひきかくすを、さなめりと見て、うばひとりつ。事ありがほにやと思ひていたうも隱さず。そこはかとなくて唯世をうらめしげにかすめたり。

「つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ物うらめしき暮の春かな」。人はかうこそのどやかにさまよくねたげなめれ、我がいと人わらはれなる心いられを、かたへはめなれてあなづりそめられたると思ふも胸いたければ、ことに物もいはれで例かたらふ中將のおもとの曹司のかたに行くも例のかひあらじかしとなげきがちなり。侍從の君はこの御返事せむとて上に參り給ふを見るにいと腹だゝしうやすからず。若き心ちにはひとへに物ぞ覺えける。あさましきまで恨み歎けばこのまへ申すもあまりたはぶれにくゝいとほしといらへもをさをさせず。かの御碁のけんそせし夕暮のこともいひ出でゝ「さばかりの夢をだに又見てしがな。あはれ何をたのみにていきたらむ。かう聞ゆる事ものこり少なう覺ゆればつらきも哀といふことこそ誠なりけれ」とまめだちていふ。哀とていひやるべき方なきことなり。かの慰め給はむ御さま露ばかりうれしと思ふべき氣色もなければ、げにかの夕暮のけんそふなりけむに、いとゞからあやにくなる心は添ひたるならむとことわりに思ひて聞しめさせたらば、いとゞいかにけしからぬ御心なりけりと疎み聞え給はむ心苦しと思ひ聞えつる心もうせぬ、いと後めたき御心なりけりとむかひびつくれば「いでやさばれや、今はかぎりの身なれば物恐しくもあらずなりにたり。さても負け給ひしこそいとほしかりしか、おいらかに召し寄せてめぐはせ奉らましかばこよなからましものを」などいひて、

「いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心なりけり」。中將うちわらひて、

「わりなしや弱きによらむ勝負をこゝろひとつにいかゞまかする」といらふるさへぞつらかりける。

「あはれとて手をゆるせかしいきまにを君にまかする我が身とならば」。泣きみ笑ひみ語らひ明す。またの日は卯月になりにければはらからの君達のうちに參りさまよふに、いたうくつし入りて眺め居給へれば、母北の方は涙ぐみておはす。おとゞも院の聞しめす所もあるべし、何にかはおふなおふな聞き入れむと思ひてくやしう對面の序にもうち出で聞えずなり

にし。「みづから強ちに申さましかばさりともえ違へ給はざらまし」などのたまふ。さて例の「花を見て春はくらしつ今日よりやあげきなげきの下にまどはむ」と聞え給へり。お前にてこれかれ上臈だつ人々この御懸想人のさまざまにいとほしげなるを聞え知らするなかに中將おもと「いきしにをといひしさまの、言にのみはあらず、心苦しげなりし」など聞ゆればかんの君もいとほしと聞き給ふ。おとゞ北の方のおぼす所によりせめて人の御うらみ深くはと取りかへありておぼす、この御まゐりを妨げやうに思ふらむはしもめざましきこと限なきにても、たゞ人にはかけてあるまじきものに故殿のおぼしおきてたりしものを、院に參り給はむだに行末のはえばえしからぬをおぼしたる折しも、この御文とり入れて哀がる。御かへし。

「今日ぞまる空をながむる氣色にて花に心を移しけりとも」。「あないとほしき戯れにのみも取りなすかな」などいへど、うるさがりて書きかへず。九日にぞまゐりたまふ。右の大殿御車御前の人々數多奉り給へり。北の方もうらめしと思ひ聞え給へど年比もさもあらざりしに、この御事故まげう聞えかよひ給へるを、又かき絶えむもうたてあればかづけものどもよき女のさうぞくあまた奉れ給へり。「あやしううつし心もなきやうなる人のありさまを見給へあつかふほどに、承り留むるともなかりけるを驚かさせ給はぬもうとうとしくなむとぞありける。おいらかなるやうにてほのめかし給へるをいとほしと見給ふ。おとゞも御文あり「みづからも參るべきと思う給へつるに慎む事の侍りてなむ、をのこどもざうやくにとて參らす。疎からず召し使はせ給へ」とて源少將兵衛佐など奉れ給へり。「情はおはすかし」とよろこび聞え給ふ。大納言殿よりも人々の御車奉れ給ふ。北の方は故おとゞの御女まきばしらの姫君なればいづ方につけてもむつましう聞え通ひ給ふべけれどさしもあらず。藤中納言はしもみづからおはして中將辨の君達諸共に事行ひ給ふ。殿のおはせましかばと萬につけて哀なり。藏人の君例の人にいみじき詞をつくして「今はかぎりと思ひ侍る命のさすがに悲しきを哀と思ふとばかりだに一言のたまはせば、それにかけ留められて暫しもながらへやせむなどあるを、もて參りて見れば姫君二所うち語らひていといたうくつし給へり。よるひる諸共にならひ給ひて中のとばかりへだてたる西東をだにいとゆゑぶせきものにおもひてかたみに渡り通ひおはするを、よそよそにならむことをおぼすなりけり。心ことにおもたて引き繕ひ奉りたまへる御さまいとをかし。殿のおぼしのたまひしさまなどをおぼし出でゞ、物哀なる折からにてとりて見給ふ。おとゞ北の方のさばかり立ち並びてたのもしげなる御中になどかうすゞろごとを思ひいふらむとあやしきにも、かぎりとあるを、まことにやとおぼしてやがてこの御文のはしに、

「あはれてふ常ならぬ世のひとことも いかなる人にかくるものぞは。ゆゝしきかたにてなむほのかに思ひ知りたる」と書き給ひて「かう言ひやれかし」とのたまふを、やがて奉れたるを限なうめづらしきにも折をおぼしとむるさへいとゞ涙も留らず立ちかへり、「たが名はたゝじなどかごとがましくて、

「生ける世のまには心にまかせねば聞かでややまむ君がひとこと。塚の上にもかけ給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちにも急がれ侍らましをゝなどあるに、うたてもいらへをまてけるかな、書きかへでやりつらむよと苦しげにおぼして、物ものたまはずなりぬ。おとなわらはめやすき限をとゝのへられたり、大方の儀式などは内に参り給はましに變ることなし。まづ女御の御方に渡り給ひてかんの君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなむ上に参う上り給ひける。后、女御など皆年比經てねび給へるにいと美しげにて盛りに見所あるさまを見奉り給ふはなどてかはおろかならむ。花やかに時めき給ふたゞ人だちて心安くもてなし給へるさましもぞ。げにあらまほしうめでたかりける。かんの君を暫しさぶらひ給ひなむと心留めて思しけるに、いと疾くやをら出で給ひにければ日をしう心うしとおぼしたり。源侍從の君をば明暮お前に召しまつはしつゝ、げに唯昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御心えなり。院の内にはいづれの御方にも疎からず馴れまじらひありき給ふ。この御方にも心よせあり顔にもてなして またにはいかに見給ふらむの心さへそひ給へり。夕暮のまめやかなるに藤侍從とつれてありくにかの御方の御前近く見やらるゝ五葉に藤のいとおもしろく咲きかゝりたるを、水のほとりの石に苦をむしろにてながめ居給へり。まほにはあらねど世の中うらめしげにかすめつゝかたらふ。

「手にかくるものにしあらば藤の花まつよりまさる色を見ましや」とて 花を見上げたる景色など あやしく哀に心苦しくもおもほゆれば、我が心にあらぬ世のありさまにほのめかす。

「紫の色はかよへど藤の花こゝろにえこそまかせざりけれ」。まめなる君にていとほしと思へり。いと心惑ふばかりは思ひ入れざりしかど口をしうは覺えけり。かの少將の君はしもまめやかにいかにせましとあやまちもまつべく靜めむ方なくなむ覺えける。聞え給ひし人々中の君とうつろふもあり。少將の君をば母北の方の御怨によりさもやと思ほしてほのめかし聞え給ひしを絶えて音づれずなりにたり。院にはかの君達もまたしくもとよりさぶらひ給へど、この参り給ひて後をさをさ参らず。まれまれ殿上の方にさしのぞきても、あぢきなうにげてなむまかり出でける。内には故おとゞの志おき給へるさまことなりしをかく引き違へたる御宮仕を、いかなるにかとおぼして中將をめしてなむのたまはせける。御氣色よろしからず。「さればこそ世の人の心のうちも傾きぬべきことなりとかねて申しゝことをおぼしとるかたことにて、かうおぼしたちにしかばともかくも聞えがたくて侍るに、かゝる仰言の侍るはなにがしらの身のためもあぢきなくなむ侍る」といとものしと思ひて、かんの君を申し給ふ。「いざや只今かう俄にしも思ひたゝざりしを、あながちにいとほしうのたまはせしかば、後見なきまじらひの内わたりはしたなげなめるを、今は心やすき御有樣なめるにまかせ聞えてと思ひよりしなり。誰もたれもびんなからむ事はありのまゝにもいさめ給はで、今ひきかへし右のおとゞもひがひがしきやうにおもむけてのたまふなれば苦しうなむ。これもさるべきにこそは」となだらかにのたまひて心もさわがい給はず「その昔の御す

くせは目に見えぬものなればかうおぼしのたまはするを、これは契り異なるともいかゞはは奏しなほすべきことならむ。中宮を憚り聞え給ふとて院の女御をばいかゞ奉り給はむとする。後見や何やとかねておぼしかはすともさしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむよう思へば、内は中宮おはしますとてことびとは交らひ給はずや、君に仕うまつることはそれが心やすきこそ昔より興あることにはおけれ。女御はいさゝかなることのたがひめありてよろしからず思ひ聞え給はむに、ひがみたるやうになむ世のさゝみゝも侍らむ」など二所して申し給へば、かんの君いと苦しとおぼしぬ。さるは限りなき御思ひのみ月日に添へてまさる。七月より孕み給ひにけり。うち惱み給へるさまげに人のさまざまに聞え煩はすもことわりぞかし。いかでかはかゝらむ人をなのめに見聞き過ぐしてはやまむとぞ覺ゆる。明暮御あそびをせさせ給ひつゝ侍從も氣近う召し入るれば御琴の音などは聞き給ふ。かの梅がえにあはせたりし中將のおもとの和琴も常に召し出でゝ彈かせ給へば、聞きあはするにもたゞには覺えざりけり。その年かへりてをとこだうかせられけり。殿上の若人どもの中に物の上手多かる比ほひなり。その中にも勝れたるをえらせ給ひて、この四位の侍從右の歌頭なり。かの藏人の少將樂人の數の中にありけり。十四日の月の花やかに曇りなきに御前より出でゝ冷泉院にまゐる。女御もこの御息所も上に御つぼねして見給ふ。上達部親王達ひき連れて參り給ふ。右の大殿致仕の大殿のぞうを離れてきらきらしう清げなる人はなき世なりと見ゆ。内のお前よりもこの院をばいとはづかしうことに思ひ聞えて皆人用意を加ふる中にも、藏人

の少將は見給ふらむかしと思ひやりてまづ心なし。にほひもなく見苦しき綿花もかざす人がらに見わかれてさまも聲もいとをかしくぞありける。竹河謠ひてみはしのもとにふみよる程、過ぎにし夜のはかなかりし遊も思ひ出でられければ、ひがごともまつべくて涙ぐみけり。后の宮の御方にまゐれば上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜ふかうなるまゝに畫よりもはしたなう澄み昇りて、いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、ふむ空もなう漂ひありきてさかづきもさして一人をのみ咎めらるゝはめいぼくなくなむ。夜一夜所々にかきありきていと惱しう苦しくて臥したるに、源侍從を院より召したれば「あなくるし。まばし休むべきに」とむつかりながら參り給へり。御前の事どもなど問はせ給ふ。「かとうはうち過ぐしたる人のさきざきするわざを、選ばれたるほど心にくかりけり」とてうつくしとおぼしためり。ばんずんらくを御口ずさびにし給ひつゝ御息所の御方に渡らせ給へれば御供に參り給ふ。物見に參りたる里人多くて例よりも花やかにけはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て聲聞き知りたる人に物などのたまふ。「一夜の月かげははしたなかりしわざかな。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も桂の影にはづるにはあらずやありけむ。雲の上近くてはさしも見えざりき」など語り給へば人々哀と聞くもあり、「闇はあやなきを月ばえ今少し心ことなりと聞えし」などすかしてうちよより、

「竹河のその夜のことは思ひいづやまのぶばかりのふしはなけれど」とはかなきことなれど、涙ぐまるゝもげにいと淺くは覺えぬことなりけりとみづから思ひまはらる。

「流れてのたのめむなしき竹河によはうきものと思ひ志りにき」。物哀なる氣色を人々をかしがる。さるはおり立ちて人のやうにも侘び給はざりしかど、人ざまのさすがに心苦しう見ゆるなり。「うち出で過ぐすこともこそ侍れ。あなかしこ」とて立つ程にこなたにと召し出づればはしたなき心地すれど參り給ふ。「故六條院のたうかのあしたに女がたにてあそびせられける、いとおもしろかりきと右のおとゞの語られし。何事もかのわたりのさしつぎなるべき人かたくなりにける世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集りて、いかにはかなき事もをかしかりけむ」などおぼし遣りて、御琴ども調らべさせ給ひて箏は御息所琵琶は侍從にたまふ。和琴を彈かせ給ひてこのとのなどあそび給ふ。御息所の御琴の音まだかたなりなる所ありしを、いとよう教へない奉り給ひてけり。今めかしう爪音よくてうたごくのものなど上手にいとよく彈き給ふ。何事も心もとなく後れたることは物し給はぬ人なめり、かたちいとをかしかるべしと猶心とまる。かやうなる折多かればおのづから氣遠からず見なれ給ふ。うたてなれなれしうなどは恨みかけねど、折々につけて思ふ心の違へるなげかしさをかすむもいかゞおぼしけむ、知らずかし。卯月に女宮生れ給ひぬ。ことにけざやかなる物のはえもなきやうなれど、院の御氣色に隨ひて右の大殿よりはじめて御うぶやしなひ志給ふ所々おほかり。かんの君つと抱きもちてうつくしみ給ふに、疾う參り給ふべきよしのみあればいかのほどにまゐり給ひぬ。女宮一所おはしますにいと珍しう美しうておはすればいといみじう覺したり。いとゞ唯こなたにのみおはします。女御がたの人々「いとかゝらでありぬべき世

かな」とたゞならずいひ思へり。さうじみの御心どもは殊にかるがるしく背き給ふにはあらねど、さぶらふ人々の中にくせぐせしきことも出で來などしつゝ、かの中將の君のさいへど人のこのかみにての給ひし事かなひて、かんの君もむげにかくいひいひてのはていかならむ、人笑へにはしたなうもやもてなされむ、上の御心ばへは淺からねど年經てさぶらひ給ふ御かたがたよろしからず思ひ放ち給はゞ苦しくもあるべきかなとおもほすに、内には誠にものしとおぼしつゝ度々御けしきありと人の告げきこゆれば煩しくて、おほやけざまにてまじらはせ奉らむことをおぼしてないしのかみを讓り聞え給ふ。おほやけいとかたうし給ふことなりければ、年ごろかう覺しおきしかど得辭し給はざりしを、故おとゞの御心をおぼして久しうなりにける。昔の例など引き出でゝその事かなひぬ。この君の御すくせにて年比申し給ひしはかたきなりけりと見えたり。かくて心安くて内ずみも志給へかしとおぼすにもいとほしう少將の事を母北の方のわざとのたまひしものを、たのめ聞えしやうにおとゞにかし聞えしもいかに思ひ給ふらむとおぼしあつかふ。辨の君して心美しきやうにおとゞに聞え給ふ。「内よりかゝる仰言のあればさまざまにあながちなるまじらひのこのみと、世のきゝみゝもいかゞと思う給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば「内の御氣色はおぼし咎むるもことわりになむうけ給はる。おほやけごとにつけても宮づかへ志給はぬはさるまじきわざになむ。はやおぼし立つべきになむ」と聞え給へり。又この度は中宮の御氣色とりてぞ參り給ふ。おとゞおはせましかばおしけち給はざらましなど、哀なる事どもをなむ。姉君はかたち

など名だかうをかしげなりと聞し召しおきたりけるを、引き違へ給へるをなま心ゆかぬやうなれど、これもいとらうらうしく心にくゝもてなしてさぶらひ給ふ。さきのかんの君かたちをかへてむとおぼしたつを、かたがたにあつかひ聞え給ふ程に「おこなひも心あわたゞしうこそおぼされめ、今少しいづ方も心のどかに見奉りなし給ひてもどかしき所なくひたみちにつとめ給へ」と君達の申し給へばおぼしとゞこほりて、うちには時々忍びて参り給ふ折もあり。院には煩しき御心ばへのなほ絶えねばさるべき折も更に参り給はず。いにしへを思ひ出でしがさすがに辱なう覺えしかしこまりに、人の皆ゆるさぬ事に思へりしをも知らずがほに思ひて参らせ奉りてみづからさへたはぶれにても若々しきことの世に聞えたらむこそいとまばゆく見苦しかるべけれとおぼせど、さるいみによりとはた御息所にも顯し聞えたまはねば我をむかしより故おとゞは取りわきておぼしかしづき、かんの君は若君を櫻のあらそひはかなき折にも心よせ給ひし名殘におぼしおとしけるよと、うらめしう思ひ聞え給へり。院の上はたましていみじうつらしとぞおぼしの給はせける。「ふるめかしきあたりにさし放ちて思ひおとさるゝもことわりなり」とうち語らひ給ひて哀にのみおぼしまさる。年比ありて又男御子産み給ひつ。そこらさぶらひ給ふ御方々にかゝることなくて 年比になりにけるをおろかならざりける御すくせなど世の人おどろく。みかどまして限りならめづらしとこの今宮をば思ひ聞え給へり。おりゐ給はぬ世ならましかばいかにかひあらまし、今は何事もはえなき世をいと口をしとなむおぼしける。女一宮を限りなきものに思ひ聞え給ひしを、かくさまざまうつくしうて數添ひ給へれば、珍らかなる方にていと殊に覺いたるをなむ、女御もあまりかうまでは物しからむと御心動きける。事に觸れてやすからずくねぐねしき事出で來などしておのづから御中も隔たるべかめり。世の事として 數ならぬ人のなからひにも、もとよりことわりえたる方にこそあいなきおほよその人も心をよするわざなめれば、院の内の上下の人々いとやんごとなくて久しくなり給へる御方にのみことわりて、はかなき事にもこの御方ざまをよからず取りなしなどするを、御せうとの君達も「されば よ悪しうやは聞えおきける」といとゞ申し給ふ。心やすからず聞き苦しきまゝにかゝらでのどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし、限りなきさいはひなくて宮づかへのすぢは思ひよるまじきわざなりけりと、おほうへは歎き給ふ。聞えし人々のめやすくなりのぼりつゝさてもおはせましにかたはならぬぞ數多あるや。その中に源侍從とて いと若うひはづなりと見しは宰相の中將にて、にほふやかをるやと聞きにくゝめでさわがるなる。げにいと人がらおもりかに心にくきを、やんごとなき御子達おとゞの御むすめを、志ありてのたまふなるなども、聞き入れずなどあるにつけて「そのかみは若う心もとなきやうなりしかどめやすくねびまさりぬべかめり」などいひおはさうす。「少將なりしも三位の中將とかいひて覺えありかたちさへあらまほしかりきや」などなま心わろき仕うまつり人はうち忍びつゝ「うるさげなる御有樣よりは」などいふもありていとほしうぞ見えし。この中將は猶思ひそめてし心絶えず、うくもつらくも思ひつゝ左大臣の御むすめを得たれどをさをさ心もとめず、道のは

てなる常陸帯のと、手習にもことぐさにもするはいかに思ふやうのあるにかありけむ。御息所安げなき世のむつかしさに里がちになり給ひにけり。かんの君思ひしやうにはあらぬ御有様を口をしとおぼす。内の君はなかなか今めかしう心やすげにもてなして、世にも故ありし心にくきおぼえにてさぶらひ給ふ。左大臣うせ給ひて、右は左に藤大納言左大將かけ給へる右大臣になり給ふ。次々の人々なりあがりてこの薫中將は中納言に、三位の君は宰相になりてよろこびぁ給へる人々この御ざうより外に人なき比ほひになむありける。中納言の御よろこびにさきのないしのかんの君に參り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面ぁ給ひて「かくいと草深くなりゆく葎の門をよぎ給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなむ」など聞え給ふ。御聲のあてに愛敬づき聞かまほしう今めきたり。ふりがたくもおはするかな、かゝれば院の上は恨み給ふ御心絶えぬぞかし、今遂にことひき出で給ひてむと思ふ。「よろこびなどは心にはいとしも思う給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。よぎぬなどのたまはするはおろかなる罪にうちかへさせ給ふにや」と申し給ふ。「今日はさだすぎにたる身の上など聞ゆべき序にもあらずとつゝみ侍れど、わざと立ちより給はむことはかたきを、對面なくてはたさすがにくだくだしきことになむ。院にさぶらはるゝがいといたう世の中を思ひみだれ中空なるやうにたゞよふを、女御をたのみ聞え又后の宮の御かたにもさりともおぼし許されなむと思ひ給へすぐすに、いつかたにもなめげに許さぬものにおぼされためれば、いとかたはらいたくて宮達はさてさぶらひ給ふ。このいと交らひにくげなるみづからはかくて心やすくだに眺めすぐい給へとてまかでさせたるを、それにつけても聞きにくゝなむ。上にもよろしからずおぼしのたまはすなる序あらばほのめかし奏し給へ。とざまかうざまにたのもしく思ひ給ひていだし立て侍りし程は、いづかたをも心やすくうちとけ頼み聞えしかど、今はかゝる事あやまりにをさなうおほやけなかりけるみづからの心をもどかしくなむ」とうち歎い給ふ氣色なり。「更にかうまで覺すまじき事になむ。かゝる御まじらひの安からぬ事は昔よりさることゝなり侍りにけるを、位を去りて靜におはしまし、何事もけざやかならぬ御有様となりにたるに誰もうちとけ給へるやうなれどおのおのうちうちには いかゞいどましくもおぼす事もなからむ。人は何の咎と見ぬことも我が御身にとりてはうらめしくなむ。あいなき事に心を動し給ふこと女御后の常の御癖なるべし。さばかりのまぎれもあらじものとてやはおぼし立ちけむ。唯なだらかにもてなして御覽じ過ぐすべきことに侍るなり。をのこの方にて奏すべきことにも侍らぬことになむ」といとすくすくしう申し給へば「對面の序にうれへ聞えむと待ちつけ奉りたるかひもなくあはの御こととわりや」とうち笑ひておはする。人の親にてはかばかしがり給へる程よりは、いと若やかにおほどいたる心ちす。御息所もかやうにぞおはすべかめる。宇治の姫君の心とまりて覺ゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかしと思ひ居給へり。ないしのかみもこの頃まかで給へり。こなたかなたすみ給へるけはひをかしく大方のどやかに紛るゝことなき御ありさまどものすのうち心耻しうおぼゆれば心づかひせられていとゞもてまづめめやす

きを、おほうへは近うも見ましかばとうちおぼしけり。大臣殿は唯この殿のびんがしなりけり。だい纓のえがの君達などあまたつどひ給ふ。兵部卿宮左のおほい殿ののりゆみのかへりだち、すまひのあるじなどにはおはしましゝを思ひて、今日のひかりとさうじ奉り給ひけれどおはしまさず心にくゝもてかしづき給ふ。姫君達をさるは心ざしことにいかでかと思ひ聞え給ふべかめれど、宮ぞいかなるにかあらむ御心もとめ給はざりける。源中納言のいとゞあらまほしうねびとゝのひ何事もおくれたる方なくものし給ふをおとゞも北の方も目とゞめ給ひけり。隣のかくのゝしりて行きちがふ車の音さきおふ聲々も昔のこと思ひ出でられてこの殿には物哀にながめ給ふ。「故宮うせ給ひてほどもなくこのおとゞの通ひ給ひし事いとあはつけいやうに、世人はもどくなりしかど、思ひも消えずかくてものしたまふもさすがさる方にめやすかりけり。さだめなの世や。いづれにかよるべき」などのたまふ。左の大殿の宰相中將大纓のまたの日ゆふつけてこゝに參り給へり。御息所里におはすると思ふにいとゞ心げさうそひて「おほやけのかずまへ給ふよろこびなどは何ともおぼえ侍らず。わたくしの思ふとかなはぬなげきのみ年月にそへて思う給へはるけむ方なきと」と涙押しのごふもことさらめいたり。廿七八のほどのいと盛りに匂ひ花やかなるかたちを給へり。「見苦しの君達の世の中を心のまゝにおごりてつかさくらゐをば何ともおもはず過ぐしいますがらふや、故殿おはせましかばこゝなる人々もかゝるすさびごとにぞ心は亂ちまし」とうち歎きたまふ。右兵衛督右大辨にて皆非參議なるをうれはしと思へり。侍從ときこゆめりしぞこのご

ろ頭中將ときこゆる。年よはひのほどはかたはならねど人におくるとなげき給へり。宰相はとかくつきづきしく。

橋姫

その頃世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。母方などもやんごとなくものし給ひてすぢことなるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれに、なかなかいと名殘なく御後見なども物うらめしき心々にて、かたがたにつけて世を背きさりつゝ、おほやけわたくしにより所なくさしはなたれ給へるやうなり。北の方も昔の大臣の御むすめなりける。哀に心ぼそく親たちのおぼしおきてたりしさまなど思ひ出で給ふに、たとしへなきこと多かれど、深き御契のふたつなきばかりをうき世のなぐさめにて、かたみにまたなく頼みかはし給へり。年比經るに御子ものし給はで心もとなかりければ、さうざうしくつれづれなるなぐさめに、いかでをかしからむちごもがなと、宮ぞ時々おぼしのたまひけるに、珍しく女君のいと美しげなる生れ給へり。これをがぎりなく哀と思ひかしづき聞え給ふに、又さしつゞき氣色ばみ給ひてこのたびは男にてもなどおぼしたるに同じさまにてたひらかにはあ給ひながらいといたく煩ひてうせ給ひぬ。宮あさましくおぼし惑ふ。ありふるにつけていとはしたなく堪へがたきと多かる世なれど、見捨てがたく哀なる人の

御有樣心ざまにかけとゞめらるゝほだしにてこそすぐしきつれ、一人とまりていとゞすさまじくもあるべきかな、いはけなき人々をも一人はぐくみたてむほどかぎりある身にていとをこがましう ひとわるかるべき事とおぼしたちて、ほいも遂げまほしうおぼされど見讓る人もなくて殘しとゞめむをいみじくおぼしたゆたひつゝ 年月もふれば、おのおのおよすげまさり給ふ。さまかたちの美しうあらまほしきを明暮の御なぐさめにて おのづからぞ過ぐし給ふ。後に生れ給ひし君をば侍ふ人々も「いでやをりふし心憂く」などうちつぶやきて心に入れてもあつかひ聞えざりけれど、かぎりのさまにて何事もおぼしわかざりし程なからこれをいと心苦しと思ひて、「唯この君をばかたみに見給ひて哀とおぼせ」とばかり唯ひとことなむ宮に聞え置き給ひければ、先の世の契もつらきをりふしなれどさるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいと哀と思ひてうしろめたげにのたまひしをとおぼし出でつゝ、この君をしもいと悲しうおぼし奉り給ふ。かたちなむ誠にいと美くしうゆゝしきまで物し給ひける。姫君は心ばせおもづかによしある方にて見るめもてなしもけだかく心にくきさまぞおぼ給へる。いたはしくやんごとなきすぢは勝りていづれをもさまざまに思ひかしづき聞え給へど、かなはぬこと多く年月にそへて宮の内物さびしくのみなりまさる。侍ひし人もたづきなき心地するに得忍びあへず、つぎつぎにおぼたがひてまかでちりつゝ 若君の御乳母もさるさわぎにはかばかしき人をしもえりあへ給はざりければ、程につけたる心あさゝにて幼きほどを見捨て奉りにければ唯宮ぞはぐゝみ給ふ。さすがに廣くおもしろき宮の、池山などの氣色ばかり昔に變らでいといたうあれまさるをつれづれとながめ給ふ。けいしなどもむねむねしき人もなかりければとりつくろふ人もなきまゝに、草青やかにおげり軒のおのぶぞ所えがほに靑み渡れる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも同じ心にみはやし給ひしにこそ慰むことも多かりけれ、いとゞしくさびしくよりつかむ方なきまゝに、持佛の御飾ばかりをわざとせさせ給ひて明暮行ひ給ふ。かゝるほだしどもにかゝづらふだに思の外に口をしう、我が心ながらもかなはざりけるちぎりと覺ゆるを、まいて何にか世の人めいて今さらにとのみ、年月にそへて世の中をおぼし離れつゝ、心ばかりはひじりになりはて給ひて故君のうせ給ひしこなたは例の人のさまなる心ばへなど戯ぶれにてもおぼし出で給はざりけり。「などかさしも別るゝ程のかなしびは又世にたぐひなきやうにのみこそは覺ゆべかめれど、ありふればさのみやは。猶世の人になずらふ御心づかひをおぼし給ひて、見苦しくたづきなき宮の内もおのづからもてなさるゝわざもや」と、人はもどき聞えて何くれとつきづきしく聞えごつことも類に觸れておぼかれど聞し召し入れざりけり。御ねんずのひまひまには この君達をもてあそび、やうやうおよすげ給へば琴ならはし、碁うちへんつぎなどはかなき遊びわざにつけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君はらうらうしく深くおもりかに見え給ふ。若君はおほどかにらうたげなるさまして物づゝみおたるけはひいとうつくしうさまざまに坐す。春のうらゝかなる日影に池の水鳥どもの羽根うちかはしつゝ おのがおゝさへづる聲などを常ははかなき事と見給ひしかどもつがひ離れぬを羨しくながめ給ひて君達に

御琴ども教へ聞え給ふ。いとをかしげに小き御程にとりどりかき鳴らし給ふ。物の音ども哀にをかしく聞ゆれば涙をうけ給ひて、

「うちすてゝつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたち後れけむ。心づくしなりや」と目おしのごひ給ふ。かたちいと清げにおはします宮なり。年比の御行ひに痩せほそり給ひにたれどさてしもあてになまめきて、君達を冊き給ふ御心ばへに直衣のなえばめるを着給ひて恥どけなき御さまいと恥しげなり。姫君御硯をやをらひきよせて手習のやうに書きまぜ給ふを「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて紙奉り給へばはぢらひて書き給ふ。

「いかでかくすだちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ思る」。よからねどそのをりは哀なりけり。手はおひさき見えてまだよくもつゞけ給はぬ程なり。「若君も書き給へ」とあれば今少しをさなげに久しく書き出で給へり。

「なくなくもはねうちきする君なくばわれぞすもりになるべかりける」。御ぞどもなどなえばみて御前に又人もなく いと寂しくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにて物し給ふを哀に心苦しういかゞ おぼさゞらむ。經を片手にも給ひてかつ讀みつゝさうがをし給ふ。姫君に琵琶若君に箏の御琴を、まだをさなけれど常に合せつゝ習ひ給へば聞きにくゝもあらでいとをかしく聞ゆ。父帝にも母女御にも疾くおくれ給ひてはかばかしき御後見のとりたてたる坐せざりければ、さえなど深くも得習ひ給はず。まいて世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知り給はむ。たかき人と聞ゆる中にもあさましうあてにおほどかなる女

のやうにおはすれば、ふるき世の御賓物おほぢおとゞの御そうぶん何やかやとつきすまじかりけれど行くへもなくはかなくうせはてゝ御調度などばかりなむわざとうるはしくて多かりける。参り侍ひ聞え心よせ奉る人もなし。つれづれなるまゝにうたづかさの物の師どもなどやうの勝れたるを召しよせつゝはかなき御遊に心を入れおひ出で給へればその方はいとをかしく勝れ給へり。源氏のおとゞの御弟八宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮におはしましゝ時朱雀院の大后のよこざまにおぼし搆へてこの宮を世の中にたちつぎ給ふべく我が御時もてかしづき奉り給ひけるさわぎに、あいなくあなたざまの御なからひには、さしはなたれ給ひにければいよいよかの御つぎつぎになりはてぬる世にてえまじらひ給はず。又この年比かゝるひじりになりはてゝ、今はかぎりとよろづをおぼし捨てたり。かゝる程に住み給ふ宮焼けにけり。いとゞしき世にあさましうあへなくてうつろひ住み給ふべき所のよろしきもなかりければ宇治といふ所によしある山里も給へりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども今はと住み離れなむを哀におぼさる。あじろのけはひ近く耳かしがましき川のわたりにて静なる思ひにかなはぬ方もあれどいかゞはせむ。花紅葉水の流れにも心をやるたよりによせていとゞしくながめ給ふより外のことなし。かく絶え籠りぬる野山の末にも昔の人ものし給はましかばと思ひ出で聞え給はぬをりなかりけり。

「見し人も宿もけぶりになりにしをなどて我が身のきえのこりけむ」。生けるかひなくぞ覺しこがるゝや。いとゞ山重なれる御すみかに尋ね参る人もなし。あやしきげすなど田舎び

たるやまがつどものみまれになれ参り仕うまつる。峯の朝霧晴るゝ折なくて明し暮し給ふに、この宇治山にひじりだちたる阿ざ梨住みけり。ざえいとかしこくて世の覺えもかるがるねどをさをさおほやけごとにも出で仕へず籠り居たるに、この宮のかく近き程に住み給ひて寂しき御さまにたふときわざをせさせ給ひつゝ法文などを讀み習ひ給へばたふとび聞えて常にまゐる。年比學び知り給へる事どもの深き心を解き聞かせ奉り、いよいよこの世のかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば「心ばかりにはちすの上に思ひのぼり濁なき池にも住みぬべきをいとかく幼き人々を見捨てむうしろめたさばかりになむえひたみちにかたちをもかへぬ」などへだてなく物語し給ふ。この阿ざ梨は冷泉院にも親しく侍ひて御經など教へ聞ゆる人なりけり。京に出でたるついでに參りて、例のさるべき文など御覽じて問はせ給ふともあるついでに「八宮のいとかしこく内教の御ざえさとり深く物し給ひけるかな。さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひすまし給へるほど誠のひじりのおきてになむ見え給ふ」と聞ゆ。「いまだかたちはかへ給はずや。ぞくひじりとかこの若き人々のつげたなる哀なる。となり」などの給はす。宰相の中將も御前に侍ひ給ひて、我こそ世の中をいとすさまじく思ひ知りながら行ひなど人に目留めらるゝばかりはつとめず、口惜しく過しけれなど人知れず思ひつゝ、俗ながらひじりになり給ふ心のおきてやいかにと、耳留めて聞き給ふ。「出家の志はもとより物し給へるをはかなきことに思ひとゞこほり今となりては心ぐるしき女子どもの御うへをえ思ひ捨てぬとなむ歎き侍り給ふ」と奏す。さすがにも

のゝ音めづる阿ざ梨にて「げにはたこの姫君達のこと彈きあはせて遊び給へる、河波にきほひて聞え侍るはいとおもしろく極樂思ひやられ侍るや」とこだいにめづれば、帝ほゝゑみ給ひて「さるひじりのあたりにおひ出でゝこの世のかたざまはたどたどしからむとおしはからるゝを、をかしのことや、うしろめたく思ひ捨てがたくもて煩ひ給へらむを、もしまばしもおくれむほどは讓りやはし給はぬ」などぞのたまはする。この院のみかどは十の御子にぞおはしける。朱雀院の故六條院にあづけ聞え給ひし入道の宮の御ためしをおぼし出でゝ、かの君達をがな、つれづれなるあそびがたきになどうちおぼしけり。中將の君はなかなかみこの思ひすまし給へらむ御心ばへを對面して見奉らばやと思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿ざ梨のかへりいるにも「必ず參りて物習ひ聞ゆべくまづうちうちにも氣色給はり給へ」など語らひ給ふ。みかどは御ことづてにて「哀なる御住まひを人つてに聞くこと」など聞え給うて、

「世をいとふ心は山にかよへどもやへたつ雲をきみやへだつる」。阿ざ梨この御使をさきにたてゝかの宮にまゐりぬ。なのめなるきはのさるべき人の使だにまれなる山陰にいと珍しく待ち喜び給ひて、所につけたるさかなゝどしてさるかたにもてはやし給ふ。御かへし、

「あとたえて心すむとはなけれども世をうぢ山にやどをこそかれ」。ひじりのかたをば卑下して聞えなし給へれば猶世に怨殘りけるといとほしく御覽ず。阿ざ梨」中將の君の道心深げに物し給ふ」など語り聞えて「法文などの心得まほしき志なむいはけなかりしよはひより深く思ひながら得去らず世にありふるほどおほやけわたくしにいとまなく明けくらし、わ

ざととぢ籠りて習ひ讀み大方はかばかしくもあらぬ身にしも世の中をそむき顔ならむも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ紛はしくてなむ過ぐしくるを、いとありがたき御有樣をうけ給はり傳へしより、かく心にかけてなむ頼み聞えさするなどねんごろに申し給ひし」など語り聞ゆ。宮「世の中をかりそめのこと、思ひとり、いとはしき心のつきそむることも我が身にうれひある時、なべての世もうらめしう思ひ知るはじめありてなむ道心も起るわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ何事も飽かぬことはあらじと覺ゆる身のほどに、さはた後世をさへたどり知りたまふらむがありがたさ。こゝにはさべきにや。唯いとひ離れよと殊更に佛などのすゝめおもむけ給ふやうなる有樣にて、おのづからこそまづかなる思ひにかなひゆけど、のこり少き心地するにはかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、きしかた行く末更に得たどる所なく思ひ知らるゝを、かへりては心耻しげなるのりの友にこそはものし給ふなれ」などのたまひてかたみに御せうそこかよひ自らもまうで給ふ。げに聞きしよりも哀に住まひ給へるさまより始めていとかりなる草のいほりに思ひなしことそぎたり。同じき山里といへどさるかたにて心とまりぬべくのどやかなるもあるを、いとあらましき水の音波の響に物忘れうちし、よるなど心解けて夢をだに見るべき程もなげにすごく吹き拂ひたり。ひじりだちたる御ためにはかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君達何心地して過ぐし給ふらむ、世のつねの女しくなよびたる方はとほくやと推しはからるゝ御有樣なり。佛の御方にはさうぞくばかりを隔てゝぞおはすべかめる。すき心あらむ人は氣色ばみよりて人の御心ばへをも見まほしうさすがにいかゞとゆかしうもある御けはひなり。されどさるかたを思ひ離るゝ願ひに山深く尋ね聞えたるほいなくすきずきしきなほざりごとを打ち出であざればまむもことにたがひてやなど思ひ返して、宮の御有樣のいと哀なるをねんごろにとぶらひ聞え給ひ、たびたび參り給ひつゝ思ひしやうにうばそくながら行ふ山の深き心、法文などわざとさかしげにはあらでいとよくのたまひ示らす。ひじりだつ人ざえある法師などは世におほかれどあまりこはこはしうけ遠げなるまうとくの僧都僧正のきはゝ世にいとまなくきすくにて物の心をとひあらはさむもことごとしく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の忌むことを保つばかりのたふとさはあれどけはひいやしくことばだみてこちなげにものなれたるいともものしくて、畫はおほやけごとに暇なくなどしつゝまめやかなるよひの程け近き御枕上などに召し入れ語らひ給ふにも、いとさすがに物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして のたまひ出づる言の葉も同じ佛の御教をも耳近きたとひにひきまぜ、いとこよなく深き御さとりにはあらねどよき人は物の心をえたまふ方のいとことに物し給うければ、やうやう見馴れ奉り給ふたびごとに常に見奉らまほしうて、いとまなくなどして ほどふる時は戀しうおぼえ給ふ。この君のかくたふとがり聞え給へれば冷泉院よりも常に御せうそこなどありて、年比おとにもをさをさ聞え給はず、いみじく寂しげなりし御すみかにやうやう人め見る時々あり。をりふしにとぶらひ聞え給ふことといかめしうこの君もまづさるべきことにつけつゝをかしきやうにもまめやかなる

さまにも心よせ仕う奉り給ふこと三年ばかりになりぬ。秋の末つ方四季にあてつゝまゐ給ふ御念佛を、この河づらはあじろの浪もこのごろはいとゞ耳かしかましく靜ならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひ給ひて七日のほど行ひ給ふ。姫君達はいと心ぼそくつれづれまさりてながめ給ひけるころ、中將の君久しく參らぬかなと思ひ出で聞え給うけるまゝに、有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出でたちて、いと忍びて御供に人などもなくやつれておはしけり。河のこなたなれば船などもわづらはで御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに霧ふたがりて道も見えぬ繁木の中をわけ給ふに、いとあらましき風のきほひにほろほろと落ち亂るゝ木の葉の露の散りかゝるもいとひやゝかに人やりならずいたくぬれ給ひぬ。かゝるありさまなどもをさをさならひ給はぬ心地に心ぼそくをかしくおぼされけり。

「山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな」。やまがつの驚くもうるさしとてずゐじんの音もせさせ給はず、柴の籬をわけつゝそこはかとなき水の流れどもをふみしだく駒の足音も猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御にほひぞ風にまたがひて、ぬし知らぬかとおどろくねざめの家々ぞありける。近くなるほどにその事とも聞き別れぬ物の音どもいとすごげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くをついでなくて御子の御さんの音の名高きも得聞かぬぞかし、よき折なるべしと思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲のひゞきなりけり。わうしきでうにまらべて世の常のかきあはせなれど所がらにや耳馴れぬ心地して、掻き返すばちの音も物淸げにおもしろし。箏の琴哀になまめいたる聲してたえだえ聞ゆ。まゐ

ばし聞かまほしきに忍びたまへど、御けはひまゐるく聞きつけて、とのゐびとめくをのこなまかたくなしき出で來たり。「まかゞかなむ籠り坐します御せうそこをこそ聞えさせめ」と申す。「何かは、まか限りある御行ひの程を紛はし聞えさせむにあいなし。かくぬれぬれ參りていたづらに歸らむうれへを姫君の御方に聞えて哀とのたまはせばなむ慰むべき」とのたまへば、見にくき顏うちゑみて「申させ侍らむ」とてたつを「まばしや」と召しよせて「年比人づてにのみ聞きてゆかしく思ふ御ことの音どもを嬉しきをりかな。暫し少したち隱れて聞くべきものゝくまありや。つきなくさし過ぎて參りよらむほど皆ことやめ給ひては、いとほいなからむ」とのたまふ。御けはひ顏かたちのさるなほなほしき心地にもいとめでたくかたじけなく覺ゆれば「人きかぬ時は明暮かくなむあそばせど、まも人にても都のかたより參りたちまじる人侍る時は音もせさせ給はず。大かたかくて女君達おはしますことをばかくさせたまひ、なべての人に知らせ奉らじとおぼしのたまはする」と申せば、うち笑ひて「味氣なき御ものかくしなり。まか忍び給ふなれど皆人ありがたき世のためしに聞き出づべかめるを」とのたまひて「猶まゐるべせよ。われはすきずきしき心などなき人ぞ。かくておはしますらむ御有樣のあやしくげになべてに覺え給はぬなり」とこまやかにの給へば「あなかしこ、心なきやうに後の聞えや侍らむ」とてあなたのお前ははたけのすいがいまこめて皆へだてことなるを、敎へよせ奉れり。御供の人は西の廊によびすゑてこのとのゐあへしらふ。あなたに通ふべかめる透垣の戸を少し押し明けて見給へば、月をかしき程にきり渡れるをながめて、す

だれを少し短く巻き上げて人々居たり。簀子にいと寒げに身ほそくなえばめる童一人同じさまなるおとなども居たり。内なる人ひとりは柱に少し居かくれて琵琶を前に置きてばちを手まさぐりにおつゝ居たるに、雲がくれたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば「扇ならでこれしても月はまねきつべかりけり」とてさしのぞきたる顔いみじくらうたげにほひやかなるべし。そひふしたる人は琴の上にかたぶきかゝりて「入る日をかへすばちこそありけれ。さまことにも思ひ及び給ふ御心かな」とてうち笑ひたるけはひ今少しおもりかにようしづきたり。「及ばずともこれも月に離るゝものかは」など、はかなきことをうち解けのたまひかはしたる御けはひども、更によそに思ひやりしにはにず、いと哀になつかしうをかし。昔物語などに語り傳へて若き女房などの讀むをも聞くに、必ずかやうのことをいひたるさしもあらざりけむとにくゝおしはからるゝを、げに哀なるものゝくまあるべき世なりけりと心うつりぬべし。霧の深ければさやかに見ゆべくもあらず。又月さし出でなむと覺すほどに奥の方より「人坐す」と告げ聞ゆる人やあらむ、簾垂おろして皆入りぬ。驚き顔にはあらずなごやかにもてなしてやをらかくれぬるけはひどもきぬの音もせず、いとなよゝかに心苦しうていみじうあてにみやびかなるを哀と思ひ給ふ。やをらたち出でゝ京に御車ゐて参るべく人走らせ給ひつ。ありつるさぶらひに折あしく参り侍りにけれどなかなかうれしく思ふこと少し慰めてなむ。「かくさぶらふよし聞えよ。いたうぬれにたるかごとも聞えさせむかし」とのたまへば参りてきこゆ。かく見えやおぬらむとはおぼしもよらでうちとけたりつる

事どもを聞きやし給へらむといいみじくはづかし。怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを思ひかけぬほどなれば驚かざりける心おぞさよと心も惑ひてはぢおはさうず。御せうそこなどつたふる人もいとうひうひしき人なめるを、をりからにこそ萬のことももと思ひてまだ霧のまぎれなればありつる御簾の前にあゆみ出でゝ、つい居給ふ。山里びたる若人どもはさしいらへむ言の葉も覺えで、御おとねさし出づるさまもたどたどしげなり。「この御簾の前にははしたなく侍りけり。うちつけに淺き心ばかりにてはかくも尋ね参るまじき山のかげぢに思ひ給ふるを、さまことにこそ。かく露けきたびをかさねてはさりとも御覽じ知るらむとなむたのもしう侍る」といとまめやかにのたまふ。若き人々のなだらかに物聞ゆべきもなく消え返りかゞやかしげなるもかたはらいたければ、女ばらの奥深きをおこし出づる程久しくなりてわざとめいたるも苦しうて「何事も思ひ知らぬありさまにて、知りがほにもいかゞは聞ゆべき」といとよしありてあてなる聲してひき入りながらほのかにのたまふ。「かつ知りながらうきを知らず顔なるも世のさがと思ひ給へ知るを、ひとところしもあまりおぼめかせ給へらむこそ口惜しかるべけれ。ありがたう萬を思ひすましたる御住まひなどにたぐひ聞えさせ給ふ御心のうちは何事も涼しくおしはかられ侍れば、猶かく忍びあまり侍る深さ淺さのほどもわかせ給はむこそかひは侍らめ。世の常のすきずきしきすぢにはおぼし召し放つべくや。さやうのかたはわざとすゝむる人侍るとも靡くべうもあらぬ心強さになむ、おのづから聞し召しあはするやうも侍りなむ。つれづれとのみ過ぐし侍る世の物語も聞

えさせ所に頼み聞えさせ、又かく世離れてながめさせ給ふらむ御心のまぎらはしにもさしも驚かさせ給ふばかり聞えなれ侍らばいかに思ふさまに侍らむ」など多くのたまへば、つゝましくいらへにくゝておこしつるおい人の出できたるにぞ譲り給ふ。たとしへなくさし過して「あなかたじけなや。かたはらいたきおましのさまにも侍るかな。御簾の内にぞ若き人々はものゝほど知らぬやうにこそ」などあたゝかにいふ聲のさだすぎたるもかたはらいたく君達はおぼす。「いとも怪しく世の中に住まひ給ふ人の數にもあらぬ御有様にてさもありぬべき人々だに、とぶらひかずまへ聞え給ふも見え聞えずのみなりまさり侍るめるに、ありがたき御志のほどは數にも侍らぬ心にもあさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、若き御心地にもおぼし知りながら聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」といとつゝみなく物馴れたるもなまにくきものからけはひいたう人めきてよしある聲なれば「いとたづきも知らぬ心地しつるにうれしき御けはひにこそ。何事もげに思ひ知り給ひけるたのみこよなかりけり」とて寄り居給へるを几帳のそばより見れば、曙のやうやうものゝ色わかるゝにげにやつし給へると見ゆる狩衣姿のいとぬれまめりたるほどうたてこの世の外のにほひにやと怪しきまでかをりみちたり。このおい人はうち泣きぬ。「さしすぎたる罪もやと思ひ給へ忍ぶれど、哀なる昔の御物語のいかならむ序にうち出て聞えさせかたはしをもほのめかしまろしめさせむと、年比ねんずのついでにもうちまぜ思ひ給へわたるまろしにや嬉しきをりに侍るを、まだきにおぼゝれたる涙にくれてえこそ聞えさせ侍らね」とうちわなゝく氣色誠にいみじく物

悲しと思へり。大かたさだすぎたる人は涙もろなるものとは見聞き給へどいとかうしも思へるも怪しうなり給ひて「こゝにかく參ることはたびかさなりぬるを、かく哀知り給へる人もなくてこそ露けき道のほどに一人のみそぼちつれ。うれしきついでなめるをことなのこい給ひそかし」とのたまへば、「かゝる序しも侍らじかし。また侍るとも夜のまのほど知らぬ命の頼むべきにも侍らぬを、さらば唯かゝるふるもの世に侍りけりとばかりまろしめされ侍らなむ。三條の宮に侍ひし小侍從ははかなくなり侍りにけるとほのかに聞き侍りし。そのかみ睦じう思ひ給へしおなじほどの人多くうせ侍りにける世の末に、遥なる世界より傳はりまうできてこの五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る。えまろしめさじかし。この頃藤大納言と申すなる御このかみの、衛門督にてかくれ侍りにしは、ものゝついでなどにやかの御上とて聞し召し傳ふることも侍らむ。すぎ給ひていくばくも隔たらぬ心地のみし侍る。そのをりの悲しさもまだ袖のかわくをり侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍れば、かくおとなしくならせ給ひにける御よはひの程も夢のやうになむ。かの故權大納言の御乳母に侍りしは辨が母になむ侍りし。朝夕に仕うまつり馴れ侍りしかば人數にも侍らぬ身なれど人に知られず御心よりはたあまりけることををりをりうちかすめのたまひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方召しよせていさゝかのたまひおくことなむ侍りしを聞し召すべき故なむひとこと侍れどかばかり聞え出で侍るにのこりをとおぼし召す御心侍らばのどかになむ聞し召しはて侍るべき。若き人々もかたはらいたくさしすぎたりとつきじろ

ひ侍るめるもことわりになむ」とてさすがに打ち出でずなりぬ。あやしく夢がたりかんなぎやうのものゝ間はずがたりするやうに珍らかにおぼさるれど哀に覺束なくおぼし渡ることのすぢを聞ゆればいとおくゆかしけれど、げに人めもあげし、さしぐみにふる物語にかゝづらひて夜を明しはてむもこちごちしかるべければ「そこはかと思ひわくことはなきものからいにしへのことゝ聞き侍るも物哀になむ。さらば必ずこののこり聞かせ給へ。霧晴れゆかばはしたなかるべきやつれをおもなく御覽じ咎められぬべきさまなれば思ひ給ふる心の程よりは口惜しうなむ」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲かすかに聞えて霧いと深くたちわたれる峯の八重雲思ひやるへたて多く哀なるに、猶この姫君達の御心のうちども心苦しう何事をおぼし殘すらむ、かくいとおくまり給へるもことわりぞかしなどおぼす。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし槇のを山は霧こめてけり。心ぼそくも侍るかな」とたちかへりやすらひ給へるさまを都の人のめなれたるだに猶いとことに思ひ聞え侍るをまいていかゞは珍しう見ざらむ。御かへり聞え傳へにくげに思ひたれば例のいとつゝましげにて、

「雲のゐる峯のかけぢを秋霧のいとゞへだつるころにもあるかな」。少しうち歎き給へる氣色淺からず哀なり。何ばかりをかしきふしは見えぬあたりなれど實に心苦しきこと多かるにもあからなり行けばさすがにひたおもてなる心地して「なかなかなるほどに承りさしつること多かるのこりは今少しおもなれてこそは怨み聞えさすべかめれ。さるはかく世の

人めいてもてなし給へば思はずに物おぼしわかざりけりと、うらめしうなむ」とてとのゐびとがきつらひたる西面におはしてながめ給ふ。「あじろは人さわがしげなり。されどひをもよらぬにやあらむすさまじげなる氣色なり」と御供の人々見知りていふ。あやしき船どもに柴刈り積みおのおの何となき世のいとなみどもに行きかふさまどものはかなき水の上に浮びたる、誰も思へば同じことなる世のつねなさなり。我はうかばず玉の臺にきづけき身と思ふべき世かはと思ひつゞけらる。硯召してあなたに聞え給ふ。

「はし姫の心をくみてたかせさす棹のきづくにそでぞぬれぬる。ながめ給ふらむかし」とてとのゐびとにもたせ給へり。寒げにいらゝぎたる顏してもて參る。御かへし紙のかなどおぼろげならむは恥しげなるを、疾きをこそはかゝるをりはとて、

「さしかへる宇治の川をさ朝夕のきづくや袖をくたしはつらむ。身さへうきて」といとをかしげに書き給へり。まほにめやすく物し給ひけりと心とまりぬれど御車ゐて參りぬと人々さわがし聞ゆればとのゐびとばかりを召しよせて「かへり渡らせ給はむほどに必ず參るべし」などのたまふ。ぬれたる御ぞどもは皆この人にぬぎかけ給ひてとりにつかはしつる御直衣に奉りかへつ。おい人の物語心にかゝりておぼし出でらる。思ひしよりはこよなくまさりておほどかにをかしかりつる御けはひども面かげに添ひて、猶思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。けさうだちてもあらず、白き色紙のあつごえたるに筆はひきつくろひえりて墨つき見所ありて書き給ふ。「うちつけなるさまにやとあいなく留

め侍りて、のこり多かるも苦しきわざになむ。かたはし聞え置きつるやうに今よりは御簾の前も心やすくおぼし許すべくなむ。御山ごもりはて侍らむ日数もうけ給はりおきて いぶせかりし霧のまよひもはるけ侍らむ」などぞいとすくよかに書き給へる。左近のぞうなる人御使にて「かのおい人尋ねて文もとらせよ」とのたまふ。とのゐ人がさむげにてさまよひしなど哀におぼしやりて大きなるひわりごやうのもの数多せさせ給ふ。又の日かの御寺にも奉り給ふ。山ごもりの僧どもこのごろの嵐にはいと心ぼそく苦しからむを、さておはしますほどの布施給ふべからむとおぼしやりて 絹綿など多かりけり。御行はてゝ出で給ふあしたなりければ行ひ人どもに綿絹袈裟衣などすべてひとくだりの程づゝあるかぎりの大とこたちにたまふ。とのゐ人かの御ぬぎすてのえんにいみじきかりの御ぞども えならぬ白き綾の御ぞのなよなよといひ知らず匂へるをうつしきて、身をはたえかへぬものなれば似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められめでらるゝなむなかなかところせかりける。心にまかせて身を安くもふるまはれず、いとむくつけきまで人の驚くにほひを失ひてばやと思へど、所せき人の御うつりがにてえもすゝぎすてぬぞあまりなるや。君は姫君の御返事 いとめやすくこめかしきををかしく見給ふ。宮にも「かく御せうそこありき」など人々聞えさせ御覧ぜさすれば「何かは。けさうだちてもてない給はむもなかなかうたてあらむ。例の若き人に似ぬ御心ばへなめるを、なからむ後もなどひとことうちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまひけり。御みづからもさまざまの御とぶらひの山の岩屋に餘りして

となどのたまへるに、まうでむとおぼして、三の宮のかやうにおくまりたらむあたりのみまさりせむこそをかしかるべけれとあらましごとにだにのたまふものを。聞えはげまして御心さわがし奉らむとおぼして、のどやかなる夕暮に参り給へり。例のさまざまなる御物語聞えかはし給ふついでに宇治の宮のこと語り出でゝ、見し曉のありさまなどくはしく聞え給ふに、宮いとせちにをかしとおぼいたり。さればよと御氣色を見ていとゞ御心動きぬべくいひつゞけ給ふ。「さてそのありけむ返事はなどか見せ給はざりし。まろならましかば」と怨み給ふ。「さかし。いとさまざま御覧ずべかめる端をだに見せ給はぬ。かのわたりはかくいともうもれたる身にひきこめてやむべきけはひにも侍らねば必ず御覧ぜさせばやと思ひ給ふれど、いかでか尋ねよらせ給ふべき。かやすきほどこそすかまほしくは いとよくすきぬべき世に侍りけれ。うちかくろへつゝ多かめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の物思はしきうち忍びたるすみかも山里めいたるくまなどに おのづから侍るべかめり。この聞えさするわたりはいとよづかぬひじりざまにてこちごちしうぞあらむと年比は思ひあなづり侍りて耳をだにこそ留め侍らざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずばまほならむはや。けはひ有様はたさばかりならむをぞあらまほしきほどと覺え侍るべき」など聞え給ふ。はてはてはまめだちていとねたく、おぼろげの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしうおぼすことかぎりなくなり給ひぬ。「猶又々よく氣色見給へ」と人をすゝめ給ひて限りある御身のほどのよだけさをいとはしきまで心もとなしとおぼしたれば、をかしくて「い

てやよしなくぞ侍る。まばし世の中に心とゞめじと思ひ給へるやうある身にてなほざりごともつゝましう侍るを、心ながらかなはぬ心つきそめなば おほきに思ひにたがふべきことなむ侍るべき」と聞え給へば「いてあなことごとし。例のおどろおどろしきひじりことば見はてゝしがな」とて笑ひ給ふ。心のうちにはかのふる人のほのめかしゝすぢなどのいとゞうち驚かされて物哀なるにをかしと見ることもめやすしと聞くあたりも何ばかり心にもとまらざりけり。十月になりて五六日のほどに宇治へまうで給ふ。「あじろをこそこの頃は御覽ぜめ」と聞ゆる人々あれど「何かはそのひをむしにあらそふ心にてあじろにもよらむ」とそぎ捨て給ひて、かろらかに網代車にてかとりの直衣指貫ぬはせて殊さらび着給へり。宮待ち喜び給ひて所につけたる御あるじなどをかしうまなし給ふ。暮れぬれば大となぶら近くて、ささざき見さし給へる文どもの深きなど、阿闍梨もさうじおろして義などいはせ給ふ。うちもまどろまず。河風のいとあらましきに木の葉の散りかふおと水のひゞきなど哀もすぎて物恐しく心ぼそき所のさまなり。明けがた近くなりぬらむと思ふ程に、ありしまの〳〵め思ひ出でられて、琴の音の哀なることのついでつくり出て〳〵「さきのたび霧にまどはされ侍りし曙にいと珍しきもの〳〵音 ひと聲うけたまはりしのこりなむ、なかなかにいとぶかしう飽かず思ひ給へらる〳〵」など聞え給ふ。「色をも香をも思ひ捨て〳〵し後昔聞きしことも皆忘れてなむ」とのたまへど、人召してきんとりよせて「いとつきなくなりにたりや。まるべする物の音につけてなむ思ひ出でらるべかりける」とて琵琶めしてまらうどにそゝのかし給ふ。と

りてまらべ給ふ。「更にほのかに聞き侍りし同じものとも思ひ給へられざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ひ給へしか」とて心とけてもかきたて給はず。「いてあなさがなや。まか御耳とまるばかりのてなどはいづくよりか此處までは傳はりこむ。あるまじき御事なり」とてきんかきならし給へるいと哀に心凄し。かたへは峯の松風のもてはやすなるべし。いとたどしげにおぼめき給ひて心ばへある手ひとつばかりにてやめ給ひつ。「このわたりに覺えなくて折々ほのめく箏の琴の手こそ心得たるにやと聞く折侍れど心留めてなどもあらで久しうなりにけりや。心にまかせて各かきならすべかめるは河波ばかりやうち合すらむ。ろなうものゝようにすばかりの はうしなどもとまらじとなむ覺え侍る」とて「かきならし給へ」と彼方に聞え給へど「思ひよらざりしひとりごとを聞き給ひけむだにある物をいと片はならむ」とひきいりつゝ皆聞き給はず。度々そゝのかし聞え給へどとかく聞えすまひてやみ給ひぬればいと口惜しう覺ゆ。そのついてにもかく怪しう世づかぬ思ひやりにてすぐす有樣どもの思の外なることなど恥しうおぼいたり。「人にだにいかで知らせじとはぐゝみすぐせど今日明日とも知らぬ身ののこりすくなさにさすがに行く末遠き人はおちあふれてさすらへむこと、これのみこそげに世を離れむきはのほだしなりけれ」と打ち語らひ給へば心苦しう見奉り給ふ。「わざとの御後見だちはかばかしきすぢに侍らずともうとうとしからずおぼし召されむとなむ思ひ給ふる。まばしもながらへ侍らむ命のほどは ひとことともかく打ち出で聞えさせてむさまをたがへ侍るまじくなむ」など申し給へば「いと嬉しきこと」とおぼし

の給ふ。さて曉方宮の御行し給ふほどにかのおい人召し出でゝあひ給へり。姫君の御後見にて侍はせ給ふ。辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれどみやびかに故あるけはひしてものなど聞ゆ。故權大納言の君の世とともに物を思ひつゝ病づきはかなくなり給ひにし有樣を聞え出でゝ泣くことかぎりなし。げによその人の上と聞かむだに哀なるべきふる事どもをまして年比覺束なくゆかしういかなりけむ事のはじめにかと佛にもこのことをさだかに知らせ給へと念じつるまゝるしにや、かく夢のやうに哀なる昔がたりを覺えぬついでに聞きつけつらむとおぼすに涙とどめがたかりけり。「さてもかくその世の心知りたる人も殘り給へりけるを珍らかにも恥しうも覺ゆることのすぢに猶かくいひ傳ふるたぐひやまたもあらむ。年ごろかけても聞き及ばざりけるを」との給へば「小侍從と辨とはなちて又知る人侍らじ。ひとことにても又こと人にまねび侍らず。かくものはかなく數ならぬ身のほどに侍れど、よるひるかの御かげにつき奉りて侍りしかば、おのづから物の氣色をも見奉りそめしに御心よりあまりておぼしける時々唯二人の中になむ、たまさかの御せうそこの通ひも侍りし。かたはらいたければ委しく聞えさせず。今はのとぢめになり給ひていさゝかのたまひおく事の侍りしを、かゝる身には置き所なくいぶせく思う給へ渡りつゝ、いかにしてかは聞し召し傳ふべきと、はかばかしからぬねんずのついでにも思ひ給へつるを、佛は世におはしましけりとなむ思う給へ知りぬる。御覽ぜさすべきものも侍り。今は何かは燒きも捨て侍りなむ。かく朝夕のきえを知らぬ身のうち捨て侍りなば落ち散るやうもこそといとう

しろめたく思ひ給ふれど、この宮わたりにも時々ほのめかせ給ふを待ち出で奉りしかば少したのもしく、かゝるをりもやと念じ侍りつる力出でまうできてなむ。更にこれはこの世の事にも侍らじ」となくなく細かに、生れ給ひける程のともよく覺えつゝ聞ゆ。「空しうなり給ひしさわぎに母に侍りし人はやがて病づきて ほども經ず隱れ侍りにしかば、いとゞ思ひ給へ沈み藤衣もたちかさね悲しきことを思ひ給へしほどに、年比よからぬ人の心をつけたりけるが人をはかりごちて西の海のはてまでとりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えてその人もかしこにてうせ侍りにし後十年あまりにてなむあらぬ世の心地してまかりのぼりたりしを、この宮は父方につけて童より參り通ふ故侍りしかば今はかう世にまじらふべきさまにも侍らぬを、冷泉院の女御どのゝ御かたなどこそは昔聞きなれ奉りしわたりにて參りよるべく侍りしかどはしたなく覺え侍りてえさし出で侍らでみやまがくれのくちきになりにて侍るなり。小侍從はいつかうせ侍りにけむ。そのかみの若盛りと見侍りし人は數少くなり侍りにける。末の世に多くの人に後るゝ命を悲しく思ひ給へてこそさすがにめぐらひ侍れ」など聞ゆるほどに例の明けはてぬ。「よしさらばこの昔物語はつきすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心安き所にて聞えむ。侍從といひし人はほのかに覺ゆるは五つ六つばかりなりし程にや。俄に胸を病みてうせにきとなむ聞く。かゝる對面なくば罪重き身にて過ぎぬべかりける」ことなどのたまふ。さゝやかにおしまきあはせたるほぐどものかびくさきを袋にぬひ入れたる取り出でゝ奉る。「御前にてうしなはせ給へ、我猶生くべくもあらずなりにたり

とのたまはせてこの御文をとり集めて給はせたりしかば小侍従に又あひ見侍らむついでにさだかに傳へ参らせむと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも私事には他かず悲しうなむ思ひ給ふる」と聞ゆ。つれなくてこれはかくいい給ひつ。かやうのふる人はとはずがたりにや怪しきことのためしにいひ出づらむと苦しくおぼせど、かへすがへすもちらさぬよしをちかひつる、さもやと又思ひ亂れ給ふ。御粥こはいひなど参り給ふ。「昨日はいとまの日なりしを今日はうちの御物忌もあきぬらむ。院の女一宮惱み給ふ御とぶらひに必ず参るべければかたがたいとまなく侍るを又この比過ぐして山の紅葉散らぬさきに参るべき」よし聞え給ふ。「かくまばまばたちよらせ給ふひかりに、山の蔭も少し物あきらむる心地してなむ」など、よろこび聞えたまふ。歸り給ひてまづこの袋を見給へば唐の浮線綾を縫ひて上といふ文字をうへに書きたり。細き組して口の方をゆひたるに、かの御名の封つきたり。あくるも恐しうおぼえ給ふ。いろいろの紙にてたまさかに通ひける御文の返事五つ六つぞある。さてはかの御手にて「病は重くかぎりになりにたるに又ほのかにも聞えむことかたくなりぬるをゆかしう思ふことはそひにたり。御かたちも變りておはしますらむがさまざま悲しき」ことをみちのくにがみ五六枚につぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

「めの前にこの世をそむく君よりもよそにわかるゝたまぞ悲しき」。またはしに「めづらしく聞き侍る二葉のほどもうしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人まれずいはねにとめし松のおひすゑ」。かきさしたるやうにいと亂りがはしくて「侍従の君に」と上には書きつけたり。まみといふ蟲のすみかになりてふるめきたるかびくさゝながらあとは消えず。唯今書きたらむにもたがはぬ言の葉どものこまごまとさだかなるを見給ふにげに落ち散りたらましかばとうしろめたういとほしきことどもなり。かゝること世にまたあらむやと心ひとつにいとゞ物思はしさそひて、内へ参らむとおぼしつるも出でたゝれず。宮の御前に参り給へればいと何心もなく若やかなるさまし給ひて經讀み給ふを恥ぢらひてもてかくし給へり。何かはしりにけりとも知られ奉らむなど心にこめてよろづに思ひ居たまへり。

椎本

二月の二十日のほどに兵部卿の宮初瀬にまうで給ふ。ふるき御願なりけれどおぼしもたゝで年頃になりにけるを、宇治のわたりの御中やどりのゆかしさに、多くはもよほされ給へるなるべし。うらめしといふ人もありける里の名の、なべてむつましうおぼさるゝ故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人などはさらにもいはず世に殘る人少く仕うまつれり。六條院よりつたはりて右の大殿まで給ふ所は、河よりをちにいと廣くおもしろくてあるに、御まうけせさせ給へり。おとゞもかへさの御迎へに参り給ふべくおぼしたるを俄なる御物忌の重く慎み給ふべく申したれば、え参らぬよしのかしこまり申し給へり。宮、な

ますさまじとおぼしたるに、宰相の中將、今日の御迎へに參りあひ給へるになかなか心やすくて、かのわたりのけしきも傳へよらむと御心ゆきぬ。おとゞをばうちとけて見えにくゝことごとしきものに思ひ聞え給へり。御子の公達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭少將、藏人の兵衛佐など皆さぶらひ給ふ。帝后も心ことに思ひ聞え給へる宮なれば大かたの御おぼえもいとかぎりなく、まいて六條院の御かたざまはつきづきの人も、皆私の君に心よせ仕うまつり給ふ。所につけたる御しつらひなどをかしうきなして、碁すぐろくたぎのばんどもなどとり出でゝ、心々にすさびくらし給ひつ。宮はならひ給はぬ御ありきに惱ましくおぼされて、こゝにやすらはむの御心も深ければ、うちやすみ給ひて夕つ方ぞ御琴などめして遊び給ふ。例のかう世ばなれたる所は水の音ももてはやして、物の音すみまさる心地して、かのひじりの宮にも唯さしわたる程なれば、追風に吹き來るひゞきを聞き給ふに、昔の事おぼし出でられて、「笛をいとをかしくも吹きとほしたるかな。誰ならむ。昔の六條院の御笛の音聞きしはいとをかしげに愛敬づきたるねにこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて、ことごとしきけのそひたるは、致仕のおとゞの御ぞうの笛の音にこそ似たなれ」などひとりごちおはす。「哀に久しくなりにけるや。かやうの遊などもせで、あるにもあらですぐし來にける年月の、さすがに多く算へらるゝこそかひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御有樣あたらしく、かゝる山ふところにひき籠めては、止まずもがなとおぼし續けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひよるまじかめり、まいて今やうの心淺

からむ人をばいかでかはなどおぼし亂れて、つれづれとながめたまふ。所は春の夜もいと明しがたきを、心やり給へる旅寢のやどりは忍ひのまぎれにいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らむことを宮はおぼす。はるばるとかすみ渡れる空に、散る櫻あれば今ひらけそむるなどいろいろ見渡さるゝに、河ぞひ柳のおきふし靡く水かげなどおろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人はいと珍しく見捨て難しとおぼさる。宰相はかゝるたよりをすぐさずかの宮に詣うでばやとおぼせど、あまたの人めをよきて一人漕ぎ出で給はむふなわたりのほども輕らかにやと思ひやすらひ給ふほどに、かれより御文あり。

「山風にかすみ吹きとく聲はあれどへだてゝ見ゆるをちのさら波」。さうにいとをかしう書き給へり。宮おぼすあたりと見給へばいとをかしくおぼいて、「この御かへりは我せむ」とて、

「をちこちのみぎはの波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の河風」。中將はまうで給ふ。あそびに心入れたるさんだちさそひて、さしやり給ふほど、酬酢樂遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる橋の心ばへなど、さる方にいとをかしうゆゑある宮なれば、人々心して船よりおり給ふ。こゝはまたさまことに、山ざとびたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて見所ある御ましつらひを、さる心ちしてかきはらひいといたうさなし給へり。いにしへのねなど、いとになきひきものどもをわざとまうけたるやうにはあらでつぎつぎひき出で給ひて、壹越調のこゝろに櫻人遊び給ふ。あるじの宮の御さんをかゝるついでにと人々思ひ給

へれど、箏のことをぞ心にもいれずをりをりかきあはせ給ふ。耳なれぬけにやあらむ、いと物深くおもしろしと若き人々思ひまゐみたり。所につけたるあるじいとをかしう志給ひて、よそに思ひやりし程よりは、なま孫王めく賤しからぬ人あまた、おほきみ四位のふるめきたるなど、かく人め見るべきをりと、かねていとほしがり聞えけるにや、さるべきかぎり參りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方にふるめきてよしよししうもてなし給へり。まらうどたちは、御むすめたちのすまひ給ふらむ御有樣思ひやりつゝ、心つくす人もあるべし。かの宮はまいてかやすきほどならぬ御身をさへ處せくおぼさるゝを、かゝる折にだにと忍びかね給ひて、おもしろき花の枝を折らせ給ひて、御供にさぶらふ上わらはのをかしきして奉り給ふ。

「山櫻にほふあたりに尋ねきておなじかざしを折りてけるかな。野をむつましみ」とやありけむ。御かへりはいかでかはなど、聞えにくゝおぼしわづらふ。「かゝるをりのこと、わざとがましくもてなし、程の經るもなかなかにくきことになむ侍りし」などふる人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。

「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春のたび人。野をわきてしも」といとをかしげにらうらうしく書き給へり。げに河風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊び給ふ。御迎に藤大納言、仰言にて參り給へり。人々あまた參り集ひ、物さわがしくてきほひ歸り給ふ。若き人々飽かずかへりみのみせられける。宮は又さるべきついでしてとお

ぼす。花ざかりにて、四方の霞もながめやる程の見所あるに、からのもやまとのも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。物さわがしくて思ふまゝにもえいひやらずなりにしを飽かず宮はおぼして、まゐるべなくても御文は常にありける。宮も「猶聞えたまへ。わざとけさうだちてももてなさじ。なかなか心時めきにもなりぬべし。いとすき給へるみこなればかゝる人など聞き給ふが、猶もあらぬすさびなめり」とそゝのかし給ふ。時々中の君ぞ聞え給ふ。姫君はかやうのこと、たはぶれにもてはなれ給へる御心深さなり。いつとなく心ぼそき御有樣に、春のつれづれはいとど暮し難くながめ給ふ。ねびまさり給ふ御さまかたちどもいよいよまさり、あらまほしくをかしきもなかなか心苦しう、かたほにもおはせましかばあたらしくをしき方の思ひは薄くやあらましなど明暮おぼしみだる。姉君廿五、中の君廿二にぞなり給ひける。宮は重く慎み給ふべき年なりけり。物心ぼそくおぼして、御おこなひ常よりもたゆみなく志給ふ。世に心とどめ給はねば出でたちいそぎをのみおぼせば、涼しき道にも赴き給ひぬべきを、唯この御事どものいといとほしく、かぎりなき御心づよさなれど、必ず今はと見捨て給はむ御心は亂れなむと、見奉る人もおしはかりきこゆるを、おぼすさまにはあらずともなのめにさても人ぎゝくちをしかるまじう、見ゆるされぬべきはの人の、まごゝろにうしろみ聞えむなど思ひよりて聞ゆるあらば知らずがほにてゆるしてむ、ひとところ世に住みつき給ふよすがあらば、それを見ゆづる方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人もなし。まれまれははかなきたよりにすきごと聞えなどする人、また若々しき人、

の心のすさびに、物まうでの中やどり、ゆきさのほどのなほざりごとに氣色ばみかけて、さすがにかくながめ給ふ有樣などおしはかりあなづらはしげにもてなすはめざましうて、なげのいらへをだにせさせ給はず。三宮ぞなほ見では止まじとおぼす御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。宰相の中將その秋中納言になり給ひぬ。いとゞにほひまさり給ふ。世のいとなみに添へてもおぼすこと多かり。いかなることといぶせく思ひ渡りし年比よりも心苦しうて、過ぎ給ひにけむいにしへざまの思ひやらるゝに、罪輕くなり給ふばかり、おこなひもせまほしくなむ、かのおい人をば哀なるものに思ひおきて、いちじるさまならず、とかくまぎらはしつゝ心よせとぶらひ給ふ。宇治にまうでゝ久しうなりにけるを思ひ出でゝ參り給へり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたゝぬ秋の氣色を音羽の山近く風の音もいとひやゝかに槇の山邊も僅に色づきて、猶尋ね來たるにをかしう珍しうおぼゆるを、宮はまいて例よりも待ち喜び聞え給ひて、この度は心ぼそげなる物語いと多く申し給ふ。「なからむ後この君達をさるべきものゝたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものにかずまへ給へ」などおもむけつゝ聞え給へば、「ひとことにても承りおきてしかば更に思う給へをこたるまじくなむ。世の中に心をとゞめじとはぶき侍る身にて、何事もたのもしげなきおひさきのずくなさになむ侍れど、さる方にてもめぐらひ侍らむかぎりは、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ思う給ふる」など聞え給へば、いとうれしとおぼいたり。夜深き月のあきらかにさし出でゝ、山のは近き心ちするに、ねんずいとあはれに志給ひて昔物がたり志給ふ。「この頃の世はいかゞなりにたらむ。いぢうなどにてかやうなる秋の月に、御前の御あそびのをりにさぶらひあひたる中に、物の上手とおぼしきかぎりとりどりにうちあはせたる拍子などことごとしきよりも、よしありとおぼえある女御更衣の御つぼねつぼねの、おのがじゝはいどましく思ひうはべのなさけをかはすべかめるを、夜深きほどの人のけしめりぬるに、心やましくかいしらべ、ほのかにほころび出でたる物の音など聞き所あるが多かりしかな。何事にも女はもてあそびのつまにしつべく、物はかなきものから人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道のやみを思ひやるにも、をのこはいとしも親の心をみださずやあらむ。女はかぎりありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦しかるべき」など大方のことにつけてのたまへる、いかゞさおぼさゞらむと心苦しく思ひやらるゝ御心のうちなり。「すべて誠にあか思ひ給へすてたるけにや侍らむ。みづからのことにては、いかにもいかにも深う思ひ知る方の侍らぬを、げにはかなきことなれど、聲にめづる心こそ背きがたきことに侍りけれ。さかしうひじりだつ迦せうもされば立ちて舞ひ侍りけむ」などいひて、飽かず一聲聞きし御琴の音を、せちにゆかしがり給へば、うとうとしからぬはじめにもとやおぼすらむ、御みづからあなたに入り給ひてせちにそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞいとほのかに、搔きならして止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて哀なる空のけしき、所のさまにわざとなき御あそびの心に入りて、をかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかはひきあはせ給はむ。「おのづからかばかりならしそめつるのこりは、よごもれるどち

にゆづり聞えてむ」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。

「我なくて草のいほりは荒れぬともこのひとことは枯れじとぞ思ふ。かゝる對面も、この度や限ならむと物心ぼそきに忍びかねて、かたくなしきひがごと多くもなりぬるかな」とてうちなき給ふ。まらうど、

「いかならむ世にかかれせむ長きよのちぎり結べる草のいほりは。すまひなどおぼやけごとどもまぎれ侍る頃過ぎてさぶらはむ」など聞え給ふ。こなたにてかの問はずがたりのふる人めし出でゝのこり多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は隈なくさし入りてすきかげなまめかしきに、君達もおくまりておはす。世の常のけさうびてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝものし給へば、さるべき御いらへなど聞えたまふ。三宮はいとゆかしうおぼいたる物をと、心のうちには思ひ出でつゝ、我が心ながら猶人にはことなりかし、さばかり御心もてゆるび給ふことのさしもいそがれぬよ、もてはなれてはたあるまじき事とはさすがにおぼえず、かやうにて物をも聞えかはし、をりふしの花紅葉につけてあはれをもなさけをもかよはすにくからず物し給ふあたりなれば、すくせことにてほかざまにもなり給はむはさすがに口惜しかるべくりやうじたる心ちしけり。まだ夜深きほどに歸り給ひぬ。心ぼそくのこりなげにおぼいたりし御けしきを思ひ出で聞え給ひつゝ、騷しき程過してまうでむとおぼす。兵部卿の宮もこの秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでをおぼしめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女はまめやかに思すらむとも思ひ給はねば、煩しく

もあらではかなきさまにもてなしつゝ折々に聞えかはし給ふ。秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心ぼそくおぼえ給ひければ、例の靜なる所にて念佛をもまぎれなくせむとおぼして、君達にもさるべき事聞え給ふ。「世の事としてつひの別を遁れぬわざなめれど、思ひ慰む方ありてこそ悲しさをもさますものなめれ。又見ゆづる人もなく心ぼそげなる御有樣どもをうちすてゝむがいみじきこと。されどもさばかりの事に妨げられて長き世の闇にさへ惑はむがやくなさ。かつ見奉るほどだに思ひすつる世を、さりなむうしろの事知るべきことにはあらねど、我が身ひとつにあらず、過ぎ給ひにし御おもてぶせにかるがるしき心どもつかひ給ふな。おぼろげのよすがならで人のことにうちなびきこの山里をあくがれ給ふな。たゞかう人に違ひたるちぎりことなる身とおぼしなして、こゝに世をつくしてむと思ひとり給へ。ひたぶるに思ひしなせばことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女はさる方に堪へ籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを、おはざらむなむよかるべき」などのたまふ。ともかくも身のならむやうまではおぼしも流されず、唯いかにしてか後れ奉りては世に片時もながらふべきとおぼすに、かく心ぼそきさまの御あらましごとに、いふかたなき御心まどひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨て給ひつらめど、明暮御傍にならはい給ひて、俄に別れ給はむはつらき心ならねど、げにうらめしかるべき御有樣になむありける。あす入り給はむとての日は例ならずこなたかなたゝずみありき給ひて見給ふ。「いとものはかなくかりそめのやどりにてすぐい給ひける御住ひのありさまを、なからむ後いかにして

かは若き人の堪へ籠りてはすぐい給はむにと涙ぐみつゝねんずぢ給ふさまいと清げなり。おとなびたる人々召し出でゝ、「うしろやすく仕うまつれ。何事ももとよりかやすく世に聞えあるまじきはの人は、末のおとろへも常の事にてまぎれぬべかめり。かゝるきはになりぬれば人は何とも思はざらめど、口惜しうてさすらへむ契かたじけなくいとほしきことなむ多かるべき。物さびしく心ぼそき世を經るは例のことなり。生れたる家のほどおきてのまゝにもてなしたらむなむ、きゝみゝにも我が心ちにもあやまちなくはおぼゆべき。にぎはゝしく人かずめかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめかろがろしく善からぬ方にもてなし聞ゆな」などのたまふ。まだ曉に出で給ふとてもこなたに渡り給ひて、「なからむ程心ぼそくなおぼしわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはぢ給へ。何事も思ひにえかなふまじき世をなおぼしいれそ。など顧みがちにて出で給ひぬ。ふた所いとゞ心ぼそく物思ひ續けられて、起き臥しうち語らひつゝ、「ひとりひとりなからましかばいかでか明しくらさまし。今ゆくすゑも定めなき世にて若し別るゝやうもあらばなど泣きみ笑ひみ、たはぶれごともまめごとも同じ心に慰めかはして過し給ふ。かの行ひ給ふ三昧今日はてぬらむといつしかと待ち聞え給ふ夕暮に、人まゐりて「今朝よりなやましうてなむえ參らぬ。風かとてとかくつくろふものする程になむ。さるは例よりも對面心もとなきを」と聞え給へり。胸つぶれていかなるにかとおぼし歎き御ぞども綿厚くていそぎさせ給ひて奉れなどし給ふ。二三日はおり給はず、いかにいかにと人奉り給へど「殊におどろおどろしくはあらず。そこはかとなく苦しうなむ。少しもよろしうならば今ねんじて」などことばにて聞え給ふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれどかぎりのたびにもおはしますらむ。君達の御事何かおぼし嘆くべき。人は皆御宿世といふものことごとなれば御心にかゝるべきにもおはしまさず」といよいよおぼし離るべきことを聞え知らせつゝ、「今さらになる出で給ひそ」と諫め申すなりけり。八月二十日のほどなりけり。大方の空の氣色もいとゞしきころ、君だちは朝夕霧の晴るゝ間もなくおぼし嘆きつゝながめ給ふ。有明の月のいと華やかにさし出でゝ水のおもてもさやかに澄みたるを、そなたの蔀あげさせて見出し給へるに、鐘の聲かすかに響きて明けぬなりと聞ゆるほどに人きて、「この夜中ばかりになむうせ給ひぬる」となくなく申す。心にかけていかにとは絶えず思ひ聞え給へれど、うち聞き給ふにはあさましく物おぼえぬ心地して、いとゞかゝることに涙もいづちかいにけむ、たゞうつぶし臥し給へり。いみじきことも見る目の前にて覺束なからぬこそ常のことなれ。覺束なさそひて、おぼし歎くことことわりなり。おばしにても後れ奉りて世にあるべきものとおぼしならはぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣きまどみ給へど、かぎりある道なりければ何のかひなし。阿ざ梨年頃契り置き給ひけるまゝに後の御事もよろづに仕うまつる「なき人になり給へらむ御さまかたちをだに今一度見奉らむ」とおぼしのたまへど「今更になでふさることかは侍るべき。日頃も又逢ひ見給ふまじきことを聞え知らせつれば、今はましてかたみに御心とゞめ給ふまじき御心づかひを習ひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。おはしましけ

る御有様を聞き給ふにも、阿ざ梨のあまりさかしきひじり心をにくゝつらしとなむおぼしける。入道の御ほいは昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる人なき御事どもの見捨てがたきを、生けるかぎりは明暮え去らず見奉るを、世に心ぼそき世のなぐさめにも、おぼし離れ難くてすぐい給へるを、かぎりある道にはさきだち給ふも、慕ひ給ふ御心も、かなはぬわざなりけり。中納言殿には聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべかりける事多う殘りたる心地して、大方世の有様思ひつゞけられていみじう泣い給ふ。またあひ見むこと難くやなどのたまひしを、猶常の御心にも朝夕のへだて知らぬ世のはかなさを、人よりけに思う給へりしかば、耳なれて昨日今日と思はざりけるを、かへすがへす他かず悲しくおぼさる。阿ざ梨のもとにも、君達の御とぶらひなどまた音づれ聞ゆる人だになき御有様なれば、物おぼえぬ御心地どもにも、年頃の御心ばへのあはれなめりしなどをも思ひ知り給ふ。世の常の程の別れだにさしあたりては、又類ひなきやうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにていかやうなる心地ども去給ふらむとおぼしやりつゝ、のちの御わざなどあるべき事ども推しはかりて阿ざ梨にもとぶらひ給ふ。こゝにもおい人どもにことよせて御誦經などの事も思ひやり聞えたまふ。あけぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ。野山の氣色まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば爭ひ落つる木の葉の音も、水のひゞきも、涙の瀧もひとつものゝやうにくれ惑ひて、「かうてはいかでか限あらむ御命も去ばしめぐらひ給はむ」とさぶらふ人々は心ぼそくいみじく慰め聞えつゝ思ひ惑ふ。こゝにも念佛の僧さぶらひて、おはしましゝ方は佛をかたみに見奉りつゝ、時々參り仕うまつりし人々の、御忌に籠りたるかぎりはあはれに行ひてすぐす。兵部卿宮よりも度々とぶらひ聞えたまふ。さやうの御返りなど聞えむ心地も去給はず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざなるを我をば猶思ひ放ち給へるなめりとうらめしくおぼす。紅葉の盛に、文など作らせ給はむとて出で立ち給ひしを、かくこのわたりの御せうえうびんなき頃なれば、おぼしとまりて口惜しくなむ。御忌もはてぬ。限あれば涙もひまもやとおぼしやりて、いと多く書きつゞけ給へり。時雨がちなる夕つかた、

「をじかなく秋の山里いかならむ小萩がつゆのかゝるゆふぐれ。只今の空の氣色をおぼし知らぬがほならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊もわけてながめらるゝ比になむ」などあり。「げにいとあまり思ひ知らぬやうにてたびたびになりぬるを、猶聞え給へ」など、中の君を例のそゝのかして書かせ奉りたまふ。今日までながらへて硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かなとおぼすに、又かきくもり物見えぬ心地し給へば、おしやりて、猶えこそ書き侍るまじけれ。やうやうかう起きゐられなどし侍る。げに限ありけるにこそとおぼゆるもうとましう心憂くて」とらうたげなるさまに泣き去をれておはするもいと心苦し。夕暮の程より來ける御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。「いかでか歸り參らむ。今夜は旅寢して」といはせ給へど、「立ちかへりこそ參りなめ」といそげば、いとほしうて我さかしう思ひ去づめ給ふにあらねど、見わづらひ給ひて、

「涙のみきりふたがれる山里はまがきに鹿ぞもろごゑになく」。黒き紙に夜の墨つきもたどたどしければ、ひきつくろふ所もなく筆に任せておし包みて出し給ひつ。御使は、木幡山のほども雨もよにいと恐しげなれど、さやうの物おぢすまじきをえり出で給ひけむ、むつかしげなるさゝのくまをこまひきとゞむる程もなくうちはやめて片時に参りつきぬ。おまへに召しても、いたくぬれて参りたれば祿たまふ。ささぎき御覽ぜしにはあらぬ手の、今少しおとなびまさりてよしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覽じつゝ、とみにもおほとのごもらねば、「待つとて起きおはしまし、又御覽ずるほどの久しきは、いかばかり御心にあむことならむ」と、御前なる人々さゝめききこえて、にくみ聞ゆ。ねぶたければなめり。まだ朝霧深きあしたにいそぎ起きて奉り給ふ。

「朝霧に友まどはせる鹿の音を大かたにやはあはれとも聞く。もろごゑは劣るまじくこそ」とあれど、あまりなさけだゝむもうるさし。ひと所の御蔭にかくろへたるをたのみ所にてこそ何事も心やすくて過しつれ、心より外になながらへて、思はずなることのまぎれつゆにてもあらば、うしろめたげにのみおぼしおくめりし、なき御たまにさへきづやつけ奉らむと、なべていとつゝましう恐しうて聞え給はず。この宮などをばかろらかにおしなべてのさまにも思ひ聞え給はず。なげの走りかい給へる御筆づかひ、言の葉もをかしきさまになまめき給へる御けはひをあまたは見知り給はねど、これこそはめでたきなめれと見給ひながら、そのゆゑゆゑしくなさけある方に、ことをまぜ聞えむもつきなき身の有樣どもなれば、何かたゞ

かゝる山ぶしだちて過してむとおぼす。中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞え給へば、これよりもいとけうとげにはあらず聞え通ひ給ふ。御いみはてゝもみづからまうで給へり。東の廂のくだりたる方にやつれておはするに、近うたち寄り給ひて、ふる人召し出でたり。闇に惑ひ給へる御あたりにいとまばゆく匂ひ滿ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて御いらへなどをだにえ聞え給はねば、「かやうにはもてない給はで昔の御心むけに從ひ聞え給はむさまならむこそ、聞えうけたまはるかひあるべけれ。なよび氣色ばみたるふるまひをならひ侍らねば、人づてに聞え侍るは言の葉も續き侍らず」とあれば、「あさましう今までながらへ侍るやうなれど、思ひさまさむ方なき夢に惑はれ侍りてなむ、心より外に空のひかり見侍らむもつゝましうて、端近うもえみじろき侍らぬ」と聞え給へれば、「ことゝいへば限なき御心の深さになむ。月日のかげは御心もて、はればれしくもていでさせ給はゞこそ罪も侍らめ。行く方もなくいぶせうおぼえ侍り。又おぼさるらむはおばしをもあきらめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、「げにこそいとたぐひなげなめる御有樣を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程」など人々聞えあらす。御心地にもさこそいへ、やうやう心おづまりてよろづ思ひ知られたまへば、昔ざまにてもかうまで遙けき野邊を分け入り給へる志などを思ひ知り給ふべし。少しゐざりより給へり。おぼすらむさま、又のたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしういひて、うだて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、けうとくすゞろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく聲を聞かせ奉り、すゞろに

たのみ顔なることなども、ありつる日比を思ひ續くるもさすがに苦しうてつゝましけれど、ほのかにひとことなどいらへ聞え給ふさまの、げによろづ思ひほれ給へるけはひなれば、いと哀と聞き奉り給ふ。黒き几帳のすきかげのいと心苦しげなるに、ましておはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

「色かはるあさぢを見ても墨染にやつるゝ袖をおもひこそやれ」とひとりごとのやうにのたまへば、

「色かはる袖をばつゆのやどりにて我が身ぞさらにおきどころなき。はつるゝいとは」と末はいひけちて、いといみじく忍び難きけはひにて入り給ひぬなり。ひきとゞめなどすべき程にもあらねば飽かずあはれにおぼゆ。おい人ぞこよなき御かはりに出て來て、昔今をかきあつめ、悲しき御物語ども聞ゆる。ありがたくあさましき事どもを見たる人なりければ、かうあやしう衰へたる人ともおぼし捨てられず、いとなつかしう語らひ給ふ。「いはけなかりし程に故院に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りにしかば、人となり行くよはひにそへてつかさくらゐ世の中のにほひも何ともおぼえずなむ。唯かうあづやかなる御住ひなどの心にかなひ給へりしを、かくはかなく見なし奉りつるにいよいよいみじく、かりそめの世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうてとまり給へる御事どもほだしなど聞えむはかけがけしきやうなれど、ながらへてもかの御事あやまたず、聞えうけたまはらまほしきになむ。さるは覺えなき御ふる物語きゝしより、いとゞ世の中に跡とめむとも

おぼえずなりにたりや」とうち泣きつゝのたまへば、この人はましていみじく泣きてえも聞えやらず。御けはひなどの唯それかとおぼえ給ふに、年比うち忘れたりつるいにしへの御事をさへ取り重ねて聞えやらむ方もなくおぼゝれ居たり。この人はかの大納言の御めのと子にて、父はこの姫君達の母北の方の、母方のをぢ、左中辨にてうせにけるが子なりけり。年比遠き國にあくがれ、母君もうせ給ひて後かの殿には疎くなり、この宮には尋ねとりてあらせ給ふなりけり。人もいとやんごとなからず、宮仕なれにたれど心地なからぬものに宮もおぼして、姫君達の御うしろみだつ人になし給へるなりけり。むかしの御事は年比かく朝夕に見奉りなれ心隔つるくまなく思ひ聞ゆる君達にも、ひとことうち出で聞ゆるついでなく忍びこめたりけれど、中納言の君はふる人の問はずがたり皆例の事なれば、おしなべてあはあはしうなどはいひひろげずとも、いと恥しげなめる御心どもには聞き置き給へらむかしと推しはからるゝに、妬くもいとほしくもおぼゆるにぞ、又もてはなれてはやまじと思ひよらるゝつまにもなりぬべき。今は旅寢もすゞろなる心地して歸り給ふにも、これやかぎりのなどのたまひしを、などかさしもやはとうちたのみて又見奉らずなりにけむ秋やはかはれる。あまたの日數も隔てぬ程におはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや。殊に例の人めいたる御ふつらひなく いとことそぎ給ふめりしかど、いと物清げにかき拂ひあたりをかしくもてない給へりし御住ひも、大とこたち出でいり、こなたかなたひき隔てつゝ御念誦の具どもなどぞ變らぬさまなれど、佛は皆かの寺に移り奉りてむとすと聞ゆるを聞き給ふにも、か

ゝるさまの人かげなどさへ絶えはてむ程とまりて思ひ給はむ心地どもをくみ聞え給ふも、いと胸痛うおぼしつゞけゝる。「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁なきてわたる。

「秋霧のはれぬ雲ゐにいとゞしくこの世をかりといひあらすらむ」。兵部卿の宮に對面し給ふ時は、まづこの君達の御事をあつかひぐさに去給ふ。今はさりとも心やすきをおぼして、宮はねんごろに聞え給ひけり。はかなき御返りも聞えにくゝつゝましき方に女がたはおぼいたり。世にいといたうすき給へる御名のひろごりて好ましく艶におぼさるべかめるも、かういとうづもれたる葎の下よりさし出でたらむてつきも、いかにうひうひしくふるめきたらむなど、思ひくつし給へり。さてもあさましうて明し暮さるゝは月日なりけり。かく頼み難かりける御世を昨日今日とは思はで、唯大かた定なきはかなさばかりを明暮のことに聞き見しかば、我も人も後れさきだつ程しもやはへむなどうち思ひけるよ、きし方を思ひ續くるも、何のたのもしげなる世にもあらざりけれど、唯いつとなくのどかに眺めすぐし、物恐しくつゝましきこともなくて經つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人かげもうちつれこわづくれば、まづ胸つぶれて物恐しく侘しう覺ゆることさへそひにたるが、いみじう堪へ難きことゝ、二所うち語らひつゝほすよもなくてすぐしたまふに年も暮れにけり。雪霰ふりまくころはいづくもかくこそはある風の音なれど、今始めて思ひいりたらむ山住の心地し給ふ。女ばらなど、「あはれとしはかはりなむとす。心ぼそく悲しきことを、改まるべき春待

ち出でゝしがな」と心をけたずいふもありがたきことかなと聞き給ふ。向ひの山にも時々の御念佛に籠り給ひし故こそ、人もまゐりかよひしか、阿闍梨もいかゞと大方にまれに音づれ聞ゆれど、今は何しにかはほのめき參らむ、いとゞ人目の絶えはつるもさるべきことゝ思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりしやまがつもおはしまさで後たまさかにさしのぞき參るは、めづらしく覺え給ふ。この比の事とてたきゞこのみ拾ひて參る山人どもあり。阿闍梨のむろより炭などやうの物奉るとて、「年比に習ひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍らむが心ぼそきになむ」と聞えたり。必ず冬ごもる山風防ぎつべき綿きぬなど遣しゝを、おぼし出でゝやり給ふ。法師ばらわらはべなどののぼり行くも見えみ見えずみいと雪深きを、泣く泣く立ち出でゝ見送り給ふ。「みぐしなどおろい給うてもさる方にておはしまさましかばかやうに通ひ參る人もおのづから繁からまし。いかに哀に心ぼそくとも、あひ見奉ること絶えて止まゝしやは」などかたらひ給ふ。

「君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る」。中の君、

「奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば。うらやましくぞ またもふりそふや」。中納言の君は、新しき年はふとしもえとぶらひ聞えざらむと覺しておはしたり。雪もいとゞ所せきによろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひして かろらかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず思ひ知られ給へれば、例よりはみいれておましなどひきつくろはせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取り出でゝ、塵かき拂ひなどするにつけ

ても、宮の待ち喜び給ひし御氣色などを人々も聞え出づ。たいめし給ふことをばつゝましくのみおぼいたれど、思ひくまなきやうに人の思ひ給へれば、いかゞはせむとて聞え給ふ。うちとくとはなけれど、さきざきよりは少し言の葉續けて、物などのたまへるさまいとめやすく心恥しげなり。かやうにてのみはえすぐしはつまじと思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな。猶移りぬべき世なりけりと思ひ居給へり。「宮のいとあやしく恨み給ふことの侍るかな。哀なりし御一ことを承り置きしさまなど、事の序にもや漏し聞えたりけむ。又いと隈なき御心のさがにて推し量り給ふにや侍らむ。こゝになむともかくも聞えさせなすべきとたのむを、つれなき御氣色なるはもてそこなひ聞ゆるぞと度々怨じ給へば、心より外なる事と思ひ給へれど、里のまるべいとこよなうもえあらがひ聞えぬを、何かはいとさしももてなし聞え給ふらむ。すい給へるやうに人は聞えなすべかめれど、心の底怪しう深うおはする宮なり。なほざりごとなどのたまふわたりの、心がらうて靡きやすなるなどを珍しからぬものに思ひおとし給ふにやとなむ聞くことも侍る。なに事にもあるに從ひて心をたつる方もなく、おどけたる人こそ、唯世のもてなしに從ひてとあるもかゝるもなのめに見なし少し心に違ふふしあるにもいかゞはせむ、さるべきぞなども思ひなすべかめれば、なかなか心長きためしになるやうもあり、くづれそめては、龍田の川の濁る名をもけがし、いふかひなく名殘なきやうなることなども皆うちまじるめれ。心の深くまみ給ふべかめる御心ざまにかなひ、事に背くこと多くなどもし給はざらむをば、更にかろがろしくはじめをはり違ふやうなることなど見せ給ふまじき氣色になむ。人の見奉り知らぬことをいとよう見聞えたるを、もし似つかはしくさもやとおぼしよらば、そのもてなしなどは心のかぎり盡して仕うまつりてむかし。御中道のほどみだりあしこそいたからめ」といとまめやかにていひ續け給へば、我が御みづからの事とはおぼしもかけず、人の親めきていらへむかしとおぼしめぐらし給へど、猶いふべき言の葉もなき心ちして、「いかにとかはかけがけしげにのたまひ續くるに、なかなか聞えむことも覺え侍らで」とうち笑ひ給へるも、おいらかなるものからけはひをかしう聞ゆ。「必ず御自ら聞しめしおふべき事とも思ひ給へず。それは雪を踏み分けて參り來たる志ばかりを御覽じわかむ。御このかみ心にても過ぐさせ給ひてよかし。かの御心よせは又ことにぞはべかめる。ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさやそれも人のわき聞え難きことなり。御かへりなどはいづかたにかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、ようぞたはぶれにも聞えざりける、何となけれどかうのたまふにもいかに恥しう胸つぶれましと思ふに、え答へやり給はず。

「雪ふかき山のかけはし君ならでまたふみ通ふあとを見ぬかな」と書きてさし出し給へれば、「御ものあらがひこそなかなか心おかれ侍りぬべけれ」とて、

「つらゝとぢこまふみまだく山河をまるべしがてらまづや渡らむ。さらばしも、かげさへ見ゆるまるしも淺うは侍らじ」と聞え給へば、思はずにものしうなりて殊にいらへ給はず。けざやかにいと物遠くすゝみたるさまには見え給はねど今やうの若人達のやうにえんげに

もてなさで、いとめやすくのどかなる心ばへならむとぞ推し量られ給ふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと思ふに違はぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみよるも知らずがほなるさまにのみもてなし給へば、心恥しうて昔物語などをぞ物まめやかに聞え給ふ。「暮れはてなば雪いとゞ空もとぢぬべう侍り」と御供の人々こわづくれば、かへり給ひなむとて「心苦しう眺めくらさるゝ御住ひのさまなりや。唯山里のやうにいと靜なる所の、人も行きまじらぬ所に侍るを、さもおぼしかけばいかに嬉しく侍らむ」などのたまふも、いとめでたかるべきことかなと片耳に聞きてうちゑむ女ばらのあるを、中の君は、いと見苦しういかにさやうにはあるべきぞと見聞き居給へり。御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にもさかなどめやすき程にて、かはらけさし出させ給ひけり。かの御うつりがもてさわがれし殿居人ぞ、かづらひげとかいふつらつき心つきなくてある、はかなの御たのもし人やと見給ひて、召し出でたり。「いかにぞ、おはしまさで後心ぼそからむ」など問ひ給ふ。うちひそみつゝ心よわげになく。「世の中に頼むよるべも侍らぬ身にて、一所の御かげに隱れて三十餘年を過し侍りにければ、今はまして野山にまじり侍らむも、いかなる木の本をかはたのむべく侍らむ」と申して、いとゞ人わろげなり。おはしましゝ方あけさせ給へれば、塵いたう積りて佛のみぞ花のかざり衰へず行ひ給ひけりと見ゆる。御床など取りやりてかき拂ひたり。ほいをも遂げばと契り聞えしこと思ひ出でゝ、

「立ちよらむかげと頼みし椎がもと空しき床になりにけるかな」とて柱により居給へるを、若き人々はのぞきてめで奉る。日暮れぬれば近き所々にみさうなど住うまつる人々に、みまくさとりに遣りける。君も知り給はぬに田舍びたる人々、おどろおどろしくひき連れ參りたるを、あやしうはしたなきわざかなと御覽ずれど、おい人にまぎらはし給ひつ。大方かやうに仕うまつるべく、仰せ置きて出で給ひぬ。』年かはりぬれば空の氣色うらゝかなるに、みぎはの氷解けわたるにつけても、かうまでながらへけるもありがたくもと眺め給ふ。ひじりの坊より、「雪消えに摘みて侍るなり」とて澤の芹峯の蕨など奉りたり。いもひの御臺に參れる。「所につけては、かゝる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のおるしも見ゆることをかしけれ」など人々のいふを、何のをかしきならむと聞き給ふ。

「君がをる峯のわらびと見ましかば知られやせまし春のおるしも」。

「雪深きみぎはのこぜり誰がためにつみかはやさむ親なしにして」などはかなきことをうち語らひつゝ明けくらし給ふ。中納言殿よりも、宮よりも折すぐさず訪らひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かるやうなれば例の書きもらしたるなめり。花ざかりの頃、宮かざしをおぼし出でゝ、そのをり見聞き給ひし君達なども、「いとゆゑありしみこの御住ひを、またも見ずなりにしこと」など大方のあはれを口々聞ゆるに、いとゆかしうおぼされたり。

「つてに見し宿の櫻をこの春はかすみへだてず折りてかざゝむ」と心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかなと見給ひながらいとつれづれなる程に、見所ある御文の、うはべばかりをもてけたじとて、

「いづくとか尋ねて折らむ墨染に霞こめたるやどのさくらを」。猶かくさしはなちてつれなき御氣色の見ゆれば、誠に心うしとおぼしわたる。御心に餘り給ひては、唯中納言を、とざまかうざまに責め恨み聞え給へば、をかしと思ひながら、いとうけばりたる後見顔にうちいらへ聞えて、あだめいたる御心ざまをも見顯す時々は、「いかでかかゝらむには」など申し給へば、宮も御心づかひ為給ふべし。「心にかなふあたりをまだ見つけぬ程ぞや」とのたまふ。おほい殿の六の君をおぼし入れぬこと、なまうらめしげにおとゞもおぼしたりけり。されどゆかしげなきなからひなるうちにも、おとゞのことごとしく煩しくて何事のまぎれをも見咎められむがむつかしきと、またにはのたまひてすまひ給ふ。その年三條の宮燒けて、入道宮も六條院にうつろひ給ひ、何くれと物騷しきにまぎれて、宇治のわたりを久しう音づれ聞え給はず。まめやかなる人の御心は又いとことなりければ、いとのどかにおのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるび給はざらむかぎりは あさればみなさけなきさまに見えじと思ひつゝ、昔の御心忘れぬ方を深く見知り給へとおぼす。その年常よりも暑さを人々わぶるに、河づら涼しからむはやと思ひ出でゝ、俄にまうで給へり。朝すゞみの程に出で給ひければ、あやにくにさしくる日影もまばゆくて宮のおはせし西の廂に殿居人召し出でゝおはす。そなたのもやの佛の御まへに、君達ものし給ひけるを、けぢかゝらじとて、我が御方にわたり給ふ。御けはひ忍びたれどおのづからうちみじろき給ふ程近く聞えければ、猶あらじにこなたに通ふさうじのはしの方にかけがねまたる所に、穴の少しあきたるを見置き給へり

ければ、とに立てたる屏風をひきやりて見給ふ。こゝもとに几帳をそへ立てたる、あな口をしと思ひてひきかへるをりしも、風の籠垂をいたう吹きあぐべかめれば、「あらはにもこそあれ。その御几帳おし出でゝこそ」といふ人あなり。をこがましきものゝ嬉しうて見給へば、高きも短きも、几帳をふたまのすに押し寄せて、このさうじに向ひて、あきたるさうじよりあなたにとぼらむとなりけり。まづ一人たち出でゝ、几帳よりさしのぞきて、この御供の人人のとかう行きちがひ涼みあへるを見給ふなりけり。濃きにび色のひとへに、くわざうの袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりて、花やかなりと見ゆるは、着なし給へる人がらなめり。帶はかなげにまなして、珠數ひき隱しても給へり。いとそびやかに、やうだいをかしげなる人の、かみうちきに少したへぬ程ならむと見えて、末まで塵のまよひなく、つやつやとこちたう美くしげなり。かたはらめなどあならうたげと見えて、匂ひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一宮もかうざまにぞおはすべきとほの見奉りしも思ひくらべられてうちなげかる。またねざり出でゝ、かのさうじはあらはにもこそあれと見おこせ給へる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼゆ。頭つきかんざしのほど、今少しあてになまめかしきさまなり。「あなたに屏風も添へて立てゝ侍りつ。急ぎてしものぞき給はじ」と若き人々何心なくいふあり。「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにねざり入り給ふ程、け高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。黑きあはせ一かさね同じやうなる色あひを着給へれど、これはなつかしうなまめきて、哀げに心苦しうおぼゆ。髮さばらかなる程に落ちたる

なるべし、末少しほそりて、色なりとかいふめるひすゐだちていとをかしげにいとをよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ちたまへる手つき、かれよりもほそさまさりてやせやせなるべし。立ちたりつる君もさうじ口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いとあいぎやうづきたり。

總角

あまた年耳なれ給ひにし河風も、この秋はいとはしたなく物悲しくて、御はての事急がせ給ふ。大方のあるべかしきことゞもは、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつり給ひける。こゝには法服の事、經のかざり、こまかなる御あつかひを、人の聞ゆるに從ひて營み給ふも、いとものはかなくあはれに、かゝるよその御後見なからましかばと見えたり。みづからも詣で給ひていまはと脱ぎ捨て給ふ程の御とぶらひあさからず聞え給ふ。阿闍梨もこゝに參れり。みやうがうの絲ひき亂りて、「かくても經ぬる」などうち語らひ給ふほどなりけり。結びあげたるたゝりのすだれのつまより几帳のほころびにすきて見えければ、その事と心得て「我が涙をば玉にぬかなむ」とうちずし給へり。伊勢のごもかうこそはありけめとをかしう聞ゆるも、うちの人は聞き知りがほにさしいらへ給はむもつゝましくて、物とはなしにとか貫之がこの世ながらの別をだに心ぼそきすぢにひきかけゝむをなど、げにふることぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出て給ふ。御願文つくり、經ほとけ供養せらるべき心ばへなど書き出で給へる硯のついでに、まらうど、

「あげまきに長きちぎりを結びこめ おなじ所によりもあはなむ」と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさければ、

「ぬきもあへずもろき涙の玉のをに長きちぎりをいかゞむすばむ」とあれば、「あはずはなにを」とうらめしげに眺め給ふ。自らの御うへは、かくそこはかとなくもてけちて恥しげなるに、すかすかともえのたまひよらで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。さしも御心に入るまじきことを、かやうの方に少しすゝみ給へる御本性にて聞えそめ給ひけむ、まけじたましひにやととざまかうざまにいとよくなむ御氣色見奉る。「誠にうしろめたうはなるまじげなるを、などかうあながちにしもてはなれ給ふらむ。世の有樣などおぼしわくまじくは見奉らぬを、うたて遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらなくたのみ聞ゆる心に違ひてうらめしくなむ。ともかくもおぼしわくらむさまなどを、さはやかにうけ給はりにしがな」といとまめだちて聞え給へば、「違へ聞えじの心にてこそは、かうまであやしき世のためしなる有樣にてへだてなくもてなし侍れ。それをおぼしわかざりけることは、淺き事もまじりたる心地すれ。げにかゝる住ひなどに心あらむ人は思ひ殘すことあるまじきを、何事にも後れそめにけるうちにこののたまふめるすぢは、いにしへも更にかけて、とあらばかゝらばなど行く末のあらましごとにとりまぜて のたまひ置く事もなかりしかば、猶かゝるさまに

て世づきたる方を思ひ絶ゆべくおぼしおきてけるとなむ思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えむ方なくて、さるは少し世ごもりたるほどにてみやまがくれには心苦しう見え給ふ人の御うへを、いとかく朽木にはなしはてずもがなと人知れずあつかはしうおぼえ侍れば、いかなるべき世にかあらむ」とうち歎きて物思ひ亂れ給ひけるけはひいとあはれげなり。けざやかにおとなびてもいかでかはさかしがり給はむとことわりにて、例のふる人召し出でゝぞ語らひ給ふ。「年頃は唯後の世ざまの心ばへにて進み參りそめしを、物心ぼそげにおぼしなるめりし御末の頃ほひ、この事どもを心に任せてもてなし聞ゆべくなむのたまひ契りてしを、おぼしおきて奉り給ひし御有樣どもには違ひて、御心ばへどものいとゞあやにくに物つよげなるはいかにおぼし置きつる方の事なるにやと疑はしき事さへそひてなむ。おのづから聞き傳へ給ふやうもあらむ。いとあやしき本性にて、世の中に心をおむる方なかりつるを、さるべきにてやかうまでも聞えなれにけむ。世の人もやうやういひなすやうあるべかめるに、同じうは昔の御事も違へ聞えず、我も人も世の常に心とけて聞え通はゞやと思ひよるは、つきなかるべき事にてもさやうなるためしなくやはある」などのたまひ續けて、「宮の御事をもかう聞ゆるにうしろめたうはあらじとうちとけ給ふさまならぬはうちうちにさりとも思ほしむけたる事のさまあらむ。猶いかにいかに」とうち眺めつゝのたまへば、例のわろびたる女房などは、かゝる事にはにくきさかしらもいひまぜてことよがりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど、「もとよりかく人に違ひ

給へる御くせどもに侍ればにや、いかにもいかにも世のつねになにやかやなどおもひより給へる御氣色になむ侍らぬ。かくてさぶらふこれかれも、年比だに何のたのもしげある木の本のかくろへも侍らざりき。身を捨て難く思ふかぎりはほどほどにつけてまかでちり、昔のふるきすぢなる人も、多く見奉りすてたるあたりに、まして今は暫しも立ちとまり難げに侘び侍りつゝ、おはしましゝ世にこそ限ありてかたほならむ御有樣はいとほしくもなど、こだいなる御うるはしさにおぼし滯りつれ。今はかう又たのみなき御身どもにて、いかにもいかにも世に靡き給へらむを、あながちに譏り聞えむ人は、かへりて物の心をも知らずいふかひなき事にてこそはあらめ。いかなる人かいとかうて世をばすぐしはて給ふべき。松の葉をすきてつとむる山伏だに生ける身の捨て難さによりてこそは、佛の御敎をも道々別れては行ひなすなれ、などやうの善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍るめれど、たわむべくものし給はず、中の君をなむいかで人めかしうもあつかひなし奉らむと思ひ聞え給ふべかめる。かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる御志の、年經て見奉りなれ給へるけはひも疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとざまかうざまにこまかなるすぢに聞え通ひ給ふめるに、かの御方をさやうに趣けて聞え給はゞとなむおぼすべかめる。宮の御文など侍るめるは更にまめまめしき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、「あはれなる御一言を聞き置き奉りにしかば、露の世にかゝづらはむかぎりは、聞え通はむの心あれば、いづかたにも見え奉らむ。同じ事なるべきを、さまではた、おぼしよるなる、いと嬉しき事なれど、心の引くかたなむかばかり思ひ捨つるよに猶とまりぬべきものなりければ、改めてさはえ思ひ直

すまじくなむ。世の常になよびかなるすぢにもあらずや。只かように物隔て事のこいたるさまならずさしむかひてとにかくに定めなき世の物語を隔なく聞えて、つゝみ給ふ御心の隈殘らずもてなし給はむなむはらからなどのさやうにむつまじき程なるもなくて、いとさうざうしくなむ。世の中の思ふ事のあはれにもをかしうもうれはしうも、時につけたる有樣を心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに疎かるまじう頼み聞ゆる。きさいの宮はたなれなれしうさやうにそこはかとなき思のまゝなるくだくだしさを、聞えふるべきにもあらず。三條の宮は親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御わかわかしさなれど、限あればたやすくなれ聞えさせずかし。その外の女はすべていと疎くつゝましう恐しうおぼえて心からよるべなく心ぼそきなり。なほざりのすさびにてもけさうだちたることはいとまばゆくありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にあまめたる方のことは、うち出づることも難くてうらめしうもいぶせくも思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なくかたくなしきわざなれ。宮の御事をも、さりともあしざまには聞えじと任せてやは見給はぬ」などいひ居給へり。おい人はた、かばかり心ぼそきにあらまほしげなる御有樣を、いとせちにさもあらせ奉らばやと思へど、いづかたも恥しげなる御有樣どもなれば思のまゝにはえ聞えず。今宵はとまり給ひて物語などのどやかに聞えまほしうてやすらひ暮し給ひつ。あざやかならず物恨みがちなる御氣色やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしうてうちとけて聞え給はむ事も、いよいよ苦しけれど、大方にてはありがたうあはれなる人の御心なれば、こよなうもてなし難うて對面あたまふ。佛のおはする中の戸をあけて、みあかしの火けざやかにかゝげさせてすだれに屏風をそへてぞおはする。とにもおほとなぶら參らすれど、「惱しうてむちいなるを、あらはに」など諫めてかたはらふし給へり。御くだものなどわざとはなくあなして參らせ給へり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしきさかなどして出させ給へり。らうめいたる方に集りて、このおまへは人げ遠くもてなして、あめじめと物語聞え給ふ。うちとくべうもあらぬものから、懷しげにあいぎやうづきて物のたまへるさまの、なのめならず心に入りて思ひいらるゝもはかなし。かくほどもなきものゝへだてばかりをさはり所にて、覺束なく思ひつゝ過ぐす心おぞさの、あまりをこがましうもあるかなと思ひ續けらるれど、つれなくて大方の世の中のことぐも、あはれにもをかしうもさまざま聞く所多く語らひ聞え給ふ。内には人々近うなどのたまひおきつれど、さしもてはなれ給はざらなむと思ふべかめれば、いとしもまもり聞えず、さしあぞきつゝ皆よりふして、佛の御ともし火もかゝぐる人もなし。物むつかしうて忍びて人めせど驚かず、「心地のかき亂りなやましう侍るを、ためらひて曉方にも又聞えむ」とて入り給ひなむとする氣色なり。「山路分け侍りつる人はましていと苦しけれど、かう聞えうけ給はるに慰めてこそ侍れ。うち捨てゝ入らせ給ひなばいと心ぼそからむ」とて屏風をやをら押しあけて入り給ひぬ。いとむくつけうてなからばかり入り給へるに、引きとゞめられて、いみじうねたう心憂ければ、「へだてなきとはかゝるをやいふらむ。珍らかなるわざかな」とあばめ給へるさまのいよいよをかしけれ

ば、「隔てぬ心を更におぼしわかねば、聞え知らせむとぞかし。珍らかなりともいかなる方におぼしよるにかはあらむ。佛の御前にてちかごともたて侍らむ。うたて、なおぢさせ給ひそ。御心破らじと思ひそめて侍れば、人はかくしも推し量り思ふまじかめれど、世に違へるまれものにて過ぐし侍るぞや」とて心にくきほどなるほかげに、みぐしのこぼれかゝりたるをかきやりつゝ見給へば、人の御けはひ思ふやうにかをりをかしげなり。かう心ぼそうあさましき御すみかに、すいたらむ人はさはり所あまるじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかに口惜しきわざならましときし方の心のやすらひさへあやふくおぼえ給へど、いふかひなく憂しと思ひて、泣き給ふ御氣色のいといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむと思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへ聞え給ふ。「かゝる御心の程を思ひよらであやしきまで聞えなれにたるを、ゆゝしき袖の色など見顯し給ふ心あさゝに、みづからのいふかひなさも思ひ知らるゝに、樣々慰む方なく」と恨みて、何心もなくやつれ給へる墨染のほかげを、いとはしたなく侘しと思ひ惑ひ給へり。いとかうしもおぼさるゝやうこそはと、はづかしきに聞えさせむ方なし。「袖の色を引きかけさせ給ふはしもことわりなれど、こゝら御覽じなれぬる志のまゝるしには、さばかりのいみおくべく、今始めたる事めきてやはおぼさるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とてかの物の音聞きし有明の月かげより始めて、折々の思ふ心の忍び難くなりゆくさまをいと多く聞え給ふに、恥しうもありけるかなと疎ましう、かゝる心ばへ

ながらつれなくまめだち給ひけるかなと聞き給ふ事おほかり。御傍なるみじかき几帳を佛の御方にさし隔てゝかりそめにそひふし給へり。みやうがうのいとかうばしく匂ひて、まきみのいと華やかに薫れるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ聞え給へる御心にてわづらはしく、墨染の今更に折ふし心いられしたるやうに、あはあはしう思ひそめしに違ふべければ、かゝるいみなからむ程にこの御心にも、さりとも少したわみ給ひなむなどせめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひはかゝらぬ所だにおのづからあはれ多かるを、まして峰の嵐も籬の蟲も心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に時々さしいらへ給へるさま、いと見所多くめやすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色とりて皆いりぬ。宮のたまひしさまなどおぼし出づるに、げにながらへば心の外にかくあるまじき事も見るべきわざにこそはと物のみ悲しうて、水の音に流れそふ心地ぞ給ふ。はかなく明けがたになりにけり。御供の人々おきてこわづくり、馬どものいばゆるをも、旅のやどりのあるやうなど人の語るをおぼしやられてをかしうおぼさる。光見えつる方のさうじを押しあけ給ひて空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出で給へるに、程もなき軒の近さなれば、ぞのぶの露もやうやう光り見えもて行く。かたみにいとえんなるさまかたちどもを、「何とはなくて唯かやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世の有樣を聞え合せてなむすぐさまほしき」といとなつかしきさまして語らひ聞え給へば、やうやう恐しさも慰みて、「かういとはしたなからで物隔てゝなど聞えば、誠に心のへだては更にあるまじくなむ」と

いらへ給ふ。あかくなりゆき村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深きあしたの鐘の音かすかにひゞく。今だにいと見苦しきをといとわりなう恥しげにおぼしたり。「ことありがほに朝露もえ分け侍るまじ。又人はいかゞ推し量り聞ゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、唯世に違ひたる事にて、今より後もたゞかやうにおなさせ給ひてよ。世にうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心の程も、あはれとおぼし知らぬこそかひなけれ」とて出で給はむの氣色もなし。あさましうかたはならむとて「今より後は。さればこそ。もてなし給はむまゝにあらむ。今朝はまた聞ゆるに隨ひ給へかし」とていとすべなしとおぼしたれば、「あなくるしや。曉のわかれやまだ知らぬことにてげに惑ひぬべきを」となげきがちなり。庭鳥もいづかたにかあらむ、ほのかにおとなふに、都思ひいでらる。

「山里のあはれおらるゝ聲々にとりあつめたるあさぼらけかな」。女君、

「鳥の音も聞えぬ山とおもひしを世にうきことは尋ねきにけり」。さうじ口まで送り奉り給ひて、よべ入りし戸口より出でゝふし給へれどまどろまれず。名殘戀しうて、いとかく思はましかば、月頃も今まで心のどかならましやなど、かへらむことも物憂くおぼえ給ふ。姫君は人の思ふらむとのつゝましきに、とみにもうちふされ給はで、たのもしき人なくて世を過ぐす身の心うきを、ある人どもゝよからぬこと、何やかやとつきづきに隨ひつゝいひ出づめるに、心よりほかの事ありぬべきよなめりとおぼし廻らすには この人の御けはひ有樣のうとましくはあるまじく、故宮もさやうなる心ばへあらばとをりをりのたまひおぼすめり

しかど、みづからは猶かくて過ぐしてむ、我よりはさまかたちも盛に、あたらしげなる中の君を、人なみなみに見なしたらむこそ嬉しからめ、人のうへになしては心の至らむかぎり思ひ後見てむ、みづからのうへのもてなしは、又誰かは見あつかはむ、この人の御さまのなのめにうち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のおるしにうちゆるぶ心もありぬべきを、恥しげに見えにくき氣色も、なかなかいみじうつゝましきに、我が世はかくて過ぐしはてゝむと思ひつゞけてねなきがちにて明し給へるに、名殘いと惱ましければ中の君のふし給へる奥の方にそひふし給ふ。例ならず人のさゝめきし氣色もあやしとこの君はおぼしつゝねぬ給へるに、かくておはしたれば、うれしくて御ぞひき着せ奉り給ふに、所せき御うつりがのまぎるべくもあらずくゆりかゝる心地すれば、殿居人がもてあつかひけむ思ひ合せられて、誠なるべしといとほしうてねぬるやうにて物ものたまはず。まらうどは辨のおもとよび出で給ひてこまかに語らひ置き、御せうそこすくずくしう聞えおきて出て給ひぬ。あげまきをたはぶれにとりなしゝも心もてひろばかりのへだても、對面おつるとやこの君もおぼすらむと、いみじう耻しければ、心地あしとて惱み暮し給ひつ。人々「日は殘なくなり侍りぬ。はかばかしうはかなき事をだに又仕うまつる人もなきに、折惡しき御惱みかな」と聞ゆ。中の君くみなどしはて給ひて、「心ばなどは、えこそ思ひより侍らね」とせめて聞え給へば、暗うなりぬるまぎれに、起き給ひて諸共にむすびなどおき給ふ。中納言殿より御文あれど「今朝よりいと惱しうなむ」とて人づてにぞ聞え給ふ。「さも見苦しう、わかわかしうおはす」と人々

つぶやき聞ゆ。御ぶくなどはて〻、脱ぎ捨てたまへるにつけても「片時も後れ奉らむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどをおぼすに、いみじう思の外なる身のうさ」と泣きまづみ給へる御さまどもいと心苦しげなり。月頃くらうならはし給へる御姿、うすにびにていとなまめかしうて中の君はげにいと盛にて、美くしげなるにほひまさり給へり。御ぐしなどすましつくろはせて見奉り給ふに、世の物思忘るゝ心ちしてめでたければ、人知れず思ふさまにかなひて、人に見え給はむにさりともちかおとりしては思はずやあらむとたのもしう嬉しうて、今は又見ゆづる人もなく、親心にかしづきたて〻見聞え給ふ。かの人はつゝみ聞え給ひし藤の衣も改め給へつらむ、ながつきもまづ心なくて又おはしたり。「例のやうに聞えむ」と又御せうそこあるに、「心あやまりして、煩しうおぼゆれば」ととかう聞えすまひて對面し給はず。「思の外に心憂き御心かな。人もいかに思ひ侍らむ」と御文にて聞え給へり。「今はとて脱ぎ捨て侍りし程の心まどひに、なかなかまづみ侍りてなむ聞えぬ」とあり。恨み侘びて、例の人召してよろづにのたまふ。世にまらぬ心ぼそさのなぐさめにはこの君をのみ頼み聞えたる人々なれば、思ひにかなひ給ひて世の常のすみかにうつろひなどし給はむを、いとめでたかるべき事にいひあはせて、「唯入れ奉らむ」と皆語らひ合せけり。姫君その氣色をば深う見まり給はねど、かうとりわきて人めかしなづけ給ふめるに、うちとけてうしろめたき心もやあらむ、昔物語にも心もてやは、とあるかゝることもあめる、うちとくまじきは人の心にこそあめれと思ひより給ひて、せめてうらみふかくはこの君をおし出で

む、劣りざまならむにてだにさても見そめてはあさはかにはもてなすまじき心なめるを、ましてほのかにも見そめては慰みなむ、ことに出でゝはいかでかは、ふとさる事をまちとる人のあらむ、ほいになむあらぬとうけひく氣色のなかなるは、かたへは人の思はむ事をあいなう、淺き方にやなどつゝみ給ふならむと覺しかまふるを、氣色だに知らせ給はずば、罪もやえむと身をつみていとほしければ、よろづにうち語らひて、「昔の御おもむけも、世の中をかく心ぼそうて過ぐしはつとも、なかなか人わらへにかるがるしき心つかふなどのたまひおきしを、おはせし世の御ほだしにて行ひの御心を亂りし罪だにいみじかりけむを、今はとてさばかりのたまひし一言をだにたがへじと思ひ侍れば、心ぼそくなどもことに思はぬをこの人々のあやしう心ごはきものにくむめるこそいとわりなけれ。げにさのみやうのものと過ぐし給はむも、明け暮るゝ月日にそへても、御事をのみこそあたらしう心苦しう悲しきものに思ひ聞ゆるを、君だに世の常にもてなし給ひて、かゝる身の有樣もおもだゝしく慰むばかり見奉りなさばや」と聞え給へば、いかにおぼすにかと心憂くて「ひと所をのみやは、さて世にはて給へとは聞え給ひけむ。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、數そひたるやうにこそおぼされためりしか。心細き御なぐさめには、かう朝夕に見奉るよりいかなる方にか」となま怨めしく思ひ給へれば、げにといとほしうて、「猶これかれうたてひがひがしきものにいひ思ふべかめるにつけて思ひ亂れ侍るぞや」といひさし給ひつ。暮れ行くに、まらうどはかへり給はず。姫君いとむつかしとおぼす。辨參りて、御消息ども聞え傳へて、恨み給

ふを、ことわりなるよしを、つぶつぶと聞ゆれば、いらへも去給はずうち歎きていかにもて
なすべき身にかは、ひと所おはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれ奉りて、宿
世といふなる方につけて身を心ともせぬよなれば、皆例のことにてこそは人わらへになる
とがをも隱すなれ、あるかぎりの人は年つもりさかしげにおのが玄しは思ひつゝ、心をやり
て似つかはしげなる事を聞え去らすれど、こははかばかしきことかは、人めかしからぬ心ど
もにて、唯一方にいふにこそはと見給へば、引き動しつばかりきこえあへるも、いと心憂くう
とましうてだうぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ。中の君はかゝるすぢには今
少し心もえず、おほどかにて何とも聞きいれ給はねば「あやしうもありける身かな」と唯奥
ざまに向きておはす。「例の色の御ぞども、奉りかへよ」などそゝのかし聞えつゝ皆さる心す
べかめる氣色を、あさましく、げに何のさはり所かはあらむ、ほどもなくてかゝる御住ひの
かひなき、山なしの花ぞのがれむ方なかりける。まらうどは、かくけ去ように、これかれにも
口入れさせず、忍びやかにいつありそめけむことゝもなく、もてなしてこそと思ひそめける
事なれば、御心ゆるし給はずば、いつもいつもかくてすぐさむとおぼしのたまふを、このお
い人のおのが玄ゝ語らひてけ去ようにさゝめきなどす。さはいへど深からぬけにや、老いひ
がめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おぼし煩ひて、辨が參れるにのたまふ。「年比も人に
似ぬ御心よせとのみのたまひわたりしを聞きおき、今となりてはよろづにのこりなく頼み
聞えて、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしにたがふさまなる御心ばへのまじりて恨み

給ふめることそわりなけれ。世に人めきてあらまほしき身ならばかゝる御ことをも何かはも
てはなれても思はまし。されど昔より思ひ離れそめたる心にていと苦しきを、この君のさが
り過ぎ給はむも口惜しげに、かゝる住ひもたゞこの御ゆかりに所せくのみおぼゆるを、誠に
昔を思ひ聞え給ふ志ならば、同じ事に思ひなし給へかし。身をわけたる心のうちは皆ゆづり
て見奉らむ心地なむすべき。猶かやうによろしげに聞えなされよ」とはぢらひたるものから
あるべきさまをのたまひつゞくれば、いとあはれと見奉る。「さのみこそはさきざきも御氣
色を見給ふればいとよく聞えさすれど、さはえ思ひ改むまじき。兵部卿宮の御うらみ深さま
さるめれば、又そなたざまにいとよくうしろみ聞えむ」となむ聞え給ふ。「それも思ふやうな
る御事どもなり。二所ながらおはしまして、ことさらにいみじき御心盡してかしづき聞えさ
せ給はむには、えしもかく世にありがたき御事どもさしつどひ給はざらまし。かしこけれど
かくいとたつきなげなる御有樣を見奉るに、いかになりはてさせ給はむとうしろめたう悲
しうのみ見奉るを、後の御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御すくせどもにこそお
はしましけれとなむかつかつ思ひ聞ゆる。故宮の御ゆゐごん違へじとおぼしめす方はこと
わりなれど、それはさるべき人のおはせず、去なほどならぬ事やおはしまさむとおぼして誠
め聞えさせ給ふめりしにこそ。この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所をうしろ
安く見置き奉りていかにうれしからましと折々のたまはせしものを、ほどほどにつけて思
ふ人に後れ給ひぬる人は、高きもくだれるも心の外にあるわざにしさまにさすらふ類ひだに

こそ多く侍るめれ。それ皆例の事なめればもどきさいふ人も侍らず。ましてかくばかりことさらにも作り出でまほしげなる人の御有樣に、志深うありがたげに聞え給ふをあながちにも て離れさせ給ひて、おぼしおきつるやうに行ひのほいをとげ給ふとも、さりとて雲霞をやは」などすべてこと多く申し續くれば、いとにくゝ心づきなくおぼして、ひれふし給へり。中の君もあいなくいとほしき御氣色かなと見奉り給ひて、諸共に例のやうにおほとのごもりぬ。うしろめたういかにもてなさむとおぼえ給へど、ことさらめきてさしこもりかくろへ給ふべき物の隈だになき御住ひなれば、なよゝかにをかしき御ぞうへに引き着せ奉り給ひて、まだけはひあつき程なれば少しまろびのきて臥し給へり。辨はのたまひつるさまを、まらうどに聞ゆ。いかなればいとかうしも世を思ひ離れ給ふらむ、ひじりだち給へりしあたりにて常なきものに思ひ知り給へるにやとおぼすに、いとゞ我が心に通ひておぼゆれば、さかしだちにくゝもおぼえず。「さらば物ごしなどにも今はあるまじき事におぼしなるにこそはあなれ。今夜ばかりおほとのごもるらむあたりに、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人とくまづめなど、心知れるどちは思ひかまふ。宵少し過ぐるほどに風の音荒らかにうち吹くに、はかなきさまなる部などはひしひしとまぎるゝ音に、人の忍び給へるふるまひは、え聞きつけ給はじと思ひて、やをら導きつる。同じ所におほとのごもれるを、うしろめたしと思へど、常のことなれば、ほかほかにともいかゞ聞えむ。御けはひをもたどたどしからず、見奉り給へつらむと思ひけるに、うちもまどろみ給はねば、ふと聞き給ひてやをら起き出で給ひぬ。

いと疾くはひ隱れ給ひぬるに、何心もなく寢入り給へるをいといとほしく、いかにするわざぞと胸つぶれて諸共に隱れなばやと思へど、さもえ立ちかへられでわなゝくわなゝく見給へば、火のほのかなるにうちき姿にていとなれがほに、几帳のかたびらをひきあげて入りぬるを、いみじういとほしく、いかにおぼえ給はむと思ひながら、あやしき壁のつらに屏風を立てたるうしろのむつかしげなるに居給ひぬ。あらましごとにてだにつらしと思ひ給へるを、まいていかにめづらかにおぼし疎まむといと心苦しきにも、すべてはかばかしきうしろみなくて落ちとまる身と物悲しきを思ひ續け給ふに、今はとて山に登り給ひし夕の御さまなど只今の心地していみじく戀しく悲しくおぼえ給ふ。中納言は一人ふし給へるを、心しけるにやと嬉しくて心ときめきし給ふに、やうやうあらざりけりと見る。今少し美くしくらうたげなる氣色はまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれ惑ひ給へるを、げに心も知らざりけりと見ゆればいといとほしくもあり、又おしかへして隱れ給へらむつらさのまめやかに心うくねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ離れまじけれど、猶ほいの違はむ口惜しくて、うちつけにあさかりけりともおぼえ奉らじ。このひとふしは猶過ぐして遂にすくせのかれずは、こなたざまにならむも何かはこと人のやうにやはと思ひさまして、例のをかしくなつかしきさまに語らひてあかし給ひつ。老い人どもはまそじつと思ひて、中の君はいづこにかおはしますらむ、怪しきわざかなとたどりあへり。「さりともあるやうあらむ」などいふ。「大方例の見奉るに、皺のぶる心ちしてめでたくあはれに見まほしき御かたち有樣を、など

ていともてはなれては聞え給ふらむ。何かこれは世の人のいふめる、恐しき神ぞつき奉りつらむ」と齒はうちすきて、あいぎやうなげにいひなす女あり。又「あなまがまがし。なぞのものかつかせ給はむ。たゞ人に遠くておひ出でさせ給ふめれば、かゝる事にもつきづきしげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、はしたなくおぼさるゝにこそ。今おのづから見奉りなれ給ひなば思ひ聞え給ひてむ」など語らひて、「とくうちとけて思ふやうにておはしまさなむ」といふいふ寢入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬるこゝちしていづれとわくべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心ちして、「あひおぼせよ。いと心憂くつらき人の御さま見習ひ給ふなよ」など、のちせを契りて出で給ふ。我ながらあやしく夢のやうにおぼゆれど、猶つれなき人の御氣色、今一度見はてむの心に思ひのどめつゝ、例の出でゝふし給へり。辨參りていとあやしく、「中の君はいづくにおはしますらむ」といふを、いと恥しく思ひかけぬ御心地にいかなりけむことにかと思ひふし給へり。昨日のたまひし事をおぼしいでゝ、姫君をつらしと思ひ聞え給ふ。明けにける光につきてゞ壁の中のきりぎりすはひいで給へる。おぼすらむことのいといとほしければ、かたみに物もいはれ給はず。ゆかしげなう心憂くもあるかな、今より後も心ゆるびすべくもあらぬ世にこそと思ひ亂れ給へり。辨はあなたに參りて、あさましかりける御心つよさを聞き顯して、いとあまりふかく人にくかりけることゝいとほしくおもほれ居たり。「きし方のつらさは猶殘りあるこゝちして、よろづに思ひ慰めつるを、今夜なむ誠に恥しく身も投げつべき心ちする。捨てがたくおとし置き奉りたまへりけむ心苦しさを思ひ聞ゆる方てそ、又ひたぶるに身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけかけしきすぢは、いづかたにも思ひ聞えじ。憂きもつらきも、かたがたに忘られ給ふまじくなむ。宮などの恥しげなく聞え給ふめるを、同じくは高くと思ふ方ぞ殊に物し給ふらむと心得はてつれば、いとゞことわりに耻しくて又參りて人々に見え奉らむこともねたくなむ。よしかくをこがましき身の上、また人にだに洩らし給ふな」とゑんじ置きて、例よりも急ぎ出で給ふ。「誰が御ためもいとほしく」とさゝめきあへり。姫君もいかにしつることぞ、もしおろかなる心も物し給はゞと、胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人々のさかしらをにくしとおぼす。さまざま思う給ふに、御文あり。例よりは嬉しとおぼえ給ふもかつはあやし。秋の氣色も知らずがほに、青き枝のかたえは、いとこくもみぢしたるを、

「おなじえをわきてそめける山姫にいづれかふかき色ととはゞや」。さばかり恨みつる氣色もなくことずくなにことそぎて おしつゝみ給へるを、そこはかとなくもてなして止みなむとなめりと見給ふも心さわぎて、耳かしがましう「御かへり」といへば、聞え給へとゆづらむもうたておぼえて、さすがに書きにくゝ思ひ亂れ給ふ。

「山姫のそむるこゝろはわかねどもうつろふ方やふかきなるらむ」。ことなしひに書き給へるがをかしく見えければ、猶えゑんじはつまじくおぼゆ。身をわけてなどゆづり給ふ氣色は度々見えしかど、うけひかぬにわびてかまへ給へるなめり、そのかひなくかくつれなから

むも、いとほしくなさけなきものに思ひ置かれて、いよいよはじめの思ひかなひ難くやあらむ、とかく言ひ傳へなどすめる、おい人の思はむ所もかろがろしく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひすてむの心に、みづからもかなはざりけりと人わろく思ひ知らるゝを、ましておしなべたるすきものゝまねに、同じあたりに返す返す漕きめぐらむ、いと人わらへなる棚なし小船めきたるべしなどよもすがら思ひ明し給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、兵部卿宮の御方に參り給ふ。三條の宮燒けにし後は、六條院にぞうつろひ給へれば近くては常に參り給ふを、宮もおぼすやうなる御心地し給ひけり。紛るゝことなく、あらまほしき御住ひに、おまへの前栽外のには似ず、同しき花のすがたも木草の靡きざまも、ことに見なされて、遣り水にすめる月の影さへ繪に書きたるやうなるに、思ひつるもしるく起きおはしましけり。風につきて吹き來るにほひのいとしるくうちかをるに、ふとそれと驚かれて、御直衣奉り亂れぬさまに引き繕ひて出で給ふ。はしをのぼりもはてずつい居給へれば、猶うへになどものたまはで、高欄により居給ひて世の中の御物語聞えかはし給ふ。かのわたりのことをも物のついでにおぼし出でゝ、よろづに恨み給ふもわりなしや。みづからの心にだにかなひがたきをと思ふ思ふ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかにあるべきさまなど申し給ふ。あけぐれの程あやにくに霧わたりて空のけはひひやゝかなるに、月は霧に隔てられて木の下も暗くなまめきたり。山里のあはれなるありさま思ひいで給ふ。宮「このごろの程に。必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを猶煩しがれば、

「女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ心せばくやあめをゆふらむ」とたはぶれ給ふ。

「霧ふかきあしたのはらの女郎花こゝろをよせて見る人ぞみる。なべてやは」などねたましゐ聞ゆれば「あなかしかまし」とはてては腹立ち給ひぬ。年頃かくのたまへど、人の御有樣をいかならむとうしろめたく思ひしに、かたちなども見おとし給ふまじく推し量らるゝ心ばせの、ちかおとりするやうもやなどぞあやうく思ひ渡りしを、何事も口惜しくは物し給ふまじかめりと思へば、かのいとほしくうちうちに思ひたばかり給ふ有樣も違ふやうならむもなさけなきやうなるを、さりとてさはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、まづゆづり聞えて、いづ方の恨をもおはじなどまたに思ひ構ふる心をも知り給はで、心せばくとりなし給ふもをかしけれど「例のかろらかなる御心ざまに、物思はせむこそ心苦しかるべけれ」などおやかたになりて聞え給ふ。「よし見給へ。かばかり心にとまることなむまだなかりつる」などいとまめやかにの給へば、「かの心どもにはさもやとうち靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れや」とて、おはしますべきやうなどこまかに聞えまらせ給ふ。廿六日彼岸のはてにてよき日なりければ、人知れず心づかひしていみじく忍びてゐて奉る。ささいの宮など聞しめし出でゝはかゝる御ありさいみじくせいし聞え給へばいと煩しきを、せちにおぼしたる事なれば、さりげなくともてあつかふもわりなくなむ。ふなわたりなども所せければ、ことごとしき御やどりなども借り給はず。そのわたりいと近きみさ

うの人の家にいと忍びて宮をばおろし奉り給うておはしぬ。見咎め奉るべき人もなけれど、殿居人は僅に出でありくにも、氣色しらせじとなるべし、例の中納言殿おはしますとてけいめいしあへり。君だちなま煩はしく聞き給へど、うつろふ方ことにはしたなくてしかばと姫君はおぼす。中の君は思ふ方ことなめりしかばさりともと思ひながら、心憂かりし後はありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、心おかれて物し給ふ。何やかやと御せうそこのみ聞え通ひていかなるべき事にかと人々も心苦しがる。宮をば御馬にて、暗きまぎれにおはしまさせ給うて、辨召し出でゝ、「こゝもとに唯一言聞えさすべきことなむ侍るを、おぼし放つさま見奉りてしに、いと恥しけれどひたやごもりにてえやむまじきを、今おばしふかしてを、ありしさまには導き給ひてむや」など、うらもなく語らひ給へば、いづかたにも同じ事にこそはと思ひて參りぬ。さなむと聞ゆれば、さればよ思ひ移りにけりと嬉しくて、心おちゐて、かの入り給ふべき道にはあらぬ廂のさうじをいとよくさして對面し給へり。「一言聞えさすべきが又人聞くばかりのゝしらむはあやなきを、いさゝかあけさせ給へ。いといぶせし」と聞え給へど、「かくてもいとよく聞えぬべし」とて、あけ給はず。今はとうつろひなむをたゞならじとていふべきにや、何かは例ならぬ對面にもあらず、人にくゝいらへで、夜もふかさじなど思ひてかばかりも出て給へるに、障子のなかより御袖をとらへて引きよせていみじうらむれば、いとうたてもあるわざかな、何に聞きいれつらむとくやしうむつかしけれど、こしらへて出してむとおぼして、ことと人と思ひわき給ふまじきさまにかすめつゝ語らひ給へ

る心ばへなどいとあはれなり。宮は敎へ聞えつるまゝに、一夜の戸口によりて扇を鳴し給へば、辨も參りて導き聞ゆ。ささがさきもなれにける道のしるべ、をかしとおぼしつゝいり給ひぬるをも、姫君は知り給はでこしらへいれてむとおぼしたり。をかしうもいとほしくもおぼえて、うちうちに心も知らざりける恨みおかれむも罪さり所なき心地すべければ、「宮の慕ひ給ひつれば、え聞えいなびて、こゝにおはしつる。音もせでこそ紛れ給ひぬれ。このさかしだつめる人や、かたらはれ奉りぬらむ。なかぞらに人わらへにもなり侍りぬべきかな」とのたまふに、今少し思ひよらぬことの、めもあやに心づきなうなりて、「かうよろづに珍らかなりける御心の程を知らで、いふかひなき心をさなさも見え奉りにけるをこたりに、おぼしあなづるにこそは」といはむ方なく思う給へり。「今はいふかひなし。ことわりは返す返す聞えさせても、あまりあらばつみもひねらせ給へ。やんごとなき方におぼしよるめるを、すくせなどいふめるもの更に心にかなはぬものに侍るめれば、かの御志はことに侍りけるをいとほしく思ひ給ふるに、かなはぬ身こそおき所なく心憂く侍りけれ。猶いかゞはせむにおぼしよわりね。このみさうじのかためばかりいと強きも、誠に物淸く推し量り聞ゆる人も侍らじ。まるべといざなひ給へる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて明すらむとはおぼしなむやゝとてさうじをも引き破りつべき氣色なれば、いはむ方なく心づきなけれどこしらへむと思ひまづめて、「こののたまふすくせといふらむ方は目にも見えぬことにて、いかにもいかにも思ひたどられず。まらぬ涙のみきりふたがる心地してなむ。こはいかにもてなし給ふ

ぞと夢のやうにあさましきに、後の世のためしにいひいづる人もあらば、昔物語などに殊更にをこめきて作り出でたるものゝたとひにこそはなりぬべかめれ。かくおぼしかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推し量り給はむ。猶いとかくおどろおどろしう心憂くなとりあつめまどはし給ひそ。心よりほかにながらへば少し思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかきくらすやうにていとなやましきを。こゝにうちやすまむ。許し給へ」といとゝみじく侘び給へば、さすがにことわりをばいと能くのたまふが心恥しくらうたくおぼえて、「あが君、御心に從ふことの類ひなければこそかくまでかたくなしくなり侍れ。いひまらずにくゝ疎ましきものにおぼしなすめれば、聞えむ方なし。いとゞ世に跡とゞむべくなむおぼえぬ」とて、「さらばへだてながらも聞えさせむ。ひたぶるになうちすてさせ給ひそ」とて、許し奉り給へれば、はひいりてさすがに入りもはて給はぬを、いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひをなぐさめにて、明し侍らむ。ゆめゆめ」と聞えてうちもまどろまず。いとゞしき水の音に目もさめて、夜半の嵐に山鳥の心ちして明しかね給ふ。例の明け行くけはひに鐘の聲などは聞ゆ。いぎたなくて出で給ふべき氣色もなきよと、心やましくこわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。

「まるべせし我やかへりて惑ふべきこゝろもゆかぬあけぐれの道。かゝるためし世にありけむや」とのたまへば、

「かたかたにくらすこゝろを思ひやれ人やりならぬ道にまどはゞ」とほのかにのたまふ

を、いと飽かぬ心地すれば、「いかにこよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそ」などよろづに恨みつゝ、ほのぼのと明けゆくほどに、よべの方より出で給ふなり。いとやはらかにふるまひなし給へるにほひなど、えんなる御心げさうにはいひまらずまめ給へり。ねび人どもはいとあやしく心え難く思ひ惑はれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやはと慰めたり。暗き程にと急ぎ歸り給ふ。道の程もかへるさはいと遙けくおぼされて、心安くも え行き通はざらむことの、かねていと苦しきを、夜をや隔てむと思ひ惱み給ふなめり。まだ人さわがしからぬ朝の程におはしつきぬ。廊に御車よせており給ふ。ことやうなる女車のさましてかくろへ入り給ふに、皆わらひ給ひて、「おろかならぬ宮仕の御志となむ思ひ給ふる」と申し給ふ。まるべのをこがましさをば、いと妬くてうれへも聞え給はず。宮はいつしかと御文奉り給ふ。山里には誰もたれもうつゝの心地まぎ給はず思ひ亂れ給へり。樣々におぼしかまへけるを、色にも出し給はざりけるよとうとましうつらく姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見あはせ奉り給はず。知らざりしさまをも、さはさはとはえあきらめ給はで、ことわりに心苦しく思ひ聞え給ふ。人々もいかに侍りしことにかなど、御氣色見奉れど、おぼしほれたるやうにてたのもし人のおはすれば、あやしきわざかなと思ひあへり。御文もひきときて見せ奉り給へど、更に起きあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御つかひわびけり。

「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のさゝ原わきてきつるも」。書きなれ給へる墨つきなどのことさらにえんなるも、大かたにつけて見給ひしは、をかしうおぼえしを、後めたう物

思はしうて我さかし人にて聞えむもいとゆゝましければ、まめやかにあるべきやうをいみじくせめて書かせ奉り給ふ。ましをん色の細長ひとかさねに、みへがさねの袴具してたまふ。御使苦しげに思ひたれば、つゝませて供なる人になむ送らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふうへわらはなり。殊更に人に氣色もらさじとおぼしければ、よべのさかしがりしおい人のしわざなりけりとものしくなむ聞しめしける。その夜もかのしるべさそひ給へど、「冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば」とてとまり給ひぬ。例のことにふれてすさまじげによをもてなすとにくゝおぼす。いかゞはせむ、ほいならざりし事とて、おろかにやはと思ひよわり給ひて、御しつらひなどうちあはぬすみかのさまなれど、さる方にをかしくしなして待ち聞え給ひけり。遥なる御中道を、急ぎおはしましたりけるも、嬉しきわざなるぞかつはあやしき。さうじみは我にもあらぬさまにて、つくろはれ奉りたまふまゝに、濃き御ぞのいたくぬるれば、さかし人もうちなきつゝ、「世の中に久しくもとおぼえ侍らねば、明暮のながめにも唯御事をのみなむ心苦しう思ひ聞ゆるに、この人々もよかるべきさまのことゝ、聞きにくきまでいひしらすめれば、年經たる心どもには、さりとも世のことわりをも知りたらむはかばかしくもあらぬ心ひとつをたてゝ、かうでのみやは見奉らむと思ひなるやうもありしかと、只今かく思ひもあへず恥しきことゞもに亂れ思ふべくは更に思ひかけ侍らざりしに、これやげに人のいふめる遁れ難き御契なりけむ。いとこそ苦しけれ。少しおぼし慰みなむに、知らざりしさまをも聞えむ。にくしとなおぼしいりそ、罪もゞ得給ふ」とみぐしをな

でつくろひつゝ聞え給へば、いらへもえ給はねど、さすがにかくおぼしのたまふが、げにうしろめたく悪しかれともおぼしおきてじをを、人わらへに見苦しきことそひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、よろづに思ひ居給へり。さる心もなくあされ給へりしけはひだになべてならずをかしかりしを、まいて少し世の常になよび給へるは御志もまさるに、たはやすく通ひ給はざらむ山道のはるけさも、胸いたきまでおぼして、心深げにかたらひたのめ給へど、あはれともいかにとも思ひわき給はず。いひまらずかしづくものゝ姫君も、少し世の常の人げ近く親せうとなどいひつゝ、人のたゝずまひをも見なれ給へるは、物の恥しさもなのめにやあらむ。家にあがめ聞ゆる人こそなけれ、かく山ふかき御あたりなれば、人に遠く物深くてならひ給へるこゝちに、思ひかけぬ有樣のつゝましく耻しく、何事も世の人に似ずあやしう田舍びたらむかしとはかなき御いらへにてもいひ出でむ方なくつゝみ給へり。さるはこの君しもぞらうらうしくかどある方のにほひはまさり給へる。三日にあたる夜は「もちひなむ參る」と人々の聞ゆれば、殊更にさるべき祝ひのことにこそはとおぼして、御前にてせさせ給ふもたどたどしう、かつはおとなになりておきて給ふも、人の見るらむこと憚られて、おもてうち赤めておはするさま、いとをかしげなり。このかみ心にや、のどかにけ高きものから、人のためあはれになさけなさけしうぞおはしける。中納言殿より、「よべ參らむと思ひ給へしかど、宮仕のらうもまるしなげなめる世に、思う給へ恨みてなむ。今夜はざうやくもやと思ひ給へれど、殿居所のはしたなげに侍りし、亂り心地いとゞ安からでやすらはれ侍

る」と、みちのくに紙においつき書き給ひて、まうけのものどもこまやかに縫ひなどもせざりけるいろいろおしまきなどしつゝ、みそ櫃あまたかけごにいれて、おい人のもとに、人々の料にとて賜へり。宮の御方にさぶらひけるに從ひていと多くもえとり集め給はざりけるにやあらむ、たゞなる絹綾など、またには入れかくしつゝ、御料とおぼしき二くだり、いと清らにしたるを、單衣の御ぞの袖に、こだいのことなれど、

「さよ衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ」とおどし聞え給へり。こなたかなたゆかしげなき御ことを、恥しういとゞ見給ひて、御かへりもいかゞ聞えむとおぼし煩ふほど、御使かたへはにげかくれにけり。あやしきまも人をひかへてぞ御かへしたまふ。

「へだてなき心ばかりはかよふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ」。心あわたゞしく思ひ亂れ給へる名殘に、いとゞなほなほしきをおぼしけるまゝと、待ち見給ふ人は唯あはれにぞ思ひなされ給ふ。宮はその夜内に參り給うて、えまかで給ふまじげなるを、人知れず御心もそらにておぼし歎きたるに、中宮「猶かくひとりおはしまして世の中にすい給へる御名のやうやう聞ゆる、猶いと惡しき事なり。何事も物好ましく立てたる心なつかひ給ひそ。上もうしろめたげにおぼしの給ふ」と里ずみがちにおはしますを諫め聞え給へば、いと苦しとおぼして、御殿居所に出で給ひて御文かきて奉れ給へる。名殘もいたくうちながめておはしますに中納言の君參り給えり。そなたの心よせとおぼせば例よりも嬉しうて、「いかゞすべき、いとかく暗くなりぬめるを心も亂れてなむ」と歎しげにおぼしたり。能く御氣色を見奉らむとおぼして、「日ごろ經てかく參り給へるを、今夜さぶらはせ給はで急ぎまかで給ひなむ、いとゞよろしからぬことにや、おぼし聞えさせ給はむ。臺盤所の方にてうけたまはりつれば、人知れず煩はしき宮仕のしるしに、あいなきかんだうや侍らむと顏の色違ひ侍りつる」と申し給へば、「いと聞きにくゝぞおぼしのたまふや。多くは人のとりなすことなるべし。世にとがめあるばかりの心は、何事にかはつかふらむ。すべて所せき身の程こそなかなかなるわざなりけれ」とて、誠にいとはしくさへおぼしたり。いとほしう見奉り給ひて、「同じ御さわがれにこそはおはすなれ。今夜の罪にはかはり聞えさせて、身をもいたづらになし侍りなむかしこはだの山に馬はいかゞ侍るべき。いとゞものゝ聞えやさはり所なからむ」と聞え給へば、たゞくれにくれて更けにける夜なれば、おぼしわびて御馬にて出で給ひぬ。「御供にはなかなかつかふまつらじ、御うしろみを」とてこの君は内にさぶらひ給ふ。中宮の御方に參り給へれば、「宮は出で給ひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見奉るらむ。上きこしめしてはいさめ聞えぬがいふかひなきとおぼしのたまふこそわりなけれ」とのたまはす。あまた宮達のおとなびとゝのひ給へど、大宮はいよいよ若くをかしきけはひなむまさり給ひける。女一宮もかくぞおはしますべかめる。いかならむ折にかかばかりにても物近く御聲をだに聞え奉らむとあはれにおぼゆ。すいたる人の思ふまじき心づかふらむも、かうやうなる御なからひの、さすがにけ遠からずいりたちて心にかなはぬ折の事ならむかし、我が心

のやうに、ひがひがしき心のたぐひやは又世にあべかめる、それだに猶動きそめぬるあたりはえこそ思ひたへぬと思ひ居給へり。さぶらふかぎりの女房のかたち、心ざまいづれとなくわろびたるなくめやすくとりどりにをかしき中にも、あてにすぐれて目にとまるあれど、更に更に亂れそめじの心にていときすくにもてなし給へり。殊更に見えまらがふ人もあり。大方恥しげにもてまづめ給へるあたりなれば、うはべこそ心ばかりもてまづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげにすゝみたるまたの心もりて見ゆるもあるを、さまざまにをかしくもあはれにもあるかなと、立ちても居ても唯常なき有樣を思ひありき給ふ。かしこには、中納言殿の、ことごとしげにいひなし給へりつるを、夜更くるまでおはしまさで御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜中近うなりてあらましき風のきほひにいとものなまめかしく清らにて匂ひおはしたるも、いかゞおろかにおぼえ給はむ。さうじみも聊かうち靡きて思ひ知り給ふことあるべし。いみじくをかしげにさかりと見えて、引きつくろひ給へるさまは、まして類ひあらじはやとおぼゆ。さばかりよき人をおほく見給ふ御目にだに、けしうはあらずとかたちよりはじめて多くちかまさりしたりとおぼさるれば山里のおい人どもは、まして口つきにくげにうちゑみつゝ、「かくあたらしき御有樣を、なのめなるさはの人の見奉り給はましかばいかに口惜しからまし。思ふやうなる御すくせ」と聞えつゝ姫君の御心を、あやしくひがひがしくもてなし給ふを、もどきくちひそみ聞ゆ。盛り過ぎたるさまどもにあざやかなる花のいろいろ似つかはしからぬをさしぬひきつゝ、ありつかずとりつく

ろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見渡され給ひて、姫君、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見ればやせやせになりもてゆくを、おのがじゝはこの人どもゝ、われあしとやは思へる、うしろではまらず顏にひたひ髪をひきかけつゝ、色どりたる顏づくりをよくしてうちふるまふめり、我が身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむとうまろめたくて、見出して臥し給へり。恥かしげならむ人に見えむことはいよいよかたはらいたく、今一年二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身の有樣をと、御手つきのほそやかにかよわくあはれなるをさしいでゝも世の中を思ひつゞけ給ふ。宮はありがたかりつる御いとまの程をおぼしめぐらすに、猶心やすかるまじきことにこそはといと胸ふたがりておぼえ給ひける。大宮の聞え給ひしさまなど語り聞え給ひて、「思ひながらとだえあらむを、いかなるにかとおぼすな。夢にてもおろかならむにかくまでも參りくまじきを、心のほどやいかゞと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、身を捨てゝなむ。常にかくはえ惑ひありかじ。さるべきさまにて近くわたし奉らむ」といと深く聞え給へど、絶え間あるべくおぼさるらむは、おとに聞きし御心の程まるきにやと心おかれて、我が御ありさまからさまざま物歎しくてなむありける。明けゆくほどの空に妻戸押しあけ給ひて諸共にいざなひ出でゝ見給へば、霧わたれるさま所からのあはれ多くそひて、例のまばつむ船のかすかに行きかふ、跡の白浪めなれずもあるすまひのさまかなと、色なる御心にはをかしくおぼしなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほに美くし

げにて、かぎりなくいつきすゑたらむ姫君もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの我が方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなどうちとけて見まほしうなかなかなる心ちす。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいと物ふりて見え渡さるゝなど、霧晴れ行けばいとどあらましき岸のわたりを、「かゝる處にいかで年をへ給ふらむ」などうち涙ぐまれ給へるをいと恥しと聞き給ふ。男の御さまのかぎりなくなまめかしく清らにて、この世のみならず契りたのめ聞え給へば、思ひよらざりしことゝは思ひながら、なかなかかのめなれたりし中納言の恥しさよりはとおぼえ給ふ。かれは思ふかたことにて いといたくすみたる氣色の見えにくゝ恥しげなりしに、よそに思ひ聞えしはましてこよなく遙に、一くだりかき出で給ふ御返しだにつゝましくおぼえしを、久しうとだえ給はむは 心ぼそからむと思ひならるゝも、我ながらうたてと思ひまり給ふ。人々いたくこわづくりもよほし聞ゆれば、京におはしまさむ程、はしたなからぬ程にといと心あわたゞしげにて、心より外ならむ夜がれを、かへすがへすのたまふ。

「中絶えむものならなくにはし姫のかたしく袖や夜はにぬらさむ」。出でがてに立ち返りつゝやすらひ給ふ。

「たえせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき」。ことには出でねど物なげかしき御けはひ限なくおぼされけり。若き人の御心にまみぬべく、類ひすくなげなるあさげの姿を見送りて、名殘とまれる御移り香なども人知れず物あはれなるは、ざれたる御

心かな。今朝ぞものゝあやめも見ゆる程にて人々のぞきて見奉る。「中納言殿は、なつかしく恥しげなるさまぞそひ給へりける。思ひなしの今ひときはにや、この御さまはいとことに」などめで聞ゆ。道すがら心苦しかりつる御氣色をおぼしいでつゝ、立ちもかへりなまほしくさまあしきまでおぼせど、世の聞えを忍びて歸らせ給ふほどに、えたはやすくも紛れさせ給はず、御文は明くる日ごとにあまたかへり奉らせ給ふ。おろかにはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日數の積るをいと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかなと姫君はおぼし歎かるれど、いとゞこの君の思ひまづみ給はむによりつれなくもてなして、みづからだに猶かゝること思ひ加へじといよいよふかくおぼす。中納言の君も待ち遠にぞおぼすらむかしと思ひやりて、我があやまちにいとほしくて宮を聞えおどろかしつゝ絶えず御氣色を見給ふに、いといたくおもほしいれたるさまなれば、さりともとうしろやすかりけり。九月十日の程なれば、野山の氣色も思ひやらるゝに、時雨めきてかきくらし空のむら雲おそろしげなる夕暮、宮いとゞまづ心なくながめ給ひて、いかにせむと御心ひとつを出で立ちかねぬ給ふをり、推し量りて參り給へり。「ふるの山里いかならむ」とおどろかし聞え給ふ。いと嬉しとおぼして、諸共にいざなひ給へば、例のひとつ御車にておはす。分け入り給ふまゝにぞまいて眺め給ふらむ心のうちいとゞ推し量られ給ふ。道のほども唯この事の心苦しきを語らひ聞え給ふ。たそがれ時のいみじく心ぼそげなるに、雨は冷やかにうちそゝぎて秋はつる氣色のすごきに、うちまめりぬれ給へるにほひどもは、世のものに似ずえん

にてうちつれ給へるを、やまがつどもはいかゞ心惑ひもせざらむ。女ばら日ごろうちつぶやきつる名殘なくゑみさかえつゝおましひきつくろひなどす。京にさるべき所々に行きちりたるむすめどもめひだつ人二三人尋ねよせて參らせたり。年ごろあなづり聞えける心あさき人々、珍らかなるまらうどゝ思ひ驚きたり。姫君もをり嬉しく思ひ聞え給ふに、さかしら人のそひ給へるぞ恥しくもありぬべくなまわづらはしう思へど、心ばへののどかに物深くものし給ふを、げに人はかうは坐せざりけりと見あはせ給ふにありがたしと思ひまらる。宮を所につけてはいとことにかしづき入り奉りて、この君はあるじがたに心やすくもてなし給ふものから、まだまらうとゐの、かりそめなる方に出しはなち給へればいとからしと思ひ給へり。恨み給ふもさすがにいとほしくて物ごしに對面し給ふ。「たはぶれにくゝもあるかな。かくてのみや」といみじく恨み聞え給ふ。やうやうことわりまり給ひにたれど、人の御うへにても物をいみじく思ひまづみ給ひて、いとゞかゝる方を憂きものに思ひはてゝ、猶ひたぶるに、いかでかくうちとけしあはれと思ふ人の御心も必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、我も人も見おとさず心違はで止みにしがなと思ふ心づかひ深くし給へり。宮の御有樣なども問ひ聞え給へば、かすめつゝ、さればよとおぼしくのたまへば、いとほしくて、おぼしたるさま、氣色を見ありくやうなど語り聞え給ふ。例よりは心うつくしう語らひて、「猶かく物思ひ加ふる程少し心地も鎮まりて聞えむ」とのたまふ。人にくゝけどほくはもてはなれぬものから、さうじのかためもいとつよし。まひて破らむをばつらくいみじからむと

おぼしたれば、おぼさるゝやうこそあらめ、かるがるしくことざまに靡き給ふことは、はた世にあらじと、心のどかなる人はさはいへどよく思ひまづめ給ふ。「唯いと覺束なく物隔てたるなむ胸あかぬ心ちするを、ありしやうにて聞えむ」とせめたまへど「常よりも我が俤にて、つひにいかなるべき身にか」となげきがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮はまだ旅ねなるらむともおぼさで、「中納言のあるじがたに心のどかなる氣色こそうらやましけれ」とのたまへば、女君あやしと聞き給ふ。わりなくておはしましては程なくかへり給ふが飽かず苦しきに、宮も物をいみじくおぼしたる御心のうちを知り給はねば女がたには、又いかならむ人わらへにやと思ひなげき給へば、げに心づくしに苦しげなるわざかなと見ゆ。京にもかくろへて渡り給ふべき所もさすがになし。六條院には、左のおほいとの片つ方に住み給ひて、さばかりいかでかとおぼしたる六の君の御事をおぼしよらぬになまらめしと思ひ聞え給ふべかめり。すきずきしき御さまとゆるしなくそしり聞え給ひて、うちわたりにも憂へ聞え給ふべかめれば、いよいよおぼえなくて、出しする給はむもはゞかることといとおほかり。なべてにおぼす人のきはゝ宮仕のすぢにてなかなか心やすげなり。さやうのなみなみにはおぼされず。若し世の中うつりて、帝ささいのおぼしおきつるまゝにもおはしまさば、人よりたかきさまにこそなさめなど、只今はいと華やかに、御心にかゝり給へるまゝに、もてな

さむ方なく苦しかりけり。中納言は、三條の宮つくりはてゝ、さるべきさまにて渡し奉らむとおぼす。げにたゞ人は心やすかりけり。かくいと心苦しき御氣色ながら安からず忍び給ふからに、かたみに思ひ惱み給ふべかめるも心苦しくて、忍びてかくかよひ給ふよしを中宮などにも漏し聞しめさせて、ましばしのさわがれはいとほしくとも女がたの御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明し給はぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせ奉らばやなど思ひて、あながちにもかくろへず、ころもがへなどはかばかしく、誰かはあづからむなどおぼして、御帳のかたびらかべしろなど、三條の宮つくりはてゝわたり給はむ心まうけにまおかせ給へるを、まづさるべきやうなむなどいと忍びて聞え給ひて奉れ給ふ。さまざまなる女房のさうぞく、御めのとなどにものたまひつゝ、わざともせさせ給ひけり。十月一日ごろ「あじろもをかしきほどならむ」とそゝのかし聞え給ひて、紅葉御覽ずべう申し給ふ。親しき宮人ども殿上人のむつましくおぼすかぎりいと忍びてとおぼせど、所せき御いきほひなればおのづからことひろごりて、左のおほいとのゝ宰相の中將も參り給ふ。さてはこの中納言殿ばかりぞ上達部は仕うまつり給ふ。たゞ人はおほかり。「かしこにはろなう中やどりまを給はむを、さるべきさまにおぼせ。さきの春も花見に尋ね參りてしこれかれ、かゝるたよりにことよせて、時雨のまぎれに見奉り顯すやうもぞ侍る」などこまやかに聞え給へり。みすかけかへ、こゝかしこかきはらひ、岩がくれに積れる紅葉の朽葉少しはるけ、遣水のみ草はらはせなどぞまを給ふ。よしあるくだものさかなどさるべき人なども奉れ給へり。かつはゆかしげなけれ

どいかゞはせむ、これもさるべきにこそはと思ひゆるして心まうけし給へり。船にてのぼりくだり漕ぎめぐりおもしろく遊び給ふも聞ゆ。ほのぼの有樣見ゆるを、そなたに立ち出でゝ若き人々見奉る。さうじみの御有樣はそれと見わかねども、紅葉をふきたる船のかざりの錦と見ゆるに、聲々ふき出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。世の人の靡きかしづき奉るさま、かく忍び給へる道にもいと殊にいつくしきを見給ふにも、げに七夕ばかりにてもかゝる彥星の光をこそ待ち出でめなどおぼえたり。文作らせ給ふべき心まうけに博士などもさぶらひけり。たそがれどきに、御船さしよせてあそびつゝ文つくり給ふ。紅葉をうすくこくかざして海仙樂といふものを吹きておのおの心ゆきたる氣色なるに、宮はあふみの海の心地して、をち方人のうらみいかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出してうそぶきずしあへり。人のまよひすこしまづめておはせむと中納言もおぼして、さるべきやうに聞え給ふほどに、內より中宮のおほせごとにて、宰相の兄の衛門の督ことごとしき隨身ひきつれてうるはしきさまして參り給へり。かうやうの御ありきはまのび給ふとすれどおのづからことひろごりて、後のためしにもなるわざなるを、おもおもしき人數あまたもなくて俄におはしましにけるを聞しめしおどろきて、殿上人あまた具して參りたるにはしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しとおぼして物の興もなくなりぬ。御心のうちをばまらずゑひみだれて遊びあかしつ。今日はかくてとおぼすに、又宮の大夫さらぬ殿上人などあまた奉り給へり。心あわたゞしくて口をしかへり給はむそらなし。かしこには御文をぞ奉れ給

ふ。をかしやかなることもなく、いとまめだちておぼしけることゞもをこまごまと書き續け給へれど、人めまばゆうさわがしからむにとて御かへりなし。數ならぬ有樣にてはめでたき御あたりにまじらはむかひなきわざかなといとゞおぼしまとり給ふ。よそにて隔たる月日は覺束なさもことわりにさりともなどなぐさめ給ふを、近き程にのゝまとりおはして、つれなくすぎ給ふなむつらくも口惜しくも思ひ亂れ給ふ。宮はましていぶせくわりなしとおぼすことかぎりなし。あじろのひをも心よせ奉りていろいろの木の葉にかきまぜもてあそぶを、まも人などはいとをかしきことに思へば、人に從ひつゝ心ゆく御ありきに、みづからの御心地は胸のみつとふたがりて空をのみながめ給ふに、このふる宮のこずゑはいとことにおもしろく、常磐木にはひまじれる蔦の色なども物ふかげに見えてとほめさへすゞげなるを、中納言の君もなかなかたのめ聞えけるをうれはしきわざかなとおぼゆ。こぞの春御供なりし君達は花の色を思ひ出でゝ、後れてこゝに眺め給ふらむ心細さをいふ。かう忍び忍びに通ひ給ふとほのぎゝたるもあるべし、心まばらぬもまじりて、大かたにとやかくやと人の御うへはかゝる山がくれなれどおのづから聞ゆるものなれば、「いとをかしげにこそ物し給ふなれ。箏の琴上手にて、故宮の明暮遊びならはし給ひければ」などくちぐちにいふ。宰相中將、

「いつぞやも花のさかりにひとめ見し木の本さへや秋はさびしき」、あるじ方と思ひていへば、中納言、

「櫻こそ思ひまばらすれさきにほふ花もみぢもつねならぬ世を」。衛門督、

「いづこよりあきはゆきけむ山里の紅葉のかげはすぎうきものを」。宮の大夫、

「見し人もなき山里の岩がきにこゝろながくもはへるくずかな」。中においまばらひてうちなき給ふ。御子の若くおはしける世のことなど、思ひ出づるなめり。宮、

「秋はてゝさびしさまさる木のもとをふきなすぐしそ峯の松風」とていたう涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げにふかくおぼすなりけり。今日のたよりを過ぐし給ふ御心苦しさと見奉る人あれど、ことごとしく引き續きてえおはしましよらず。つくりける文どものおもしろき所々うちずじ、やまと歌もことにつけて多かれど、かやうのゑひなきのまぎれにましてはかばかしき事あらむやは。かたはし書きとゞめてだに見苦しくなむ。彼處には過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさきの聲々たゞならずおぼえ給ふ。心まうけまつる人々もいと口惜しとおもへり。姫君はまして猶音に聞く月草の色なる御心なりけり。ほのかに人のいふを聞けば「男といふものはそらごとをこそいとよくすなれ。思はぬ人をおもひがほにとりなす言の葉多かるもの」とこの人數ならぬ女ばらの昔物語にいふを、さるなほなほしき中にこそはけしからぬ心あるもまじるらめ、何事もすぢことなるきはになりぬれば、人の聞き思ふことつゝましう所せかるべきものと思ひしはさしもあるまじきわざなりけり。あだめき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひてかうやうにけ近き程までは、おぼしよらざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思の外に見奉るにつけてさへ、身の憂さを思ひそふるがあぢきなくもあるかな、かう見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに

思ひ給ふらむ、こゝにも殊に耻かしげなる人はうち交らねど、おのおの思ふらむが人わらへにをこがましき事と思ひ亂れ給ふに、心地も違ひていと惱しうおぼえ給ふ。さうじみはたまさかに對面し給ふ時、限なく深きことをたのめ契り給へれば、さりともこよなうはおぼし變らじと、覺束なきもわりなきさばかりこそは物し給ふらめと、心の中に思ひ慰め給ふかたあり。程經にけるが思ひ入られ給はぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎ給ひぬるを、つらうも口惜しうもおもほゆるに、いとゞ物あはれなり。忍びがたき御氣色なるを、人なみなみにもてなして、例の人めきたる住ひならば、かうやうにもてなし給ふまじきをなど、姉君はいとゞしくあはれと見奉り給ふ。我も世にながらへばかうやうなる事見つべきにこそはあめれ、中納言の、とざまかうざまにいひありき給ふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもてはなれて思ふともこしらへやる限こそあれ、或人のこりずまにかゝる筋のことをのみいかでと思ひためれば、心より外に遂にもてなされぬべかめり、これこそは返す返すもさる心ちして、世をすぐせとのたまひおきしは、かゝる事もやあらむのいさめなりけれ、さもこそは憂き身どもにてさるべき人々にも後れ奉らめ、やうのものと人わらへなる事を添ふる有樣にて、なき御影をさへ惱し奉らむがいみじさ、猶我だにさる物思ひにまづまず、罪などいと深からぬさきにいかでなくなりなむとおぼし沈むに、心ちも誠に苦しければ、物も露ばかり參らず、たゞなからむ後のあらましごとを明暮思ひ續け給ふに物心ぼそくて、この君を見奉り給ふもいと心苦しう、我にさへ後れ給ひていかにいみじう慰むる方なからむ、あた

らしくをかしきさまを、明暮のみものにて、いかで人々しうも見なし奉らむと思ひあつかふをこそ、人知れぬ行く先のたのみにも思ひつれ、限なき人にものし給ふとも、かばかり人わらへなるめを見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて經給はむは、類ひ少く心憂からむなどおぼし續くるに、いふかひもなく、この世には聊思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなめりと、心ぼそくおぼす。宮は立ちかへり、例のやうに忍びてと出で立ち給ひけるを、「内にかゝる御忍びごとにより山里の御ありきもゆくりかにおぼし立つなりけり。かるがるしき御有樣と、世人もまたに譏り申すなり」と衛門督の漏し申し給ひければ、中宮も聞しめし歎き、うへもいとゞゆるさぬ御氣色にて、大方心に任せ給へる御里住みのあしきなりけりときびしき事ども出で來て、内につと侍らはせ奉り給ふ。左の大臣殿の六の君をうけひかずおぼしたることなれど、おしたちて參らせ給ふべく皆定めらる。中納言殿聞き給ひてあいなく物を思ひありき給ふ。我があまりことやうなるぞや、さるべき契やありけむ、みこのうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、この君達の御有樣けはひもことなる事なくて、世に衰へ給はむことの惜しくもおぼゆるあまりに、人々しうもてなさばやとあやしきまでもてあつかはるゝに、宮もあやにくにとりもちてせめ給ひしかば、我が思ふかたはことなるにゆづらるゝ有樣もあいなくて、かくもてなしてしを思へばくやしくもありけるかな、いづれも我が物にて見奉らむに咎むべき人もなしかし、取り返すものならねどをこがましう心ひとつに思ひ亂れ給ふ。宮はまして御心にかゝらぬをりなく戀しううしろめたし

とおぼす。「御心につきておぼす人あらばこゝにまゐらせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。すぢことに思ひ聞えたまへるに、かるびたるやうに人の聞ゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と大宮は明暮聞え給ふ。時雨いたくしてのどやかなる日、女一宮の御方に參り給へれば、お前に人多くもさぶらはず、志めやかに御繪など御覽ずる程なり。御几帳ばかり隔てゝ、御物語聞え給ふ。限もなくあてにけだかきものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひ聞え給ひて、又この有樣になずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫君ばかりこそ、御おぼえの程内々の御けはひも心にくゝ聞ゆれど、うちいでむ方もなくおぼしわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣り聞ゆまじきぞかしなどまづ思ひ出づるに、いとゞ戀しさまさるなぐさめに御繪どものあまたちりたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの、戀する男のすまひなどかきまぜ、山里のをかしき家居など心々に世の有樣書きたるを、よそへらるゝこと多くて御目とまり給へば、少し聞え給ひて、かしこへ奉らむとおぼす。在五が物語を書きて、妹にさん敎へたる所の、人のむすばむといひたるを見て、いかゞおぼすらむ、少し近く參りより給ひて、「いにしへの人もさるべき程は隔なくこそならはして侍りけれ。いとうとうとしうのみもてなさせ給ふこそ」と忍びて聞え給へば、いかなる給にかとおぼすに、おしまきよせてお前にさし入れ給へるを、うつぶして御覽ずるみぐしのうち靡きてこぼれ出でたるかたそばばかりほのかに見奉り給ふが、飽かずめでたく、少し物のへだてたる人と思ひ聞えましかばとおぼすに、忍びがたくて、

「若草のねみむものとは思はねどむすぼゝれたるこゝちこそすれ」。お前なりつる人々は、この宮をば殊にはぢ聞えて物のうしろにかくれたり。ことしもこそあれ、うたて怪しとおぼせば、物ものたまはず。ことわりにてうらなくものをといひたる姫君も、ざれてにくゝおぼさる。紫のうへのとりわきてこの二所をばならはし聞え給ひしかば、あまたの御中に隔なく思ひかはし聞え給へり。世になくかしづき聞え給ひて、さぶらふ人々もかたほに少しあかぬ所あるはばしたなげなり。やんごとなき人の御むすめなどもいと多かり。御心のうつろひやすきは、珍しき人々にはかなく語らひつきなど志給ひつゝ、かのわたりをおぼし忘るゝ折なきものから、音づれ給はで日ごろ經ぬ。待ち聞え給ふ所は、絶間遠き心ちして、猶かうなめりと心ぼそうながめ給ふに、中納言おはしたり。なやましげに志給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心ち惑ふばかりの御惱みにもあらねど、ことつけて對面し給はず。驚きながら遙けき程を參り來つるを、猶かのなやみ給ふらむ御あたり近く」とせちに覺束ながり聞え給へばうち解けてすまひ給へる方のみすの前に入れ奉る。いとかたはらいたきわざと苦しがり給へど、けにくゝはあらで、御ぐしもたげ御いらへなど聞え給ふ。宮の御心も行かで、おはし過ぎにし有樣など語り聞え給ひて、「のどかにおぼせ。心いられしてな恨み聞え給ひそ」など敎へ聞え給へば、「こゝにはともかくも聞え給はざめり。なき人の御いさめは、かゝる事にこそと見侍るばかりなむいとほしかりける」とて泣き給ふ氣色なり。いと心苦しう、我さへ恥しき心ちして「世の中はとてもかくてもひとつざまにてすぐす事難くなむ侍るを、いか

なる事をも御覽じ知らぬ御心どもには、偏にうらめしなどおぼすこともあらむを、強ひておぼしのどめよ。うしろめたうは世にあらじとなむ思ひ侍る」など人の御上をさへあつかふも、かつはあやしくおぼゆ。よるよるはましていと苦しげにおぼしたれば、「猶例のあなたに」と人々聞ゆれど、「ましてかひの近きも中の君の苦しげにおぼしたれば、「猶例のあなたに」と人々聞ゆれど、「ましてかく煩ひ給ふほどの覺束なさを、思ひのまゝに參りきていだし放ち給へれば、いとわりなくなむ。かゝる折の御あつかひも誰かはかばかしく仕うまつる」など辨のおもとに語らひ給ひて、みずほふども始むべきことなどのたまふ。いと見苦しう殊更にもいとはしき身をと聞き給へど、思ひぐまなくのたまはむもうたてあれば、さすがにながらへよと思ひ給へる心ばへもあはれなり。又のあしたに、「少しもよろしくおぼさるや。昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、「日比ふればにや、今日はいと苦しうなむ。さらばこなたに」と言ひ出し給へり。いとあはれにいかに物し給ふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御氣色なるも胸つぶれておぼゆれば、近うまかでよろづの事を聞え給ふ。「苦しうてえ聞えず、少しためらはむ程に」とて、いとかすかにあはれなるけはひを、限なう心苦しうて歎き居給へり。さすがにつれづれとかくておはしがたければいとうしろめたけれどかへり給ふ。「かゝる御住まひは猶苦しかりけり。處去り給ふにことよせてさるべき處にうつろはし奉らむ」など聞えおきて、阿闍梨にも、御いのり心に入るべくのたまひ知らせて出で給ひぬ。この君の御供なる人の、いつしかとこゝなる若き人を語らひよりたるありけり。おのが方ゝの物語に、「かの宮の

御忍びありき制せられ給ひて、内にのみ籠りおはしますこと、左の大臣殿の姫君をなむあはせ奉り給ふべかなるを、女方は年比の御ほいなれば、おぼし滯ることなくて、年の内にありぬべかなり。宮はまぶまぶにおぼして、うちわたりにもたゞすきがましき事に御心を入れて、みかどさいの御いましめにまづまり給ふべくもあらざめり。我が殿こそ猶あやしう人に似給はず、あまりまめにおはしまして、人にはもてなやまれ給へ。こゝにかく渡り給ふのみなむ、めもあやにおぼろけならぬことゝ人申す」などかたりけるを「さこそいひつれ」など人々の中にて語るを聞き給ふにも、いとゞ胸ふたがりて、今はかぎりにこそあなれ、やんごとなき方に定まり給はぬほどの、なほざりの御すさびにかくまでおぼしけむを、さすがに中納言などの思はむ所をおぼして、言の葉のかぎり深きなりけりと思ひなし給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとゞ身の置所なき心地して、まをれふし給へり。よわき御心ちは、いとゞ世に立ちとまるべうもおぼえず、恥しげなる人々にはあらねど、思ふらむところ苦しければ聞かぬやうにてね給へるを、姫君、物思ふ時のわざと聞きしうたゝねの御さまの、いとらうたげにて、かひなを枕にてね給へるに、御ぐしのたまりたる程など、ありがたう美くしげなるを見やりつゝ、親の諫めし言の葉も、返す返す思ひ出でられ給ひて悲しければ、罪深くなる底にはよもまづみ給はじ、いづくにもいづくにもおはすらむ方にむかへ給ひてよ、かういみじく物思ふ身どもをうちすて給ひて、夢にだに見え給はぬよと思ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いとすごくまぐれて、木の下吹きはらふ風の音などたとへむかたなく、きしかた

行くさき思ひ續けられてそひふし給へるさま、あてにかぎりなく見え給ふ。白き御ぞに、髮はけづることもあ給はで程經ぬれど迷ふすぢなくうちやられて、日ごろに少し青み給へるしもなまめかしさまさりて、ながめ出し給へるまみひたひつきのほども、見知らむ人に見せまほし。ひるねの君風のいと荒きに驚かされて起きあがり給へり。山吹薄色など花やかなる色あひに、御顏は殊更にそめにほはしたらむやうに、いとをかしうはなばなとして聊物思ふべきさまもあ給へらず。「故宮の夢に見え給へる、いと物おぼしたるけしきにて、このわたりにこそほのめき給へれ」と語り給へれば、いとゞしく悲しさそひて、「うせ給ひて後、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らねとて二所ながらいみじう泣き給ふ。このごろ明暮思ひ出で奉れば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ處に尋ね參らむ、罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやり給ふ。人の國にありけむ香の煙ぞいとえまほしくおぼさるゝ。いと暗うなるほどに、宮より御使あり。をりは少し物思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見給はず。「猶心うつくしくおいらかなるさまに聞え給へ。かうてはかなうもなり侍りなば、これより名殘なき方にもてなし聞ゆる人もや出でこむとうしろめたきを、まれにもこの人の思ひ出で聞え給はむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ賴まれ侍る」と聞え給えば、「おくらさむとおぼしけるこそいみじう侍れ」と、いよいよ顏を引き入れ給ふ。「限あれば片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世のさすがになげかしきも、誰がために惜しき命にか

は」とておほとなぶら參らせて見給ふ。例のこまやかに書き給ひて、

「ながむるは同じ雲井をいかなればおぼつかなさをそふる時雨ぞ」。かく袖ひづるなどいふこともやありけむ。耳なれにたるを、猶あらじことゝ見るにつけてもうらめしさまさり給ふ。さばかり世にありがたき御ありさまかたちを、いとゞいかで人にめでられむと、好しくえんにもてなし給へれば、若き人の心よせ奉り給はむもことわりなり。程經るにつけても戀しう、さばかり所せきまで契り置き給ひしを、さりともいとかくては止まじと思ひ直す心ぞ常にそひける。「御かへり今夜參りなむ」と聞ゆれば、これかれそゝのかし聞ゆれば、たゞひとことなむ。

「あられふる深山のさとは朝夕にながむる空もかきくらしつゝ」。かくいふは神無月のつごもりなりけり。月もへだゝりぬるよと宮はまづ心なくおぼされて、今夜今夜とおぼしつゝ、さはりおほみなる程に、五節など疾く出できたる年にて、うちわたり今めかしくまぎれがちにて、わざともなけれどすぐい給ふ程に、あさましう待ちどほなり。はかなう人を見給ふにつけても、さるは御心にはなるゝ折なし。左の大臣殿のわたりの事、大宮も猶「さるのどやかなる御うしろみをまうけ給ひて、その外の尋ねまほしう おぼさるゝ人あらば參らせておもおもしくもてなし給へ」と聞え給へど、「暫しさ思う給ふるやう」など聞えすまひ給ひて、誠につらきめはいかでか見せむなどおぼす御心を知り給はねば、月日にそへて物をのみおぼす。中納言も、見しほどよりはかろびたる御心かな、さりともと思ひ聞えけるもいとほ

しく心からおぼえつゝ、をさをさ參り給はず、山里にはいかにいかにととぶらひ聞え給ふ。この月となりては、少しよろしうおはすと聞き給ひけるに、おほやけわたくし物さわがしきころにて、五六日人も奉り給はぬに、いかならむと打ち驚かれて、わりなきことの繁さをうち捨てゝまうで給ふ。ずほふは怠りはて給ふまでとのたまひ置きけるを、よろしくなりにけるとて、阿闍梨をも返し給ひければ、いと人ずくなにて、例のおい人出できて御ありさま聞ゆ。「そこはかといたき處もなく、おどろおどろしからぬ御惱みに物をなむ更に聞し召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはしますうちに、この宮の御事出で來にし後、いとゞ物おぼしたるさまにて、はかなき御くだものだに御覽じいれざりしつもりにや、あさましく弱くなり給ひて更に頼むべくも見え給はず、世に心憂く侍りける身の命の長さにて、かゝる事を見奉れば、まづいかで先だち聞えなむと、思ふ給へいりて侍り」といひもやらず泣くさまことわりなり。「などか斯とも告げ給はざりける。院にも内にもあさましう事繁きころにて、日ごろもえ聞えざりつる覺束なさ」とてありし方に入り給ふ。御枕がみ近くて物聞え給へど、御聲もなきやうにてえいらへ給はず。「かく重くなり給ふまで、誰も誰も告げ給はざりけるがつらう思ふに、かひなき事」と恨みて、例の阿闍梨、大方世にまるしありと聞ゆる人のかぎり、あまたさうじ給ふ。御修法どきやう明くる日より始めさせ給はむとて、とのひとあまた參り集ひ、かみしもの人立ち騒ぎたれば心ぼそさの名殘なくたのもしげなり。暮れぬれば、例のあなたにと聞えて、御湯づけなど參らせむとすれど、近くてだに見奉らむとて、南の

廂は僧の座なれば、東おもての今少しけ近き方に屏風など立てさせて入り居給ふ。中の君苦しとおぼしたれど、この御中を猶もてはなれ給はぬなりけりと皆思ひて、疎くももてなし隔て奉らず。そやよりはじめて、法華經を不斷讀ませ給ふ。聲たふときかぎり十二人していとたふとし。火はこなたの南のまにともして内はくらきに、几帳をひきあげて少しすべり入りて見奉り給へば、おい人ども二三人ぞさぶらふ。中の君はふと隠れ給ひぬれば、いと人ずくなに心ぼそくてふし給へるを、「などか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手をとらへて驚かし聞え給へば、「心地にはおぼえながら物いふがいと苦しくてなむ。日ごろ音づれ給はざりつれば、覺束なくて過ぎ侍りぬべきにやと口惜しうこそ侍りつれ」と息のまたにのたまふ。かくまたれ奉りつる程まで、參りこざりけることゝて、さくりもよゝとなき給ふ。御ぐしなど少しあつくぞおはしける。「何の罪なる御心ちにか、人の歎きおふこそかくはあなれ」と御耳にさしあてゝ物をおほく聞え給へば、うるさうも恥しうもおぼえて、顔をふたぎ給へり。いとゞなよなよとあえかにて臥し給へるを、空しう見なしていかなる心ちせむと胸もひしけておぼゆ。「日ごろ見奉り給へらむ御心地も、安からずおぼされつらむ。今夜だに心安くうちやすませ給へ。とのゐ人さぶらふべし」と聞え給へば、うしろめたけれど、さるやうこそはとおぼして、少ししぞき給へり。ひたおもてにはあらねどはひよりつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥しけれど、かゝるべき契こそありけめとおぼして、こよなうのどやかにうしろやすき御心を、かの片つかたの人に見くらべ奉り給へばあはれとも思ひ知られにたり。空しくなりな